プラトン全集 6

アルキビアデス Ⅰ

田中美知太郎訳

アルキビアデス Ⅱ

ヒッパルコス

恋がたき

田之頭安彦訳

岩波書店

編集

田中美知太郎
藤 沢 令 夫

目次

凡例

一、本全集は底本として、バーネット版プラトン全集(J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts)を用い、これと異なる読みをした箇所は注によって示す。

二、訳文上欄の数字とＢＣＤＥは、ステファヌス版全集(H. Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, 1578)のページ数と各ページ内のＡＢＣＤＥの段落づけとの対応——おおよその——を示す(ただしＡは省略した)。引用は、このページ数と段落により示される(例えば『パイドロス』253Ｃ)。

三、各対話篇における章分けは、一八世紀以降フィッシャー(J. F. Fischer)の校本に由来すると見られる一般に慣用のものに従う。ただし対話篇により章別の一定していないものもあり、この場合は適宜区別を設けた。

四、対話篇名につけられている副題(ないものもある)は、ローマ時代のプラトン全集(トラシュロス)以来の、あるいはさらに古い伝承によるものである。所伝によって異同のある場合は、適切と判断されるものを選んでつけた。

五、ギリシア語の片かな表記は、ΦΧΘとΠΚΤとを同じように「プ」「ク」「ト」とし、母音の長短は普通名詞においてのみ区別し(例、ソピアー)、固有名詞においては区別しない(例、ソークラテースでなく、ソクラテス)。

六、〔 〕の括弧は訳者による文意の補足を示す。

七、略記号　DK=H. Diels u. W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*.　Diog. L.=Diogenes Laertios.　古注=*Scholia Platonica* (ed. W. C. Greene).

八、本全集における対話篇の収録順と各巻への配分は、右のトラシュロス編全集における九つの四部作集(tetralogia)の順序と括り方に従っている。

アルキビアデス I

——人間の本性について——

田中美知太郎訳

登場人物

ソクラテス

アルキビアデス

一

103 **ソクラテス**　クレイニアスの子よ、きみはさだめし奇妙な思いをしているだろうね。ぼくはいちばんはじめからきみが好きで、それ以来、ほかの連中はきみの愛をもうあきらめてしまっているのに、ぼくだけがひとりまだ思い切れずにいるのだからね。そしてほかの連中は、うるさがられるくらいに、きみと言葉をかわしていたのに、ぼくときたら、この長年月きみに言葉をかけることさえしなかったのだからね。

しかしそういうことをしなかった原因は、人間のうちにあるのではなくて、何か人間以上のもの(ダイモーン)(1)が反対していたからなのだ。それがどういう力をもつものなのかということは、またあとできみに話してあげよう。B そのダイモーンの反対が、今はもうなくなったので、それでこうやってきみのところへやってきたわけなのだ。これからもそれは反対しないだろうとぼくは楽観している。

そういうわけで、ぼくはこの永い時間、よく観察していたので、きみの恋人たちに対する関係は、すっかりわかってしまったのだ。それは自信満々の連中がたくさんいたのだが、ひとり残らずきみの自信に先を越されて、敗退することになってしまったのだ。何できみがかれらの上を越すような自信をもったのか、その理由となるものをもう少し立ち入って考えてみたいと思う。きみの立場は、何ごとも世の人の助けは少しもいらないという立104 場なのだ。きみに具(そな)わっているものは、身体のことからはじめて最後は精神まで、何ひとつ不足がないほどの大をなしているからだ。きみの信ずるところでは、まず第一に美しいことも大きいことも、このうえなしのきみな

のだからねえ。そしてこのことなら、見れば誰にでもわかることで、きみの信じていることにいつわりはないのだ。次にはきみの家がらが、ギリシア第一の大都を祖国として、そのなかでも勢いのさかんなこと第一という家がらなのだということや、この地においては、父がたの親類縁者で、いざとなればきみを助けてくれることのできる、このうえなくりっぱな人たちが、絶対に多いのだし、母がたにも、これに少しも劣ることのない人が、同

B

じようにたくさんいるのだというのが、きみの自信なのだ。しかしいまぼくが言った人たちすべてを合わせても、それよりもっときみの力になるのは、クサンティッポス家のペリクレス[2]だときみは信じている。この人をきみのなくなったお父さんは、きみたち兄弟の後見人に指定していったのだからね。ペリクレスなら、この国はむろんのこと、全ギリシアにおいても、またギリシア以外の多数大部族のうちにあっても、自分の思うとおりを何でも行なう力をもっているのだからねえ。このほかぼくは、きみが金持の一人だということをつけ加えたいと思うが、

C

しかしこの点はちっとも、きみの自慢にしている点ではないように思われる。だから、以上すべての点にわたって、きみは自信をもち、誇りをもっているのに、相手の恋人たちは、いくぶ

1 はっきりした神格ではなく、もっと漠とした鬼神的存在。ソクラテスは自己の内部に聞える一種の声のようなものをこのダイモーンの合図と解したのである。それはいつでも、ソクラテスが何かしようとしているのを差し止める合図となるのであって、けっして、何かをせよ、と勧めるものでなかった。『ソクラテスの弁明』(31C〜D)参照。

2 前四四四年から四二九年の間は、いわゆるペリクレス時代といわれ、ペルシア戦争に勝利を得たアテナイは、この時ペリクレスの指導のもとに黄金時代を現出した。史家トゥキュディデスは彼のことを「言論においても行為においてももっとも有能有力の人」(『歴史』第一巻(一三九))と語り、彼の指導力のすぐれていることについては、その治世を「名前は民主制であっても、実際は第一人者の支配」(同書第二巻(六五))と評したほどである。

ん引け目があるので、きみは勝ち、かれらは負けるという結果になった。そしてその点をきみは見のがしはしないのだ。それだからこそぼくは、きみが奇妙に思っているということは充分承知しているのだ。いったい何の考えがあって、わたしがこの恋を思い切ろうとしないのか。また何の見こみがあって、もうほかの人たちは退散してしまったのに、わたしだけがあとに残ってがんばっているのかとね。

二

D

アルキビアデス　ええ、おまけにたぶん、ソクラテス、あなたは御存知ないでしょうが、ちょっとのところで、ぼくはあなたに先を越されてしまったのです。というのはですね、ぼくのほうから先に、あなたのところへうかがって、ちょうどそのことを質問したいと思っていたのです。あなたはいつでもどこでも、ぼくのいるところには、いつもうるさいくらいたいへん熱心に出てこられるけれども、それは何をいったい御希望なのか、何の見こみがあってのことなのですかとね。なぜなら実際に、わたしはあなたの御用が何なのか、奇妙でたまらないからです。そしてそれがうかがえるなら、ありがたいと思います。

ソクラテス　してみると、きみはぼくの話を、どうやら大のり気で聞いてくれるらしいね。もしきみの言うように、ぼくの考えを知りたいというのが、きみの熱心な望みだとしたらね。それではぼくは、きみにしんぼう強く聞いてもらえるものとして、話をすることにしよう。

アルキビアデス　ええ、どうぞそのつもりで。まあしかし、とにかく話を聞かせてください。

E

ソクラテス　いいかね、よく考えてくれたまえよ、なにしろぼくは、始めるのにやっとの思いをしたのだから、

こんどはまたなかなか止めるにやめられないとしても、別に不思議はないだろうからね。

アルキビアデス　よき人よ、どうか言ってみて下さい。ぼくは聞いていますから。

ソクラテス　言わずばなるまい。それでは、恋する者に対して弱味をもたない人を相手にするというのは、恋する身にとってまことにつらいことながら、思い切ってぼくの考えを打ちあけなければならない。それはつまり、ぼくとしては、アルキビアデス、きみがいまぼくの列挙したようなもので満足し、人生いかに生くべきかということも、その線で考えているような人だと見たならば、もうとっくにこの恋からはさめてしまっていただろう。

105 少なくともぼくが自分自身に言いきかせるところでは、そうなっていただろう。しかし現実にはまたもっと別の考えが、きみにあることをきみ自身に向かって、ぼくは訴えるつもりだ。それによってまたきみは、ぼくがきみという人にずうっと注意を払ってきたことを知ることにもなるだろう。つまりぼくの見るところでは、きみは神さまのうちの誰かがきみに向かって、アルキビアデスよ、おまえはどちらを欲するのだ、いまおまえがもっているものを、そのままもちつづけて生きることをか、それとももっと多くのものを獲得することがおまえに許されないなら、すぐにも死んでしまうということなのをかと問われるなら、きみはむしろ死を選ぶだろうとぼくには思われるのだ。しかし何をいったい望みにしてきみは生きるのか、それを今ぼくが明[あ]かしてあげよう。きみの考

B えは、すぐにもアテナイ民衆の前に出て行って――その資格を得る年齢(1)は近日のうちに来るはずなのだが――そうしたら、さっそく打って出て、ペリクレスでも、ほかの誰でも、これまでのひとは一人も及ぶ者がないくらい、

1　アテナイでは青年男子は一八歳になると兵役の義務に服し、二ヵ年の訓練を経たのち二〇歳で完全な市民権を得た。

きみが高い名誉をもって報いられなければならない人物だということを、アテナイ人に見せてやろうという考えであり、そういうところを見せれば、この国において最大の有力者となるだろうし、またここで最大の人物だということになれば、ほかのギリシア人のところでもそういうことになるだろう。否、ギリシア人の間ばかりでなく、われわれと同じ陸地に住むギリシア人以外の人たちの間でも、そうなるだろうと考えている。そしてさらにまた、同じその神さまがきみに向かって、おまえが権力者の地位にあるのは、ここヨーロッパだけのことでなければならないのであって、アジアに渡ることはおまえに許されていないし、かの地のことに手をつけることもまかりならんのだと言われるならば、この場合もまたきみは、それだけに限られた条件では生きる気がしない、いわば全人類にきみの名ときみの力を行きわたらせるのでなければ、生きる気がしないだろうとぼくには思われるのだ。そしてきみの考えでは、ペルシア王のキュロス(1)やクセルクセス(2)以外には、ものの数にはいる人間は一人もいないことになるのだと思う。

C

さて、きみの望みがこういうものであるということは、当て推量ではなくて、ぼくにはほんとうによくわかっているのだ。そこでたぶん、きみはぼくの言うことがほんとうだと知るから、こうたずねるだろう。そうすると、ソクラテスよ、これはあなたの言おうとしていることにとって、いったい何の関係があるのですかとね。ぼくのしかし、きみに対する答えはこうなるのだ、クレイニアスとデイノマケの愛子たるきみよ。これらきみの志すところのものすべてを完成させるには、ぼくがいなければ不可能なのだ。ぼくはそれほど大きな力を、きみの仕事ときみ自身に対してももっているのだと信じている。そして神がぼくに対して、以前はきみと言葉を交えることを許さず、その許しが出るのを、ぼくがじっと待っていたのも、まさにその故であると思うのだ。なぜなら、ちょ

D

E うどきみがこの国で、絶対に国家有為の人物だというところを見せようと思い、そういう点を見せれば、何ごとにもたちまち権力をふるえるようになるだろうと期待しているように、ぼくもまたきみのところで絶大の影響力をもてるだろうと当(あて)にしているのだ。もしぼくがきみにとって絶対に貴重な存在だというところを見せ、きみが熱望している力は、きみの後見人も親類も、ほかに誰もこれを授ける能のある者はないのであって、ただぼくだけが、むろん、神の助けがあってのことだけれども、これをよくするのだということを明らかにすればだね。だから、きみがもっと年若で、こういう大望に胸をふくらませるようにならないうちは、ぼくの思うに、神はきみと言葉を交えることを許そうとしなかったのだが、これはむだに言葉を交えさせないためだったのだ。しかし今

106 はもう許しが出ていて、それがすすめられているのだ。今ならきみも、ぼくの言うことに耳を傾けてくれるだろうからね。

三

アルキビアデス どうもたいへんな、ソクラテス、あなたは変り者だということが、いまあなたが話をはじめられたのを聞いて、わたしにはあらためてはっきりしてきましたよ。それはあなたが何も言わないで、ぼくの後

1 キュロス一世、ペルシア王朝の創始者。在位期間は前五五九年から五二九年まで。

2 ダリウス(ダレイオス)の子。在位期間は前四八五―四六五年。当時ペルシアはイオニアにあったギリシア勢力と衝突。ダリウスは二度ギリシアに遠征したが破れた。クセルクセスは父の遺志をついでギリシア討伐軍を起し、ギリシアに侵入、アテナイを占領したが、サラミスの海戦で大敗し、撤退を余儀なくされた。

について来られた時より、もっと変に見えるのです。もっとも以前だって、見たところはやはりひどく変でしたがね。まあとにかくそれでは、ぼくの志しているところが、それであるか否かは、あなたがすっかり承知しておられるようだし、ぼくがそれを否定してみたところで、あなたを説得するのには何の役にも立たないでしょう。まあ、いいです。それはそれということにしましょう。しかしぼくの意中が、かりにそういうものだとしても、それがぼくのために成就されるのは、あなたを通してであり、あなたがなければ、それは成就できないだろうというのは、どうしてなのでしょうか。説明していただけますか。

B

ソクラテス　きみのいう説明とは、あのきみが聞きなれている長広舌のことかね。というのは、ぼくのやり方はそういうのではなくって、むしろぼくの信ずるところでは、以上のことがらについて、その然るべき所以（ゆえん）を、きみにはっきりわからせてあげることは、一つだけきみにちょっと手つだってもらえるなら、できるわけなのだ。

アルキビアデス　いやそれは、あなたの言われる手つだいがむずかしいものでさえなければ、やります。

ソクラテス　そもそも問いに答えるのがむずかしいことだと思えるかね。

アルキビアデス　いいえ、むずかしいことはありません。

ソクラテス　それなら答える役をしてくれたまえ。

アルキビアデス　問いをうかがいましょう。

ソクラテス　それならぼくは問いを出すのに、ぼくの言うきみの志が、きみの意中にあるものとしておいてもいいのかね。

C

アルキビアデス　ええ、御希望なら、そうしておいて下すって結構です。それがまた、あなたが言おうとされ

ることがいったい何なのかを知るためにもなりますからね。

ソクラテス さあ、それではとりかかることにしよう。すなわちきみの意中は、ぼくの言っているように、近々のうちにアテナイの国会議員として打って出たいということにあるのだ。だから、発言台にあがろうとしているきみをつかまえて、アルキビアデスよ、きみはいま立ちあがって助言しようとしているが、これは何についての審議が、アテナイ人の考えで行なわれているからなのかね。はたしてそれは、きみのほうがかれらよりもよく知っていることがらについてだからなのかね、とこうぼくが質問するとしたら、何ときみは答えるだろうか。

D

アルキビアデス それはむろん、かれらよりぼくのほうがよく知っていることがらについて、と言うでしょうね。

ソクラテス つまりちょうどきみの知っていることがらについては、きみはいい助言をすることができるのだ。

アルキビアデス ええ、それに違いありません。

ソクラテス では、きみの知っているものというのは、他のひとから学んだものか、自分で発見したものしかないのではないか。

アルキビアデス ええ、それ以外にどんなものがあるでしょうか。

ソクラテス それでは、きみが学びたいとも思わず、自分で探し求める気もないのに、何かを学んだり、発見したりすることが、ありえただろうか。

アルキビアデス ありえません。

ソクラテス では、どうかね。きみが知識をもっていると信じていたことがらについて、これを学びたいと思

ったり、探求したいと思ったりしただろうか。

アルキビアデス　むろん、そういうことはありえません。

E

ソクラテス　すると、今たまたまきみが知識をもっていることがらについては、それを知っているときみが考えなかった時があったことになる。

アルキビアデス　ええ、そうならなければなりません。

ソクラテス　さて、ところで、きみが何を学んで知っているかということは、ぼくもだいたいは知っている。しかしぼくの見落しが何かあったら、言ってくれたまえ。いいかね、きみが学んだのは、ぼくの記憶するところでは、文字と、キタラをひくことと、角力（すもう）をとることだった。笛をふくことは、きみは学びたがらなかったからね。〔つまり笛を吹くことを除いた〕以上が、きみの知識をもっていることがらなのだ。もし何かきみが学んでいて、ぼくの見のがしているものがあるなら別だが、しかしぼくは、夜でも昼でもきみが家から外に出るのを見のがすことはないと信じている。

アルキビアデス　いや、それ以外の勉強に行ったことはありません。

四

107

ソクラテス　すると、どっちなのかね。アテナイ人が文字について、正しく書くにはどうすればいいかを審議している時に、きみは立ちあがって、かれらに助言することになるのかね。

アルキビアデス　いや、ゼウスの神かけて、それはぼくのすることではありません。

ソクラテス　しかしそうでないとすると、リュラを弾奏することについての審議がある場合かね。
アルキビアデス　いや決してそんなことはありません。
ソクラテス　しかしそうかといって、角力のわざが議会で審議されるという慣例もないことだし……。
アルキビアデス　ええ、そんなことはありませんとも。
ソクラテス　それでは何についての審議が行なわれる場合なのかね。まさか建築についての場合ではないだろうからね。

B

アルキビアデス　むろんそうです。
ソクラテス　建築については、きみよりも建築家のほうがいい助言をするからね。
アルキビアデス　そうです。
ソクラテス　またしかし占いについての審議が行なわれる場合でもない。
アルキビアデス　そうです。
ソクラテス　なぜなら、この場合はまたこの場合で、そういうことについて計るのは、占い師のほうがきみよりも上手だからだ。
アルキビアデス　そうです。
ソクラテス　その場合、計りごとをする者の大小、美醜、貴賤は問題にならないのだ。
アルキビアデス　それに違いありません。
ソクラテス　なぜなら、それぞれのことがらについて案をねり、計を立てるのは、思うに、知者の仕事であっ

て、そして富者の仕事ではないからである。

アルキビアデス　ええ、それに違いありません。

C

ソクラテス　むしろそれの推奨者が金持か貧乏人かということは、アテナイ人が国民の健康をよくするのに、どうすればよいかを審議している時には、どうでもいいことになるだろう。かれらはそれよりも、かれらの相談相手になって案を立ててくれる者が、衛生医学の心得ある者であることを要求するだろう。

アルキビアデス　ええ、それがとうぜんです。

ソクラテス　それなら何についての検討が行なわれている時なら、きみが提案のために立ちあがっても、おかしくはないということになるのかね。

アルキビアデス　それはかれら自身のことを審議している時ですよ、ソクラテス。

ソクラテス　きみの言うのは造船関係のことかね。どんな船をつくらせるのが、かれらのためにはよいかということの。

アルキビアデス　いいえ、ぼくのはそういうことには関係しません。

ソクラテス　きみには造船の知識がないからね。それとも何かこれ以外のわけがあるだろうか。

アルキビアデス　いいえ、それ以外のわけはありません。

D

ソクラテス　しかしかれら自身のことがらを審議する場合ときみは言うが、それはどんなことがらを指すのかね。

アルキビアデス　戦争について審議する場合ですよ、ソクラテス、あるいは平和についてでもよろしいし、ま

E

た何かほかに国家社会のことがらを審議する場合でもいいのです。

ソクラテス　するときみの言うのは、どこの国とは平和にしているほうがよいが、またどことは戦争しなければならないとか、またそれはどういうやり方をするかということが審議される場合なのだね。

アルキビアデス　ええ、そうです。

ソクラテス　しかしそれは、そうするほうがよい相手に対してでなければならない。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　また、そうするのによい時機においてでなければならない。

アルキビアデス　ええ、そうですとも。

ソクラテス　また、そうするほうがよい期限の間だけだ。

アルキビアデス　ええ。

ソクラテス　すると、いまアテナイ人が何国人と角力をとり、何国人と拳闘するのがよいか、またそのやり方は、どうするのがよいかということを審議するのだとしたら、きみのほうがいい相談相手になるのだろうか。それとも体育家のほうがそうなのだろうか。

アルキビアデス　むろん、体育家のほうがいい助言をすると思います。

ソクラテス　それならその場合、角力の相手にするのには、どの者がよくて、どの者がわるいか、またその時機は、いつがよいか、そのやり方は、どれがよいかというようなことを助言するのに、体育家が目あての基準にするのは何かということを、きみは言えるかね。ぼくの言おうとするのは、こういう意味なのだ。角力の相手に

は、そのほうがよいような相手を選ばなければならない。それともそうではないか。

アルキビアデス いいえ、そうです。

ソクラテス また、どのくらいまでやるかということも、そのほうがよいという程度まではないか。

アルキビアデス ええ、その程度までです。

ソクラテス それなら、その時機もまた、そのほうがよいような時機にではないのか。

アルキビアデス まったくそのとおりです。

ソクラテス ところでまた、歌をうたいながら、その歌に合わせてキタラをひき、歩調をとる必要のあることが、時たまあるのではないか。

アルキビアデス ええ、そういうことがありますね。

ソクラテス すると、その時というのは、そうするほうがよい時ということなのではないか。

アルキビアデス そうです。

ソクラテス そしてちょうど、そうするほうがいいくらいの程度まで？

アルキビアデス ええ、そのとおりです。

五

ソクラテス すると、どういうことになるかね。きみは「ほうがよい」（よりよい）という言葉を、歌に合わせ

B てキタラをひく場合と、ひとを相手に角力を取る場合の両方につかっていたが、何を称してキタラをひく場合の

「よりよさ」とするのかね。角力の場合のをぼくが言うとすれば、それは体育の教えにかなったものという意味になるが、キタラ弾奏のほうをきみが言うとすれば、それは何かね。

アルキビアデス 思いつきませんが。

ソクラテス いや、そう言わずに、ぼくのまねをしてみたまえ。ぼくは答えを出しておいたと思うんだがね。つまりすべてを通じて正式を保持するものがそれなのだとね。そして正式を保持するのは、むろん、技術に従って生み出されるものがそれなのだと思う。それともそうではないかね。

アルキビアデス いいえ、そうです。

ソクラテス ところで、この場合の技術は、体育術だったのではないか。

アルキビアデス それに違いありません。

C

ソクラテス ところで、ぼくがさっき言ったのは、角力の場合の「よりよさ」ということは、体育の教えにかなったものという意味だというのだった。

アルキビアデス ええ、そうでした。

ソクラテス そしてこれでうまく言われたことになるのではないかね。

アルキビアデス ええ、とにかくぼくはそう思います。

ソクラテス さあ、それなら、今度はきみも——言葉のやり取りをうまくやることは、とうぜんきみにも期待していいことだろうと思うから——言ってくれたまえ。まず第一に、キタラをひいたり、歌をうたったり、歩調をととのえたりすることが、それに属する技術というのは何かね。総称して何と呼ばれているかね。きみはまだ

言うことができないのか。

アルキビアデス どうもできません。

ソクラテス まあ、そう言わずに、こうしてみたまえ。その技術をつかさどる女神たちがおられるのだが、それはどなたかね。

アルキビアデス ソクラテス、あなたの言われるのはミューズ(ムゥサ)の神々のことですか。

D

ソクラテス そうだとも。さあ、それではもう一つ考えてくれたまえ。この技術はこの神々にちなんだ名前をもっているのだが、それは何かね。

アルキビアデス ミュージック(ムゥサのわざ)というのを言おうとしておられるように、ぼくは思いますが。

ソクラテス そのとおり。では、そのミューズの技術に従って生み出される正式のものとは何かね。さっきの例ではぼくが、技術に従っての正式というのを、体育術の場合で言っておいたが、さあ今度はきみの言う番だが、それは何かね。どういう仕方で生み出される場合を言うのかね。

アルキビアデス ミューズの教えにかなった仕方で生み出される場合だと思いますが。

ソクラテス その答えで結構だ。さあそれなら、戦争する場合の「よりよい」ということについても、また平和を保っている場合のそれについても、きみのつかうその「よりよい」という言葉は、何を指しているのかね。

E

さっきの例では、どちらの場合についても、「よりよい」とは、あるいはミューズの教えにいっそうかなっているということであり、もう一つの場合は、体育の教えにいっそうかなっているということであるというのが、きみによって言われることになったが、さあ今度の場合についても、「よりよい」とは何かということを言ってみ

てくれたまえ。

アルキビアデス しかしまったくなんともできないのです。

ソクラテス しかしこれはどうも恥ずかしいことだね。いまきみが穀物について助言して、今のところこの程度までは、これのほうがあれよりもよいと言うとして、ひとがこれを聞いて、きみに対して、アルキビアデスよ、きみの言うその「よりよい」というのは何かと質問する場合、穀物については、きみは別に医者だと称しているわけではないけれども、[1]「健康を助けることの多いもの」がそれだと答えることができるのに、それの知識があるときみが称しているもの、それについては知っているつもりで、立ちあがって助言しようとしているもの、そのものについては質問されても、答えることができないとしたら、きみはそれを恥ずかしく思いはしないかね。それとも恥ずかしいこととは見えないのだろうか。

109

アルキビアデス いいえ、まったく恥ずかしいことです。

ソクラテス では、どうか考えてくれたまえ。そしてつとめて答えるようにしてくれたまえ。平和にしている場合の「よりよい」というのは、何に関係するものなのか。また敵と戦うべくして戦う場合の「よりよい」とは、何に向かうものなのかということを。

アルキビアデス しかし考えても、思いつくものはありませんが。

ソクラテス でもきみは、われわれが戦争をする時、どんな被害を互いに言い立てて、戦争に突入するのかと

---

1 句読点、バーネットによらずにつづける、たとえばクロワゼ。

いうことも知らないのかね。またそれをどんな名目で呼んで突入するかということも。

B

アルキビアデス　それは知っています。だまされるとか、暴力を加えられるとか、かたり取られるとかいうことからです。

ソクラテス　そこでちょっと注意してもらいたいことがあるのだが、それらの被害はそれぞれ、どういう仕方によってなのかね。つまりその仕方が、こうであるか、ああであるかによって、どう違うかを言ってみてほしいのだ。

アルキビアデス　そのあれか、これかと言われるのは、ソクラテス、それは正義にかなった仕方でか、あるいは不正の仕方でかということでしょうか。

ソクラテス　まさにそのとおり。

アルキビアデス　いや、それなら天地の違いがありますよ。

ソクラテス　それならどうかね。アテナイ人に対してきみが助言することになるのは、どちらの人間に対して戦うことなのかね。不正を犯す者どもに対してなのかね。それとも正しいことを行なっている者に対してなのかね。

C

アルキビアデス　これはこわい質問ですね。なぜなら、たとい内心ひとが戦わなければならないと考えている相手が、正しいことを行なっている者だとしても、それを公然と認めるわけにはいかないでしょうからね。

ソクラテス　つまりそういうこと(正しいと認められている者に戦争をしかけること)は無法だからという意味になるらしいね。

アルキビアデス むろん、そうです。またそれは美しいことでもありません。

ソクラテス してみると、きみが演説をする場合にも、これらの点を考えてやることになるのだろうね。

アルキビアデス ええ、そうしなければなりません。

ソクラテス それなら、どうだね、いまぼくが質問していた、戦争するか否か、敵とすべきか否か、この時機を選ぶか否かということに関連する「よりよい」というのは、まさに「より正しい」ということなのではないかね。それともそうではないのだろうか。

アルキビアデス いいえ、とにかく見たところは、そうなのです。

六

D

ソクラテス すると、どういうことになるのかね、愛するアルキビアデス。きみは気がつかないでしまったのかね、自分がそれの知識をもってはいないということに。それとも気がつかなかったのはぼくのほうで、きみはその間に、先生のところへ通って、どちらが正で、どちらが不正であるかの見分け方を教えてもらい、それを学んでいたわけなのかね。もしそうなら、その先生は誰だね。ぼくにも教えてくれたまえ。ぼくもその人の弟子になりたいから、紹介してもらいたいのだ。

アルキビアデス 冗談ばっかり、ソクラテス。

ソクラテス いや、けっして冗談なんかではないのだ。きみとぼくの友愛の神に誓ってもいい。ぼくはけっしてこの神への誓いをやぶるようなことはしないだろう。とにかく、きみがそういう先生を知っているのなら、そ

れは誰なのか言ってもらいたいね。

アルキビアデス しかしぼくが知らないとしたら、どうなるんですか。正と不正については、ぼくはほかの仕方で知ったのかもしれない、とはお考えになりませんか。

ソクラテス それは考えるよ、きみがそれを発見したかもしれないという場合だ。

アルキビアデス しかしぼくが発見したかもしれないとは、お考えにならないのですか。

ソクラテス いや、その可能性は大いにあると思うね、もしきみがそれを探し求めたとすれば。

アルキビアデス それなら、ぼくが探し求めたかもしれないということは、お考えにならないのですか。

ソクラテス むろん、それは考える、もしもきみが、自分はその知識をもっていないと思うことがあったとすればね。

アルキビアデス それなら次の問題は、ぼくがそう思った時がなかったか、どうかということです。

ソクラテス うまい、きみのその発言はみごとだ。それならきみは、その時というのを挙げることができるかね、きみが正不正を知っていないと思っていたその時を。さあ、どうだね、昨年は、知っていないと思っていたかね。そしてそれを知りたいと探し求めていたかね。それとも知っていると思っていたかね。できるだけ正直のところを答えてくれたまえ。この問答はいいかげんなものにしたくないのだ。

アルキビアデス いや、それは知っているつもりでいました。

ソクラテス また二年前も、三年前も、四年前も、そうだったのではないかね。

アルキビアデス はい、そうです。

ソクラテス ところがしかし、それ以前となると、きみの少年時代ということになる。ねえ、そうだろう。

アルキビアデス ええ、そうです。

ソクラテス すると、その時分のことなら、ぼくはよくわかっているが、きみは正不正を知っているつもりになっていたよ。

アルキビアデス よくわかっているというのは、どうしてですか。

B **ソクラテス** なんども聞いたのだ、きみが子供の時、先生のところやほかのところで言っていたことをね。さいころ遊びやほかの何か遊戯をしている時にも、正不正について迷っているような模様はなく、大きな声で断固として、子供たちの誰かれについて、いけないやつだとか、ずる(不正)をしているとか、ずるいやつだとか言っていたのをね。それともぼくの言うことは本当ではないのかね。

アルキビアデス でも、ぼくはどうしたらよかったんですか、ソクラテス、ぼくに不正をするやつがあった場合。

ソクラテス しかしきみは、まさにその「不正」をされたか否かを知らなかったとすれば、「ぼくはどうすればいいんですか」なんて言えるだろうか。

C **アルキビアデス** それはゼウスの神に誓って、言えないことです。しかしぼくは知らないことはなかったのです。いや、不正を受けたという認識ははっきりしていたのです。

ソクラテス してみると、すでに子供のころにも、正不正の知識をもっていると、きみは思っていたということになるらしいね。

アルキビアデス　そうです。そして単にそう思っていただけではなく、実際にその知識をもっていたのです。

ソクラテス　というと、どのような時に、それを発見してなのかね。というのは、むろん、そのような時は、きみが知っていると思っていたあいだには、ありえないだろうからね。

アルキビアデス　むろん、ありえません。

ソクラテス　すると、きみが知らないと思っていた時というのは、いつのことかね。探してみたまえ。そんな時は見つからないから。

アルキビアデス　たしかに、ゼウスの神かけて、ソクラテスよ、ぼくはどうにもそのような時をあげることはできません。

D **ソクラテス**　してみると、きみがそれを知っているのは、発見によるのではないということになる。

アルキビアデス　明らかにまったくそうです。

ソクラテス　ところがしかし、きみはさっき自分が知っているのは、また学ぶことによるのでもないということを言ったのだ。しかし発見したのでもなければ、学んだのでもないとすると、きみはそれをどのような仕方で、どこから知ったことになるのかね。

七

アルキビアデス　いや、これはたぶんわたしの答えがまずかったのかもしれません、自分の発見によって知っているのだと言ったのは。

ソクラテス しかしそうでないとすると、それはどうだったのかね。
アルキビアデス やっぱり学んだのだと思います。ぼくもほかの人たちも同じように。
ソクラテス われわれの議論はまた同じところへ逆もどりということになった。それはだれから学ぶのかね。ぼくにも教えてくれたまえ。

E
アルキビアデス 世間の多くの人たちからです。
ソクラテス 多くの人たちか。これはどうも先生としてあまり結構でない連中のところへ逃げこんだものだねえ、かれらを引き合いに出すなんて。
アルキビアデス でも、どうしてですか。あの人たちだって充分教えられるんじゃあありませんか。
ソクラテス とにかく将棋のやり方となるともう教えられないね。しかもこれは正邪にくらべれば、つまらないことだのにと思うのだ。しかしどうかね。きみはそうは思わないかね。
アルキビアデス そう思います。
ソクラテス それなら、つまらないことを教えることができないのに、もっと大切なことを教えることができるのだろうか。
アルキビアデス それはできるとぼくは思います。とにかく将棋さしよりは大切なことで、かれらの教えることができるものは、ほかにたくさんあるからです。
ソクラテス たとえばどんなものかね。
アルキビアデス たとえばギリシア語をつかうことなども、世間多数の人からぼくは学んだのです。この場合

も、ぼくの個人的な先生の名をあげることはできないでしょうが、しかしあなたが、あまり結構な先生ではないと言われた、あの同じ人たちを引き合いに出すことになります。

ソクラテス　しかし、けだかいきみよ、このことについては、世間の多数者は立派な先生なのだ。そしてそれらのことを教えることに関しては、かれらを推奨するのが正しいわけなのだ。

アルキビアデス　いったいどうしてですか。

ソクラテス　それはかれらが、よい教師がもっていなければならないものを、それらに関してはもっているからなのだ。

アルキビアデス　と言われるのは、それは何ですか。

ソクラテス　きみも知っているではないか、何かを教えようとする者は、自分でまずそれを知っていなければならないのだ。それともそうではないかね。

B

アルキビアデス　いいえ、それに違いありません。

ソクラテス　それでは、知っている者は相互に〔言うことが〕一致するのであって、相違することがあってはならないのではないか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　これに反して、もし何かについてかれらのあいだに相違があるとすれば、それをかれらは知っているときみは認めるだろうか。

アルキビアデス　いいえ、けっしてそうは認めません。

ソクラテス　そうすると、そういうことがらについて、かれらが教師になるということは、どうしてできるだろうか。

アルキビアデス　それはどんなにしても不可能です。

C

ソクラテス　すると、どうなるかね。世間の多くの人たちは、どういうものが木や石であるかについて相違すると、きみは思うかね。誰かをつかまえてきいてみるがいい。かれらの言葉は一致して、同じものを指しているかどうか。また石なり木なりを取ろうと思う場合、かれらの動作は同じものに向かうかどうかということを。同様のことは、この種のものすべて、どれにでも言えるのだ。というのは、ぼくのだいたい理解したところでは、きみが「ギリシア語のつかい方を知っている」と言っているのは、このことを指すようだからだ。それともそうではないかね。

アルキビアデス　いいえ、そうです。

ソクラテス　すると、これらについては、さっきもわれわれが言ったように、かれらは相互に一致するのであって、それはかれら個人相互のあいだだけでなく、国と国の公けの関係においても、一方の言うことと他方の言うことが異なっていて、異議が生ずるというようなことはないのである。

アルキビアデス　ええ、そういうことはありません。

ソクラテス　したがって、これらのことがらについては、かれらが先生になっても、とうぜんりっぱにつとまるわけなのである。

D

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　だから、誰かにこういうことの知識をもたせたいと思う場合には、これら多数の人たちの授業を受けさせるために、われわれがその者をつかわすとしても、それは正しいやり方だということになるだろう。
アルキビアデス　ええ、まったくそのとおりです。

八

ソクラテス　しかしどうかね、もしわれわれが、どういうのが人間であり、どういうのが馬かということだけでなく、そのうちのどれが早く走るか、どれがそうでないかということも知りたいと思うとしたら、その場合にもなお、世間の多くの人たちが充分それを教えることができるのだろうか。
アルキビアデス　いいえ、けっして。
ソクラテス　そしてその場合、かれらはそれらの知識をもたず、それを教える者としては適格でないということの、充分な証拠としてきみがあげることのできるのは、かれらがそれらのことについて言っていることは、相互に少しも一致がないからだということであろう。
E
アルキビアデス　そうです。
ソクラテス　では、どうかね、もしわれわれが、どういうのが人間であるかということだけでなく、どういうのが健康体で、どういうのが病弱であるかということも知りたいと思うとしたら、世間の多くの人たちは、われわれにとって充分な教師となりえただろうか。
アルキビアデス　いいえ、けっして。

ソクラテス　そしてその場合、かれらがそれらについて教える者としては、さっぱりだめだということの証拠には、きみはかれらの間の相違や不一致を見れば充分だとしただろう。

アルキビアデス　ええ、そうです。

112

ソクラテス　では、今のわれわれの場合はどうかね。(1) 人間やことがらの正不正について、世の多くの人たちは、その言うところが自分たち自身にしても、相互のあいだにしても、一致しているときみに思われるかね。

アルキビアデス　ゼウスの神かけて、その一致は最小だと思われます、ソクラテス。

ソクラテス　では、どうかね。それらについての相違は最大だということなのかね。

アルキビアデス　そうです、たいへんな相違です。

ソクラテス　とにかく人間が、健康の有無についての意見の相違がひどくなって、そのために戦闘を行ない、相互に殺し合うようになるなどというためしは、いまだかつて決してきみも見たことはないし、また聞いたこともなかったろうと思うからだ。

アルキビアデス　そうです、むろんです。

B

ソクラテス　ところが正不正については、それをきみはたとい見なかったにしても、少なくとも聞いてはいるはずだということを、ぼくは知っている。それを聞かせてくれるのは、ほかにたくさんの人がいるけれども、ホメロスが第一だ。『オデュッセイア』も『イリアス』も、きみは語りものとして聞いたわけだからね。

1　バーネットによらず、プロクロスの読みに従って νῦν を文の一部として読む。

アルキビアデス　ええ、それはむろんですとも、ソクラテス。

ソクラテス　それなら、これらは正不正についての不一致を中心とした作品なのではないか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　そしてアカイア人と相手のトロイア人が戦って死んだのも、ペネロペの求婚者[1]とオデュッセウスがそうしたのも、この不一致があったためなのだ。

アルキビアデス　ほんとうにあなたの言われるとおりです。

C

ソクラテス　またぼくは思うのだが、かつてタナグラ[2]で戦死したアテナイ人、スパルタ人、ボイオティア人にしても、またそれより後にコロネイア[3]で亡くなった人たち――そのうちにはきみのお父さんのクレイニアスもはいっておられるわけだが、その戦死者たちにしても、かれらを戦わせ、かれらを死に至らしめたものは、正不正についての不一致なのであって、それ以外のいかなるものについての不一致でもなかったのだ。ねえ、そうだろう。

アルキビアデス　ええ、あなたの言われることは本当です。

ソクラテス　それならかれらは、それの知識をもっているということを、われわれは主張していいのだろうか。

D

それについては、かれらは互いに異議を唱えて、直接かれら自身のあいだで、このうえなくひどいことを仕合うまでに、意見の相違がはなはだしいのだとすると。

アルキビアデス　ええ、それは見たところ不可能です。

ソクラテス　すると、このようなかれらを、きみは引き合いに出して、先生にしようとしているのだというこ

とになるのではないかね。かれらがその知識をもっていないことは、きみ自身認めているのにね。

アルキビアデス どうやらわたしの立場は、そのへんのところかもしれません。

ソクラテス すると、きみが正不正について知っているというのも、それについてきみが、そんなにふらふらして、誰から学んだのでもなければ、また自分で発見したのでもないということがはっきりしてきているのでは、どうやらあやしいことになるのではないか。

アルキビアデス ええ、あなたの言われることからすれば、あやしいことになります。

九

E

ソクラテス ほら、その言い方がまたよくないぞ、アルキビアデス。

アルキビアデス どの言い方ですか。

1 オデュッセウスの留守中、その妻ペネロペに言いよったおおぜいの求婚者があったが、オデュッセウスは帰国するとともに彼らを殺した。『オデュッセイア』第二四巻参照。

2 ボイオティア東部、アッティカの近くにある都市。前四五九年に始まった、第一次ペロポンネソス戦争とも呼ばれるアテナイ・スパルタ戦争の際、両軍はここに会戦。激戦の末、スパルタ側が勝利をおさめた。しかしまもなく再びアテナイ軍はボイオティアにはいり、ボイオティア勢を破りボイオティアとポキスを支配下においた。前四五七年のこと。

3 ボイオティア西部、ポキスに近い都市。やはり同じ戦争の時、アテナイ軍はボイオティア亡命民の拠点であったカイロネイアを降し、そこの住民を奴隷にして帰る途上、このコロネイアで、他からやってきたボイオティア亡命民に襲われ、さんざんな目に会い、そしてアテナイ軍はボイオティアから全面的に撤兵した。時は前四四七年。

ソクラテス　いままでのことを、ぼくの言ったことにしているところがさ。

アルキビアデス　でも、どうしてでしょう。ぼくは正不正について何も知ってはいないのだということを、あなたが言っておられるのではないですか。

ソクラテス　いや違う、とんでもない。

アルキビアデス　違うとすると、ぼくが言っているということになるのですか。

ソクラテス　そのとおり。

アルキビアデス　いったいどうしてでしょうか。

ソクラテス　こう言ったらわかるかもしれない。いまきみにぼくが質問して、一と二では、どっちが多いと言ったら、二のほうが多いときみは答えるだろう。

アルキビアデス　はい、そう答えます。

ソクラテス　その差はいくつだね。

アルキビアデス　一つです。

ソクラテス　ところでこの場合、二は一より一つだけ多いと主張することになるのは、われわれ二人のうちのどっちだね。

アルキビアデス　ぼくです。

ソクラテス　この場合、ぼくは問い、きみは答えたのではないか。

アルキビアデス　そうです。

113

ソクラテス　すると、これらについての主張者になるのは、まさかぼくではなくて、むしろきみであり、問い手ではなくて、答え手だということは、明白なのではないか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　では、どうだろう。いまソクラテスの綴りが、どういう文字であるかを、ぼくが問い、きみが答えるとしたら、その文字を言うのは、われわれのどっちだろうか。

アルキビアデス　ぼくです。

ソクラテス　さあ、それでは一口にまとめて言ってもらおう。問答が行なわれる場合、主張を言うことになるのは、問う者と答える者のどっちかね。

アルキビアデス　それは答える者だと、ぼくは思いますよ、ソクラテス。

ソクラテス　すると、今までずっとぼくは、問い手だったのではないか。

アルキビアデス　そうです。

B

ソクラテス　そしてきみは答え手だった。

アルキビアデス　たしかにそのとおりです。

ソクラテス　すると、どうなるのかね。さきに言われたことは、われわれ二人のどっちの主張になるのかね。

アルキビアデス　ぼくのだということは、ソクラテス、いま同意されたことからして、はっきりしています。

ソクラテス　それでは正不正について、どういうことが言われたかといえば、クレイニアスの子、美しきアルキビアデスは、それの知識をもっていないのに、もっていると思い、アテナイの議会に出て、かれらのために、

自分の一つも知らないことについて、助言するつもりになっているという、こういうことが言われたのではなかったか。

C

アルキビアデス そういうことのようでした。

ソクラテス してみると、エウリピデス劇の台詞にあるような結果になったわけだ、アルキビアデス。「そなたの耳にしたは、わたしの言葉ではない。そなたが口にしたまでのこと(1)」というところらしい。この場合も、いまのようなことを言うのは、ぼくの役ではなくて、きみなのだ。だから、ぼくのせいにしてもだめだ。まあそれにしても、きみがいまのようなことを言うことになるのは、わるくはないね。なぜならきみは、気違いじみた企てをしようとしていたのだからね、このうえなくすぐれた人よ。自分の知らないことを教えようとするのだからね、学ぶことは怠ってさ。

一〇

D

アルキビアデス でも、ソクラテス、どっちが正しくて、どっちが正しくないかなんてことは、アテナイ人も他のギリシア人も、審議の対象にすることはあまりないように思うんですが。なぜって、そんなことはわかりきったことだと考えているからです。だから、そういうことについては、なにも問題にしないで、どちらを行なうほうが利益になるだろうかということのほうを検討することになるわけです。というのは、正と利は同じではないと思うんです。むしろたいへんな不正を行なって、利益をおさめる場合がなかなか多く、他方また、正しいことを行なったために、利益をにがしたりするひともあるからです。

E

ソクラテス　ふうん、それでどうなるというのかね。正と利が別ものだとして、それがどれほど違うとしてもかまわないが、それできみはまた今度は、人間にとって利益になるのは何かということや、何故にそれが為になるかということを、何か──こう知っているつもりになっているんじゃあないかね。

アルキビアデス　それに何のさしつかえがあるんです、ソクラテス。あなたがまたもやぼくに、誰から学んだかとか、どうやって自分で発見したかなんてことを質問しないでくだされぱいいんです。

ソクラテス　それはまた何という仕打ちだ。きみの言い分が間違っていて、そのことの証明も、ちょうど前の議論をつかえばできるというのに、前の議論なんて着古しの衣装みたいなものだとばかり、何か新奇のでなければ聞く必要はない、別口の証明でなければだめだなどと、ひとりぎめしているんだからねえ。そしてまっさらの

114

汚れ目のない証拠をもって行かなければ、もう古衣装はきみに着てもらえないんだからなあ。しかしこれに対してぼくは、きみのその作戦には乗らないで、あいかわらずの質問をすることにしようか。今度はその利益になるものというのを、どこからきみは学んで知っているのか、それを教えてくれた者は誰かなどとね。そして前に言われたそういうことのすべてを一つの質問にして質問することにしようか。いやしかし、それは結局きみを同じところへ追いつめることになり、その「利益になるもの」というのを、きみは発見によって知っているのだとも、また学んで知っているのだとも、証明できないだろうということは、もうはっきりしているんだからねえ。それに、きみは口がおごっていて、同じ議論ではもうよろこんで味わってもらえないだろうから、アテナイ人の利益

1　エウリピデス『ヒッポリュトス』三五二行参照。

(114)
B

というものを、きみが知っているかどうかという議論は、ここで見送ることにしよう。しかし正と利が同じものか、異なっているものかというほうは、きみがはっきりさせずにおくことはなかったはずだ。なんなら今度は、ぼくがきみにしたように、きみがぼくの質問者になってくれてもよし、またなんなら、きみが自分ひとりでやってくれてもよいから、くわしい議論をきかせてくれたまえ。

アルキビアデス　しかしソクラテス、あなたを向こうにまわして、くわしい議論ができるかどうかわかりません。

ソクラテス　でも、よき人よ、ぼくを議会と見たて、民衆と見てはどうかね。そこでもたしかにきみは、一人一人を説得しなければならないはずなのだ。ね、そうだろう。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　そうすると、自分の知っていることについて説得するということは、相手がただの一人だけだろうが、多数いっしょだろうが、一人の同じ人でもってできることなのではないか。ちょうど文字を教える人は、

C

文字について説得するのに、一人を相手にすることもあれば、多数を相手にすることもあるようなものだ。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　それならまた数についても、説得するのは相手が一人でも多数でも、同じ人でやれるはずではないか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　そしてその同じ人というのは、それを知っている人、つまり算数家であろう。

アルキビアデス　はい、まったく。
ソクラテス　それならきみもまた、もし何か多数のひとに対して説得できるものがあるなら、それを一人に対してもできるのではないか。
アルキビアデス　とにかく、そうなるかもしれません。
ソクラテス　そしてそのものとは、むろん、きみが知っているものをだということになる。
アルキビアデス　そうです。
D
ソクラテス　そうすると、民衆相手の演説をする人と、いまのような場合に対談する人とは、同じことを一方は集団的に説得し、他方は個別的に説得するという、ただそれだけの相違があるにすぎないのではないか。
アルキビアデス　おそらくそうでしょう。
ソクラテス　さあ、それなら今度は、多数を説得するのも一人を説得するのも、同じ手のものだということがはっきりしたのだから、ぼくを稽古台にして、正は必ずしも利ではないということを、はっきりさせる試みをしてくれたまえ。
アルキビアデス　あなたはずいぶん押しの強い人ですねえ、ソクラテス。
ソクラテス　うん、今度はとにかくその押しの強さで、いまきみがぼくを説得したがらない当のことについて、その反対のことをきみに説得しようとしているんだからねえ。
アルキビアデス　その説得というのをやってみてください。
ソクラテス　ただ答えてくれればいいのだ、問いを出すから。

アルキビアデス いや、それよりあなたが自分で説明してください。

ソクラテス しかしなぜかね。きみは何よりも納得を求めているのではないのか。

アルキビアデス むろんですとも。

ソクラテス それなら、きみは自分で「これはこうだ」と言うようになった時、最大限の納得がいったことになるのではないか。

アルキビアデス そう思います。

ソクラテス それなら答え手になりたまえ。そしてきみは自分できみ自身が「正は利である」と言うのを聞かないうちは、他人の言うことなんか信じこんじゃあいけないんだ。

アルキビアデス ええ、信じませんとも。とにかく答える役は逃げないことにします。何の害もないだろうとも思いますから。

一一

ソクラテス きみには先見の明があるからね。では、どうか言ってくれたまえ。正しいことの一部は利益になるけれども、他のものは利益にならないというのが、きみの主張なんだね。

アルキビアデス はい。

ソクラテス では、どうかね。正の一部は美であるが、他はそうでないということがあるかね。

アルキビアデス という御質問の意味は何でしょうか。

ソクラテス つまりこれまでに誰かの行為が、みっともないけれど、正しいときみに思われたことがあったかどうかという意味だ。

アルキビアデス そんなふうに思ったことはありませんでした。

ソクラテス むしろ正なるものは、すべて美なのだろう？

アルキビアデス そうです。

ソクラテス では、今度は美なるものはどうかね。そのすべてはよきものなのかね。それとも一部は善であるが、他は然らずというところかね。

アルキビアデス ぼくは、ソクラテス、美しいものの中にも、若干悪いものがあると思うんですが。

ソクラテス また醜いものでも、善だということも？

アルキビアデス はい。

B

ソクラテス きみの言おうとしているのは、たとえばこういうことだろうか。戦場で仲間や家の者を助けて、そのために自分が傷を負ったり、また死んだりするというような場合がたくさんあるけれども、これとは反対に、助けなければならないのを助けないで、そのために無事に帰還した者もあるわけだ。

アルキビアデス ええ、たしかにそういうことがあります。

ソクラテス すると、こういう場合にひとを助けるのは、美しいことだときみは言い、それは救うべきひとを救うということをあえてしたから美しいのであり、かくすることが勇というものだということになるのではないか。それとも違うかね。

アルキビアデス　いや、そのとおりです。

ソクラテス　しかしそれは死や傷をもたらしたから、その点ではいまわしい、わるいものだと言うことになるのではないか。ね、そうだろう。

アルキビアデス　はい。

C

ソクラテス　ところで、この勇と死とは、それぞれ別ものなのではないか。

アルキビアデス　まったく別ものです。

ソクラテス　してみると、友を助けることが美しいことであって、またいまわしい、わるいことであるというのは、同じ点においてではないということになるのではないか。

アルキビアデス　明らかにそうです。

ソクラテス　それなら、ほら見てみたまえ、それがとにかく美であるかぎりにおいては、また善でもあるのかどうか、ちょうどそれはこの場合にも見られることなのだ。というのは、勇という点では、ひとを助けるこのことが、美しいものだということをきみは認めたわけだが、その勇ということを、それだけで考えてみたまえ。善いものか、悪いものか。いや、それはこういうふうに考えたほうがいい。きみは善いものと悪いものと、どちらが自分の身にそなわることを可とするだろうか。

アルキビアデス　善いものをです。

D

ソクラテス　それなら、最大の善は最大限に、ではないか。

アルキビアデス　はい。

ソクラテス　そしてそのようなものを奪われることは、最も可とすることの少ないものなのではないか。

アルキビアデス　それに違いありません。

ソクラテス　それなら、勇というものについては、きみはどう言うかね。どれだけの報酬があるなら、それを奪われてもいいとするかね。

アルキビアデス　いいえ、ぼくは卑怯者でいるくらいなら、生きていたくはありません。

ソクラテス　してみると、きみにとって卑怯ということは、悪いものの極だと思われていることになる。

アルキビアデス　そうですとも。

ソクラテス　死に匹敵するというところらしいね。

アルキビアデス　はい、そうです。

ソクラテス　それでは、死と卑怯に正反対なのは、生と勇ではないのか。

アルキビアデス　そうです。

E

ソクラテス　そしてその一方の組は、きみが自分のものにしたいと思うことの最大のものであり、他の組はその最小のものなのである。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　それはきみが、一方を最善のものと思い、他を最悪のものと考えているからではないか。

アルキビアデス　まったくそのとおりです。

ソクラテス　してみると、きみは勇が最善のもののうちにあり、死が最悪のもののうちにあると考えているこ

とになる。

アルキビアデス　はい、そのとおりです。

ソクラテス　してみると、戦場で友を助けるということは、勇という善いことを行なったという点で美しいことなのであり、きみはそのかぎりにおいてこれを美しいことと呼んだわけなのだ。

アルキビアデス　ええ、それは明らかにそうです。

ソクラテス　ところがそれはまた、死という悪をもたらす行ないである点において、あしきものと呼ばれたのだ。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　そうすると、この二とおりの行ないのそれぞれは、次のような呼び方をするのが正しいことになる。もしそれをきみが、悪い結果を生むかぎりにおいて、悪い行ないと呼ぶのだとすれば、また善の結果を生む

かぎりにおいては、善い行ないだと呼ばなければならない。

アルキビアデス　たしかにそうだと思います。

ソクラテス　そうすると、またそれは善であるかぎりにおいて美、悪であるかぎりにおいて醜ということにもなるのではないか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　してみると、戦場で友を助けることは、美しいことではあるが、わるいことだときみが言うのは、それは善いことではあるが、悪いことだと呼ぶのと、ちっとも違わないことになる。

アルキビアデス　ああ、あなたの言われることは本当だと思います、ソクラテス。

ソクラテス　したがって、美しいものは、それが美しいものであるかぎり、悪いものは一つもないのであり、また醜いことは、醜いことであるかぎり、善いことは一つもないのである。

アルキビアデス　明らかにそうです。

B

二二

ソクラテス　それなら、もう一つまたこういうふうに考えてみたまえ。すべて美しい行ないをするひとは、またいい行ないをしていることになるのではないか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　ところで、いいように行(や)っている(うまくやっている)人というのは、いいダイモーンがついている人なのではないか。

アルキビアデス　それに違いありません。

ソクラテス　ところで、いいダイモーンがついているということ、つまりしあわせだということは[(1)]、善いものをもっているからなのではないか。

1　ギリシア語の表現では「いい行ないをする」というのと「うまくやる」のと「いいダイモーンがついている」のとは「しあわせである」というのとほぼ同じ意味になる。

アルキビアデス　たしかにそうです。

ソクラテス　ところが、そういう善いものをもつようになるのは、いいように〔そして、うまく美しく〕[1]行なうことによってなのだ。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　してみると、いいように行なうことは善なのだ。

アルキビアデス　それに違いありません。

ソクラテス　それから、いい行ないは美しいことだったのではないか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　したがって、またふたたび美と善の同一が明らかになったのである。

アルキビアデス　ええ、明らかになりました。

C

ソクラテス　したがって、この議論からすれば、何であれわれわれがその美を見いだすとき、われわれはまたその善をも見いだすことになるであろう。

アルキビアデス　ええ、そうならなければなりません。

ソクラテス　ところで、どうだね。善いものは利益をもたらすものなのかね、利益にならないものなのかね。

アルキビアデス　利益になるものです。

ソクラテス　では、きみはおぼえているかね、正について、われわれがどういう議論の一致を見たかということを。

アルキビアデス　正しいことを行なう人は、必然に美しいことを行なうということになるのだったと思います。

ソクラテス　それからまた、美しいことを行なう人は、善いことを行なうことになるというのも？

アルキビアデス　そうです。

D

ソクラテス　そしてその善いことは、利益をもたらすものだということが？

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　したがって、アルキビアデス、正しいことは利益になるものなのだ。

アルキビアデス　ええ、そうかもしれません。

ソクラテス　すると、どういうことになるかね。この主張をする役はきみであって、ぼくは質問者にとどまるのではないか。

アルキビアデス　その点ははっきりしているように思われます。

ソクラテス　すると、もし誰かが正不正の区別を知っているつもりで、アテナイなりペパレトスなり(2)の市民たちのために、立ちあがって助言しようとする場合、正しいことも時によって悪いことがあるというようなことを

1　ここの καὶ καλῶς はない方が簡単でわかりやすい。しかしオリュンピオドロスはこの言葉に特別の重要性を認め、新しいテクストではクロワゼが「美しく」の方だけを残している。ただし理由は不明。ここでは一応写本のままにして、「そして、うまく美しく」だけを〔　〕に入れておくことにする。

2　エーゲ海の群島の一つ。小さな島。強大なアテナイと対照して弱小なこの島を出したもの。すなわち「それがアテナイのように大きな都市であろうと、またペパレトスのように小さな島であろうと、そこの人々に云々」の意である。

(116)
E
万一主張するとしたら、きみはその人を馬鹿にして笑うだろう。正と利は同じというのが、ちょうどまたきみの主張であるからには。

アルキビアデス しかし神々に誓って、ソクラテスよ、わたしは何と言っていいかわからないで、まるっきりふぬけみたいな格好なのです。なぜって、あなたに質問されるままに、あるいはこう思い、あるいはああ思うという態（てい）なのですからねえ。

ソクラテス そのうえ、愛する友よ、きみはきみのその悩みが、何であるか知らないのだね。

アルキビアデス ええ、まったくわかりません。

ソクラテス それなら、もしひとがきみに向かって、きみの眼は二つあるのか、三つあるのかとか、きみの手は二本か、それとも四本かとか、あるいは何かほかにもこの種の質問をするとしたら、きみの答えは時にはこうなり、時にはああなるというように、時によって違うと思うかね。それともいつも同じだと思うかね。

117

アルキビアデス 今となっては、ぼくは自分のことに自信をもてないのですが、しかしまあ同じ答えをするだろうと思います。

ソクラテス それはきみが知っていることだからではないか。ね、原因はそれだろう。

アルキビアデス ええ、そうだと思います。

ソクラテス したがって、もし何かについてきみが、きみの意に反して、たがいに矛盾するような答えをするとしたら、それはきみが、それについて知っていないことを明示するものなのだ。

アルキビアデス そうかもしれません。

ソクラテス　それなら、きみは正と不正、美と醜、悪と善、利と不利などについて、答えが一定しないで、動揺することを認めているのではないか。だとすれば、きみのその動揺は、それらのものについて知らないから、そのためだということが明白になるのではないか。

B

アルキビアデス　ええ、そのとおりです。

一三

ソクラテス　それなら、こういうようなことがまたあるのではないか。つまり何か知らないものがあると、そのものについては心があれこれ迷って、動揺しなければならないのではないか。

アルキビアデス　それに違いありません。

ソクラテス　それでは、どうかね。きみは天へ上る方法を知っているかね。

アルキビアデス　めっそうもない、そんなことは知りませんよ。

ソクラテス　そしてきみのそれについてのその考えは、そもそも動揺することがあるだろうか。

アルキビアデス　いいえ、けっして。

ソクラテス　そしてそのわけはわかるかね。それともぼくが教えてあげようか。

アルキビアデス　どうか教えてください。

C

ソクラテス　それは愛する友よ、きみが知らないものを、知らないと思っているからだよ。

アルキビアデス　それはまた、どういう意味なのでしょうか。

ソクラテス　きみもいっしょに見てくれたまえ。今きみの知らないものがあって、それの知識のないことをきみが承知している場合、きみはそれについてあれこれ迷うだろうか。たとえば料理をつくることについては、むろん、きみは自分が知らないということを知っているだろう。

アルキビアデス　ええ、むろんです。

ソクラテス　そういう場合、きみはそれについて、どうやってつくるかということを思わくして、あれこれ迷うだろうか。それともその知識のある者にそれをまかせるだろうか。

アルキビアデス　それはまかせることにします。

D

ソクラテス　それでは、きみが船で航行する場合はどうかね。舵を手前へ引いたらよいのか、外へ押したらよいのかと思わくしながら、わからないものだから、あれこれ迷っているほうかね。それともこれは船頭に一任して、自分はゆっくりかまえているほうかね。

アルキビアデス　それは船頭に一任します。

ソクラテス　したがって、きみの知らないことでも、その知らないということを、きみが知っている場合には、きみは迷わないのである。

アルキビアデス　迷わないのかもしれません。

ソクラテス　それでは、行為の過失というものも、知らないのに知っていると思う、この無知によるのだということに、きみは気がついているかね。

アルキビアデス　というと、それはまた、どういう意味ですか。

ソクラテス　思うに、われわれが行為しようとするのは、何を行為するのか自分は知っていると思う場合のことだろう。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　しかし知らないと思う人は、これを他人に譲って、その人にやってもらうのかね。

E

アルキビアデス　ええ、それに違いありません。

ソクラテス　だから、こういう人たちは、他人にそういうことはまかせるので、無知の人ではあっても、過失なく生きて行くことになるのではないか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　それでは、過失をおかすのはどういう人たちなのかね。というのは、いやしくも知っている人が過つ（あやま）ということはないだろうからね。

アルキビアデス　それはむろんありません。

118

ソクラテス　しかし知っている人が過つこともないし、また知らなくても、その知らないということを知っている人は過つことがないとすると、のこるところは、知らないのに、知っていると思っている人が過ちをおかすという場合が、あるだけではないのか。

アルキビアデス　そうです、それ以外の場合はありえません。

ソクラテス　してみると、ここでの無知こそが諸悪の原因であり、愚昧（ぐまい）としても、非難のもっとも多い愚昧なのであろう。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　そしてそれがきわめて大事なことがらについての無知である場合には、その害毒もきわめて多く、醜いこと恥ずべきこともきわめて大なのではないか。

アルキビアデス　ええ、大いにそうです。

ソクラテス　では、どうかね。きみは正、美、善、利などよりも、もっと大切なものを挙げることができるかね。

アルキビアデス　いいえ、けっして。

ソクラテス　しかもこれらについて、きみはあれこれ迷うことを告白しているのではないか。

アルキビアデス　そうです。

B

ソクラテス　しかしきみが迷うとすると、いままでに言われたことからして、きみはこれら大切なことがらについて、無知であるばかりでなく、知らないのに知っていると思っていることが、明らかとなるのではないか。

アルキビアデス　その恐れはあります。

ソクラテス　やれやれ、アルキビアデス、きみは何というわずらいにかかっているのだ。ぼくはそれを言葉に出して言いたくはないのだが、しかしわれわれだけしかいないのだから、やっぱり言ってしまうことにしよう。つまりきみと日常を共にしているのは、かの愚昧の極端なるものなのだ、このうえなくよき人よ。そしてこれは以上の議論によって、きみがきみ自身について告訴する病状なのだ。きみが教育も受けないうちから、急いで国家社会のことに関与しようとするのも、この無知のゆえなのだ。しかしこの病状は、きみだけのことではない。

C

この国の政治にたずさわる大多数の人たちがそうなのだ。例外はごく少なく、きみの後見人のペリクレスがたぶ

んそれかもしれない。

一四

アルキビアデス ええ、そうですとも、ソクラテス、かれはひとりでに賢くなったのではなくて、ピュトクレイデス(1)やアナクサゴラス(2)のような、多くの賢い人たちと交わったと言われていますからね。今でもなお、あの年齢で、ダモン(3)と親しくしていますが、それはやはりただ賢くなるためなのです。

ソクラテス すると、どういうことになるかね。これまでにきみは、およそ何かについて賢い人が、自分の賢いそのことがらについて、他のひとを賢くすることのできないのを見たことがあるかね。たとえばきみに文字を教えた人なら、自分がその点で賢いばかりでなく、きみでもきみ以外の人でも、そうしようと思えば、誰でも賢くすることができたのではないか。ね、そうだろう。

アルキビアデス そうです。

D **ソクラテス** それからきみもまた、その人から学べば、ほかの人にやがて教えることができるようになるのではないか。

---

1 古注によると音楽教師でピュタゴラス派。ダモンをその弟子としていたという。『プロタゴラス』(316E)によると彼はケオス島出身。またプルタルコス「ペリクレス伝」四章でも、彼はペリクレスの師だとされている。

2 有名な自然学者。イオニアの都市クラゾメナイの出身。ペリクレスの客として三〇年間アテナイに滞在した。

3 この時代の著名な音楽家。『国家』(Ⅲ. 400B)や『ラケス』(180Dその他)にもこの名が見られる。

アルキビアデス　そうです。
ソクラテス　そしてそれはキタラ弾きでも、体育家でも同じではないか。
アルキビアデス　まったく同じです。
ソクラテス　なぜなら、およそ何かの知識をもっている人については、他人をもその知識をもつ者にすることができれば、むろん、それがその知識をもっているということのりっぱな証拠になると思うのだ。
アルキビアデス　ええ、とにかくそう思われます。
ソクラテス　それなら、どうなるかね。ペリクレスは、自分の息子たちをはじめとして、誰を賢くしたか、きみは言うことができるかね。

E

アルキビアデス　しかしそれはどうですかねえ、ソクラテス、ペリクレスのあの二人の息子は精神薄弱だったんだとすると。
ソクラテス　でも、きみの兄貴のクレイニアスはできなかったのかね。
アルキビアデス　何でまた今度はクレイニアスの名をあげられるのでしょうか。あれは精神異常なのです。
ソクラテス　ふうん、そうすると、クレイニアスは精神異常で、ペリクレスの二人の息子は精神薄弱だということになると、きみのためにはどういう原因をあげたらいいのかね。いまあるようなきみを、かれがそのまま傍観しているのは、何のせいかね。
アルキビアデス　その原因(責任)はぼくにあると思うんです。注意して学ぶようにしていなかったからです。
ソクラテス　しかしそれなら、ほかのギリシア人なり外国人なりのうち、奴隷でも自由人でもよいが、ペリク

レスの教えを受けたために、いちだんと賢くなったと噂されるような者が、誰かあるなら言ってくれたまえ。そのような場合としてぼくはきみに、ゼノンの教えを受けたための、イソロコスの子ピュトドロス[1]と、カリアデスの子カリアス[2]の場合をあげることができるのだ。かれら両人はそれぞれ百ムナのお金をゼノンに払って、賢い指折りの人物になったのだ。

アルキビアデス しかしどうも、ゼウスに誓って、わたしはそういう場合をあげることができません。

ソクラテス よろしい、その話はそれだけのことにしよう。しかしそれなら、きみ自身のことは、どうするつもりかね。今のままでいいことにするのかね。それとも何か勉強するつもりかね。

一五

アルキビアデス それが御相談したいことなのです、ソクラテス。しかしいまお話を聞いているうちに、思いついたことがあるのです。そしてお説に同感している次第なのです。というのは、いま国家のことを行なっている人たちは、少数の例外を除けば、無教育な連中だとぼくには思われるからです。

B

ソクラテス そうすると、それがいったいどういうことになるのかね。

1 エレアの人。パルメニデスの弟子。アリストテレスは彼を、問答法あるいは問答競技の開祖と見ている。ゼノンのいくつかの逆理は今でも有名である。

2 ペロポンネソス戦争初期のシケリア遠征軍指揮官となった人物。ゼノンとの関係は『パルメニデス』(126B)参照。

3 ペロポンネソス戦争の時、コリントスの植民都市ポテイダイアに派遣された遠征軍の指揮官として、カリアスの名が見られる。トゥキュディデス『歴史』第一巻(六一)。

アルキビアデス　それはもしかれらが、りっぱに教育を受けた人間だったとしたら、かれらを相手に競技しようと試みる者は、他の運動選手を相手にする場合と同じように、まず学問をし練習をしてから行かなければならなかったでしょう。しかし現実には、かれらもまた素人のままで、国家のことにすでに関与しているのであってみれば、なんで練習なんかする必要があるのでしょうか。なんで面倒して学問をする必要があるのでしょうか。なぜって、ぼくのほうが、素質に関するかぎり、かれらよりずっと優位になるものと承知しているからです。

C

ソクラテス　やれやれ、これは何ということを言ってくれたのだ、このうえなくよき人よ。これはきみの器量からいっても、その他のきみの属性からいっても、なんともふさわしくないことなのだ。

アルキビアデス　というと、それはいったい何の意味なのでしょうか。何に関係があるのでしょうか。

ソクラテス　ぼくはきみのためにも、またぼくの恋のためにも悲しく思うのだ。

アルキビアデス　いったいそれは何のことでしょうか。

ソクラテス　それはきみが自分の競技を、この土地の人たちを相手にするものだというように、安くふんだのならということだ。

アルキビアデス　しかしそうでないとしたら、いったい何者が相手なのですか。

D

ソクラテス　そんな質問をすることからして、気宇宏大を自負している人物にふさわしいことだねえ！

アルキビアデス　と言われるのは、どういう意味なのでしょうか。ぼくの競争相手は、あの人たちではないのでしょうか。

ソクラテス　しかしいまきみが、三段櫓の船を操縦して、船合戦に出ようと考えているのだとしたら、そのよ

うな場合にも、きみは操縦に関して、自分が仲間の乗組員よりも上だということで満足しているだろうか。それとも、そんなことは当り前のことだと思い、むしろ眼をほんとうの競争者に向け、今のように、自分のほうの競技仲間を相手にまわすようなことはしないわけなのだろうか。これらの競技仲間に対しては、むろん、きみはとうぜん優位になければならないのであって、かれらはきみを相手に競争するなんて、とんでもないと思うくらいでなければならず、むしろきみの競争相手にはされないで、かえって、きみと組んで、敵を相手に競技するようにならなければならないと思う。もしほんとうに美しい事業で、きみ自身にも、きみの国にもふさわしいようなことをして見せようと、きみが考えているならばだ。

E

アルキビアデス いや、むろん、そのつもりはあるのです。

ソクラテス してみると、まったくきみにふさわしいことだったのだねえ、兵隊よりは上にあるというので満足するということは! むしろ眼は敵方の指導者のほうに向けて、いったい自分はかれらより上であるかどうか、その点をよく注意し、かれらを目標に練習するというようなことはしないのだからねえ。

120

アルキビアデス しかしあなたの言われるそのかれらとは、何者なのでしょうか、ソクラテス。

ソクラテス きみは知らないのか、わが国はそれぞれの機会にスパルタ人やペルシアの大王と戦っているのを。

アルキビアデス それは事実あなたの言われるとおりです。

一六

ソクラテス それでは、もしきみがこの国の指導者になることを志しているのなら、きみはスパルタやペルシ

(120)

アの王さまたちを相手にして、競技をするのだと考えたほうが、正しい考えをしたことになるのではないだろうか。

アルキビアデス　おそらく事実はあなたの言われるとおりかもしれません。

B **ソクラテス**　いや、そうではなくって、善良なひとよ、きみが眼を向けなければならないのは、うずらたたき競技に熱心なあのメイディアス[1]とか、何かそういった連中なのだ。かれらはミューズのめぐみにあずからないために、女たちの言い方で言えば、まだ奴隷の髪の毛[2]を心にもっていて、まだこれを落していないのに、国家のことを行なおうと試みる者どもなのだ。そしてまだ満足にギリシア語がしゃべれないのに、もうはいりこんで来て、国民を指導するというよりはむしろ、これに迎合しようとする者どもなのだが、きみも自分自身のことはかまわずに、ぼくの言うこの連中のほうに眼を向けていればいいわけなのだろうね。きみはこれだけの大競技に出ようC とするのに、学問にかかわることは学ばず、練習を必要とすることは練習せず、もう用意は万端ととのっているから、このまま国事に身を投ずればいいのだというのだからなあ。

アルキビアデス　いや、ソクラテス、あなたの言われることは本当だと思われるんですが、しかしどうも、スパルタの軍事指導者にしても、ペルシア王にしても、ほかのところの連中と何も違わないように思うんですが。

ソクラテス　しかし、このうえなくすぐれた人よ、そのきみの思っていることが、どんなものなのかよく考えてみたまえ。

アルキビアデス　それは何についてでしょうか。

ソクラテス　まず第一に、きみはどっちだと思うかね。きみが自分自身のことにいっそう気をつけるのは、か

D

れらを手ごわい相手だと思って、恐れる場合だろうか、それとも、そうでない場合だろうか。

アルキビアデス　むろん、手ごわい相手だと思う場合です。

ソクラテス　ところで、きみはまさか、自分自身のことに気をつけるのが害になるだろうとは思うまい。

アルキビアデス　ええ、けっしてそんなことは思いません。むしろ大きな利益があるだろうと思います。

ソクラテス　それなら、その点を一つ、きみはさっき思いちがいしていたのだ、重大なことをね。

アルキビアデス　ほんとうに、あなたの言われるとおりです。

ソクラテス　それでは第二の点にうつって、きみの思ったことがまた事実に反するという点をよくみてみたまえ。だいたいそれらしいと思われる(蓋然的な)論拠からでいい。

アルキビアデス　というと、それはいったいどういうふうにするのですか。

ソクラテス　だいたいのところ、それらしく思われるのはどっちだろうか、よい素質というものは、よい種族

1　アリストパネスの『鳥』(一二九七行)にこの名が出てくるが、彼は人から「うずら」と呼ばれていたという。それの古注によると、メイディアスはここに言われている「うずらたたき」や「闘鶏」に凝ったために喜劇作家から嘲弄されたということである。「うずらたたき」というのはアテナイでよくはやった遊戯であって、一方の者が一羽のうずらをさし出すと、相手がそのうずらの頭を人差指でたたくか、二、三本の毛をむしりとるかする。うずらがじっとしていればその持ち主の勝になるが、逃げればたたいたほうの勝になる。アルキビアデスもこの遊戯に凝っていたと言われている。

2　奴隷は髪を全部短く刈るか、頭のてっぺんを残して他を刈るのが当時の風習であった。したがって解放されて自由な身分となっても当分は奴隷であった跡が一目瞭然でわかるのである。成上がり者の元の身分がすぐそれと察しられるということが、この比喩で語られた。「女たちの言い方で言えば」というのは女たちがその種の言い方あるいは観察を好んだためであろう。

(120) E

に生ずるのだろうか、それともそうではないのだろうか。

アルキビアデス それはむろん、よい種族に生ずるのです。

ソクラテス すると、よい素質をもって生まれたものが、またさらによく育てられるなら、よいほうに向かって完成されるということも、だいたいありそうなことではないか。

アルキビアデス ええ、それはそうなければなりません。

一七

ソクラテス それでは、相手がたのとわれわれ側のとを対照させながら、よく見てみることにしよう。まず第一には、スパルタやペルシアの王さまたちが、われわれよりも劣った種族のひとであるかどうかということを。いや、むろんわれわれは知っているのではないか。スパルタ王はヘラクレスの子孫であり、ペルシア王はアカイメネスの子孫なのである。そしてヘラクレスの血統も、アカイメネスの血統も、ゼウスの子ペルセウスにさかのぼられるものなのである。(1)

121

アルキビアデス ええ、それはそうですが、うちの血統も、ソクラテスよ、エウリュサケスにさかのぼられ、(2)エウリュサケスの血統が、またゼウスにさかのぼられるのですからねえ。

ソクラテス うん、それはぼくのうちのだって、おお、よき生れのアルキビアデスよ、ダイダロスにさかのぼられ、(3)このダイダロスがゼウスの子へパイストスへつながるのだからねえ。(4)しかしかれらのほうは、かれら自身をはじめとしてゼウスに至るまで、全部の系統が王さまばかりで、一方はアルゴスとスパルタを支配し、他方は

常にペルシアを支配するとともに、またしばしば現在もそうであるように、アジア全体を支配しているのである。ところが、われわれのほうは、われわれ自身もわれわれの父親たちも平民なのである。もしこれできみが、きみの祖先なり、あるいはエウリュサケスの生地サラミス[5]なり、あるいはさらに昔にさかのぼって、アイアコスの生 B 地アイギナ[6]なりを、ペルシア王、クセルクセスの子アルトクセルクセス[7]の前に披露しなければならないとしたら、どんな笑い草になるか、きみはわかるかね。いや、むしろ気をつけて見ることだ。われわれはかの人たちから、種族の誇りとなるものにおいても、またそのほか、これを守りそだてるものにおいても、劣勢にあるのではない

1　ドリア人はヘラクレスの子孫と言われている。そして伝説によると、ヘラクレスはアンピトリュオンの子と言われ、後者はペルセウスの孫、そしてペルセウスはゼウスとダナエの子と言われている。またヘロドトス(『歴史』第七巻(一一))によると、クセルクセスやダレイオスはアカイメネスの子孫と言われているが、このアカイメネスもまたペルセウスの子と言われているのである。

2　アルキビアデスの祖先はさかのぼるとエウリュサケスに至ると言われる。エウリュサケスはアイアスの子、アイアスはテラモンの子であり、さらにテラモンからさかのぼるとアイアコスを経てゼウスに至る、と古注は記している。

3・4　ダイダロスはクレテ島に迷宮(ラビュリントス)をつくったり、また後にみずからその迷宮に閉じ込められた時、人工の翼を作って脱出したという伝説のためによく知られている工人。古注によるとソクラテスの祖先はダイダロスに至り、またさらにさかのぼるとエレクテウスに至り、このエレクテウスはヘパイストスとゲ(大地)の子とされている。ヘパイストスがゼウスとヘラとを両親とする鍛冶の神であることは周知のことであろう。

5・6　サラミスはアッティカの南東海岸にほど近い島。アイギナはサラミスからさらに南へ下ったところに横たわる島。アルキビアデスが自分の祖先だと言うエウリュサケスの、さらにその祖先たるアイアコスはここに住んだ。この島の住民が亡びたとき、敬虔なアイアコスを救うためにゼウスが蟻を人間に変えてそこの住民にしたという話がある。しかし彼の子テラモンとペレウスは円盤投げで彼らの異母兄弟ポコスを殺し、アイアコスに見つかって追放された。そしてテラモンはサラミスに移り住んだという。

7　普通アルタクセルクセスとも言われる。クセルクセスとアメストリスの子。在位期間は前四六四―四二三年。

(121) かということを。それともきみは、スパルタ王の特典がいかに大きいものであるかに気がつかなかったのか。かれらの妻女たちが、エポロイ(政務総監)の国家的な監督のもとにあるのも、そのためであって、ヘラクレスの子 C 孫以外の種から、知らぬ間に王位につくものが生まれるようなことを極力防ぐためなのである。しかしペルシア王の優位は、はるかに大であって、王以外の種から王になるものが生まれるというような可能性を、何びとも考えつかないほどなのである。だから、王妃を守るものは、恐懼(きょうく)だけで、ほかにはないのである。そして王位継承者たる長子が生まれると、かれの臣下となる宮廷の全員が、いち早くこれを奉祝し、ついでそれ以後は、この同 D じ日に全アジアが、王の誕生を祝って、犠牲をささげ、お祭りをするのである。これに反して、アルキビアデスよ、われわれが生まれても、喜劇の文句ではないが、隣りのひとさえさっぱり気にとめてくれないのである。それから後、王子の養育は、軽い身分の乳母といったような女の手にゆだねられるのではなくて、王側近者のうちでも最高と考えられる宦官(かんがん)の手によって行なわれるのである。かれらはこの生まれた子供のために、いろいろと世話する任務を負わされているのであるが、特にこれをできるだけ美しい子供にすることが大役で、そのために E かれらは、王子の四肢を整形矯正するのであって、この役目のために、かれらはまたたいへん尊重されるのである。そして王子が七歳になると、馬場に通い、その教師につき、そして狩猟に行くことを始める。そして年が一四になると、王室のパイダゴーゴス(子供掛り)と呼ばれる者の手に引き取られて、教育を受けることになるのであるが、この人たちはペルシア人のうちから選抜された成年男子で、最優秀と判定された者四人である。すなわ 122 ち知恵(智慧)と正義と節制と勇気において、それぞれ第一人者たる者である。そのうち知恵の第一人者は、ホロマゼスの子ゾロアステル(1)の秘儀を教える。これは神々の礼拝祭式をいうのであるが、またさらに王道についても

教える。次に正義の第一人者は、全生涯を通じて誠実であることを教え、節制の第一人者は一つも快楽によって支配されることのないように教える。それはまず自己自身のうちにあるものを支配し、これの奴隷とならないようにして、自由の人となり、真の王者となるように習慣づけ、性格づけるためのものなのである。また勇気の第一人者の教えは、恐怖や怯懦(きょうだ)のこころを取りのぞくようにはからうものであるが、これは、恐れるようでは奴隷

B

だという考えにもとづくものなのである。ところが、アルキビアデスよ、きみのためにペリクレスがパイダゴーゴス(子供掛り)としてつけてくれたのは、トラキア生れのゾピュロス[2]で、これは老齢のために、召使のうちでもいちばん役に立たなくなってしまった者なのだ。ぼくはこのほかにも、きみの競争相手の養育や教育について、もっとくわしい話をしただろう。もしそれが大仕事でなく、また同時に、もうこれまでに言ったことで、これに関連するほかのことも、充分明らかになるのでなかったらね。ところが、アルキビアデスよ、きみの出生にしても、またきみの養育や教育にしても、それはアテナイ人の他の誰でも同じことだけれども、いわば誰一人気にしてくれる者はないのだ。もしあれば、誰かきみに恋する者がそうするだけなのだ。

またさらにもしきみが、もろもろの富や贅沢(ぜいたく)に眼を向け、ペルシア人の衣装の数々、その長く上衣を引き、香

1　古注によるとプラトンより六千年前にいて、ギリシア人とも、また海のかなたから渡って来たものの子とも言われ、よき神から学んで何でも知っていたといわれている。明らかに東方起原と思われるいろいろな伝説が彼に付随しているが、また神学、自然学、星学、魔術、等に関する、二百万行とか、一千万語とかいう莫大な作品が彼のものとされていると言われている。

2　この人物に関しては、プラトンのこの箇所だけで他には何も証言はないようである。

C 料を塗り、召使をあまた引きつれるなど、その他にも豪奢のさまを見れば、きみは自分がどれだけかれらに及ばないかを認めて、わが身の上を恥じるだろう。

一八

またさらにもしきみが、スパルタ人の節制で礼儀正しいことに眼を向け、かれらがよく困難や欠乏に堪え、度量も大きく、よく秩序を守り、勇気と忍耐に富み、仕事を好み、勝利と名誉を愛するのを見るならば、これらす
D べての点において、きみは自分を子供だと思うだろう。またさらにもしきみが、富というものにも意を用い、これに関してもひとかどの者だと考えているならば、この点もわれわれは不問に付すべきではないであろう。きみの程度がどのくらいのところにあるかを、なんらかの仕方できみに気づかせることになるならばだ。というのは、この点はもしきみが、スパルタ人の富というものを見る気になりさえすればわかるはずで、われわれの富はかれらの富に遠く及ばないのである。すなわちかれらが自分たちのところとメッセネ[1]にもっている土地についてみれば、その面積が広くて地味のゆたかなことは、われわれのところに土地をもっている者の誰一人として、これに異議をさしはさむことのできる者はいないのである。またさらに奴隷の所有、特にヘロット[2]の所有においても、
E さらにまた馬の所有にしても、またメッセネで牧畜されている他の動物にしても、同じことなのである。しかしこれらのことは、すべて触れないでおくとしても、金貨や銀貨は、全ギリシアにあるものが、スパルタで私有されているものに及ばないのである。というのは、すでに何代にもわたって、全ギリシアからあそこへそれは流れこんでいるのであり、ギリシア以外のところからはいって来るものも少なくないのであるが、しかしそこからは、

123

どこへも出て行かないのである。むしろまるでイソップの話そっくりに、狐がライオンに言ったとおり、スパルタへはいって往く貨幣の足跡は、いずれもはっきりとその方向をさしているのであるが、そこから出て来るものの足跡は、誰も見ることができないのである。したがってわれわれは、ギリシア人のうちで金銀のいずれにおいても、最も富める者はスパルタの人間であり、かれら自身のあいだにあっては、その王であることをよく知らなければならない。というのは、この種の収入のうちから、その最も高額のものが、最も数多く王の手中に帰するからであり、さらにまたスパルタ人が王に納める、王の税収入も少なからぬ額に達するからである。

B

ところで、スパルタ人の所有は、ギリシア人の富として考えれば大きなものであるが、しかしペルシア人やペルシア王のそれに比較すれば無なのである。というのは、ぼくはペルシア王のお膝もとへ上(のぼ)ったことのある人たちの一人で、充分信用できる人から、こういう話を聞いたことがある。その人の言うところによると、ほとんど一日行程の、非常に広くてゆたかな土地を通過した時、土地のひとはそこを王妃の帯と呼んでいたそうだ。そし

C

てまた王妃のヴェールと呼ばれる土地が別にあり、ほかにもたくさんの立派な土地が、王妃の装身具のために特別に捧げられていて、それぞれに装身具の名前をもらっていたというのである。だから、ぼくの思うに、もし誰かが王の母であり、クセルクセスの妻であったアメストリスに向かって、あなたの御子息に対して、デイノマケ(3)という女の息子が、挑戦するつもりでいるが、その女の装身具は、非常に高く見つもって、たぶん五〇ムナくら

1 ペロポンネソス半島南東の一画。耕作して田畑にするに適したよい土地だと言われた。

2 スパルタ人の所有していた農奴にあてられた名称。これはスパルタでもメッセネでも同じくそう呼ばれた。ヘロットは自由民と奴隷の中間に位していたようである。

3 アルキビアデスの母。本篇105D参照。

いの値うちがあり、その息子は、三〇〇プレトロンたらずの土地をエルキアイ(1)にもっていると告げるなら、その D アルキビアデスなる者は、そもそも何を頼みにして、アルトクセルクセスと勝負をしようなどと考えているのかと不思議に思い、それでもその男がそのような企てをするのなら、勤勉と知恵以外には、何も頼みにするものがないわけで、ギリシアでは挙げるに足るものは、この二つがあるばかりだからと、こうかの女は言うだろうと思う。それをもし、このアルキビアデスという者は、いまこのような企てをしているけれども、第一、まだ年は二〇になるかならないかであり、そのうえ、ぜんぜん教育がなく、さらに加えて、かれの身の上を案じてくれる恋人がかれに向かって、まず学問をし、自分自身のことに気をつけ、練習をつんだうえで、ペルシア王との競技に出るようにすべきだと言ってきかせても、その気にはならず、このままでたくさんだと主張しているのだという E ことを、かの女が聞き知ったなら、あきれて質問するだろうと思う。それではいったい、その若者が頼みにしているのは何かということをね。これに対してわれわれが、その頼みとするところは美と大であり、家がらと富であり、生まれついたままの心ばえだけであると言うならば、かの女は自分たちのところにある以上のようなもの、すべてをながめわたして、われわれを、アルキビアデスよ、狂人だと判断するだろう。

またレオテュキデスの娘で、アルキダモスの妻、またアギスの母という、いずれも王であった人たちとそうい 124 う関係にあったランピド(2)にしても、きみがいまのような悪い育ち方で、かの女の息子と一勝負しようと考えているのなら、かの女もまた自分たちのところにある有利な条件をかえりみて、きみの考えに驚きあきれるだろうと思う。しかしどうも、敵方の女たちのほうが、われわれがわれわれ自身についてするよりも、もっとよくわれわれについて、もしかれらと競技を試みるのなら、われわれはどうなければならないかということを考えてくれる

というのでは、恥ずかしいことになるとは思われないかね。もうくだくだ言うことはないのだ。めぐまれた人よ、きみはぼくの言うことをきき、デルポイの神殿に掲げられた言葉に従って、汝(なんじ)みずからを知ることだね。われわれの相手にしなければならないのは、かの人たちであって、きみが考えているような者たちのことではないからだ。 B そしてかの人たちに対して、われわれが優位に立つことができるのは、勤勉と技術による場合が、あるいは考えられるかもしれないけれども、それ以外には一つもありえないのである。だから、この点においてきみが不足の多い者だとすれば、きみが名をギリシア人だけでなく、ギリシア人以外の人たちのあいだにもあげようとするのにも、やはり不足が多いことになるだろう。きみのそのねがいは、他のひとが他のことについてするのとは比較にならないほど、情熱的なものだと思われるけれどもね。

一九

アルキビアデス それなら、自分自身に気をつけるって、ソクラテス、どうすればいいんですか。その神託の意味は解いてもらえるでしょうね。何にしても、あなたの言われたことは本当のように思われるので、お願いしたいのです。

---

1 アッティカの一つの区。しかし位置はわかっていない。

2 レオテュキデスは前四九一年に即位したスパルタの王、前四六九年に死んだ。アルキダモス二世は彼の孫。だからランピドとは叔母と甥の関係になる。前四三一、四三〇、四二八年に、ペロポンネソスの軍勢を率いてアッティカに侵入した。アギス二世はアルキダモスの子、前四二七年に即位。

C

ソクラテス　それは承知だ。しかしわれわれができるだけすぐれた善い人間になるには、どうしたらよいかということは、われわれ共通の案件だからねえ。というのは、教育を受ける必要があるということを、こうやってぼくが言っているのは、なにも自分のことは抜かして、きみについてだけ言っているわけではないからだ。ぼくはきみと、ただ一点を除けば、何も違うところはないからだ。

アルキビアデス　その一点って、何ですか。

ソクラテス　ぼくの後見は、きみの後見人ペリクレスよりも、もっと知恵があって、すぐれているのだ。

アルキビアデス　それはどなたですか。

ソクラテス　神さまなのだ、アルキビアデス、今日この日まできみと言葉をかわすことをぼくに許さなかった神さまなのだ。そしてぼくの手を通してでなければ、ほかの誰によっても、きみに顕職(顕現)は得られないだろうとぼくが言っているのも、これの信仰にもとづくわけなのだ。

D

アルキビアデス　冗談ばっかり　ソクラテス。

ソクラテス　うん、たぶんね。しかしながら、われわれは気をつける必要があるという、ぼくの言葉はうそではないのだ。むしろすべての人間がそうなのだが、しかしわれわれ両人は特にそうなのだ。

アルキビアデス　ぼくがそうだと言われるぶんには、うそはありません。

ソクラテス　いやしかし、ぼくだって同じだよ。

アルキビアデス　そうすると、わたしたちのすることは何なんでしょうか。

ソクラテス　音(ね)をあげるわけにもいかないし、弱気になってもいけないのだ、われわれの仲間よ。

アルキビアデス　そうです、それはみっともないことですからね。

ソクラテス　うん、そうだとも。むしろわれわれは共同して、これを考察しなければならないのだ。それでは、どうか言ってくれたまえ。すなわちわれわれの主張では、できるだけすぐれた善い人間になるということが、われわれの望みだったのだ。ね、そうだろう。

E

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　そのよさは、何のよさかね。

アルキビアデス　むろん、すぐれた善い人たちのよさです。

ソクラテス　何にすぐれた善い人たちのかね。

アルキビアデス　むろん、仕事をすることにです。

ソクラテス　それはどんな仕事かね。馬を取り扱う仕事かね。

アルキビアデス　いいえ、けっして。

ソクラテス　そのことなら、馬術家のところへ行けばよかったわけだからねえ。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　しかしそれなら、きみの言うのは船をあやつる仕事かね。

アルキビアデス　いいえ。

ソクラテス　これも船乗りのところへ行けばよかったはずだからねえ。

アルキビアデス　そうです。

125

ソクラテス　しかしそれなら、どんな仕事かね。どういう人のする仕事かね。

アルキビアデス　それはアテナイのちゃんとした然るべき人（善美の人）のする仕事です。

ソクラテス　で、きみがちゃんとした然るべき人だと言うのは、賢い人がそうなのかね、それとも賢くない人がそうなのかね。

アルキビアデス　賢い人です。

ソクラテス　すると、ひとはそれぞれに賢い方面があって、それに関してはすぐれているということになるのではないか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　また、賢くないことがらについては、役に立たないのではないか。

アルキビアデス　それに違いありません。

ソクラテス　ところで、靴をつくる者は、はきもの作りには賢いのかね。

アルキビアデス　ええ、賢いですとも。

ソクラテス　したがって、それには善いわけだ。

アルキビアデス　はい、善い（すぐれた）人です。

ソクラテス　しかしどうだろう。衣服をつくるのには、靴屋は賢くはないのではないか。

アルキビアデス　そうです。

B

ソクラテス　したがって、それには悪い（劣っている）わけだろう？

アルキビアデス　そうです。
ソクラテス　してみると、いまの議論では、同じ人が善でもあり、悪でもあるということになる。
アルキビアデス　明らかにそうです。

二〇

ソクラテス　するときみは、そもそもすぐれた善い人が、また悪い人であるということを言おうとするのかね。
アルキビアデス　いいえ、けっして。
ソクラテス　しかしそれなら、きみの言うすぐれた善い人というのは、いったいどういう人なのかね。
アルキビアデス　それは国家社会のうちにあって、支配する能力をもっている人たちを言うのです。
ソクラテス　支配するって、むろん、馬を支配するというんじゃあないだろうね。
アルキビアデス　いいえ、けっして。
ソクラテス　そうではなくって、人間を支配するのかね。
アルキビアデス　そうです。
ソクラテス　というのは、病気の人間をということかね。
アルキビアデス　いいえ。
ソクラテス　しかしそれなら、航海する人間かね。
アルキビアデス　いいえ。

ソクラテス　しかしそれなら、とり入れに働く人間かね。

アルキビアデス　いいえ。

C

ソクラテス　しかしそれなら、何もしていない人間なのかね。それとも何かはしている人間かね。

アルキビアデス　ぼくの言うのは、している人間のほうです。

ソクラテス　何をしている人間かね。ひとつぼくにもはっきりわからせるようにしてくれたまえ。

アルキビアデス　それなら言いますが、互いに相寄り、相たすけて、互いの用に立っている人間のことです。そしてこれは国家社会のうちにおけるわれわれの生活の仕方なのです。

ソクラテス　すると、きみが支配ということを言っているのは、人間を用立て、人間を使用している人間の、そのまた支配ということなのかね。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　はたしてどうかね、水夫長は水夫の使用人だけれども、その水夫長をまた支配するというのが、それに当るのかね。

アルキビアデス　いいえ、けっして。

ソクラテス　そういうことをするのは、船長の特技だからねえ。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　しかしそれなら、きみの言う人間の支配とは、笛を吹く人たちを支配することなのかね。人びと

D

はかれらの先導の下に歌をうたい、合唱隊の人たちはかれらに使われることになるのだけれども。

アルキビアデス　いいえ、けっして。

ソクラテス　この場合はまた、そうするのは合唱の総指揮者の特技だからね。

アルキビアデス　ええ、まったくそうです。

ソクラテス　しかしそれなら、人間が人間を使用しているのを、また支配することができるときみが言っているのは、いったい何のことかね。

アルキビアデス　ぼくが言うのは、国家の一員として国政に参与し、互いに取引をする人たちの支配、すなわち国家社会のうちにある人間を支配することです。

二

ソクラテス　すると、それを取り扱う技術は何かね。というのは、いまあげた例でもう一度きみに質問すれば、船を動かす仕事に参与する人たちの支配はどうするのかということについて、知識を与えてくれるのは、何の技術かという質問と同じ意味なのだ。

アルキビアデス　それは船長の技術です。

E

ソクラテス　では、いま言われたような唱歌の共同者たちを支配できるようにしてくれるのは、何の知識かね。(1)

アルキビアデス　いましがたあなたの言われたもの、すなわち合唱総指揮者の技術です。

1　バーネットによらず、τίς と疑問詞に読む。

ソクラテス　では、どうかね。国政に参与する共同者たちを支配するための知識は、何と呼ぶのかね。

アルキビアデス　いい案を出す(いい助言をする)ことのそれですよ、ソクラテス。

ソクラテス　では、どうかね。船長の技術はいい案を出すことのできないものだと思われるかね。

アルキビアデス　いいえ、けっしてそんなことはありません。

ソクラテス　むしろいい案を出すものだろう？

アルキビアデス　ええ、ぼくはそう思います。それは船客の安全をはかることに関しては、いい考案をするものなのです。

126

ソクラテス　いや、ありがとう。では、どうかね。きみの言おうとしている考案の妙は、何のためなのかね。

アルキビアデス　国の政治をよくして、それを安全に保つためのものです。

ソクラテス　しかし国の政治がよくなり、それが安全に保たれるのは、何が来て宿り、何が離れ去ることによってなのかね。というのは、たとえばきみがぼくに向かって、身体の状態がよくなって、それが安全に保たれるのは、何が来て宿り、何が離れて行くことによるのかとたずねるなら、ぼくは健康が宿り、病気が去ることによってと答えるだろう。どうだね、きみもそう思わないかね。

B

アルキビアデス　ええ、そう思います。

ソクラテス　またもしきみが今度は、何が来て宿ると、眼の状態はよくなるのかとぼくにきくならば、いまと同じように、視力が宿り、盲目の状態がなくなればと答えるだろう。また耳も、難聴が去って、聴覚が生ずれば、状態は改善され、その手当も上手にされたことになる。

アルキビアデス　ええ、その答えでいいわけです。

ソクラテス　では、いったいどうなのかね。国家は何が来て宿り、何が離れ去ることによって、より善くなり、その手当も政治も、いっそうよく行なわれていることになるのかね。

C **アルキビアデス**　ぼくの思うところでは、ソクラテス、国家の成員のあいだに相互の親愛が生まれ、憎悪や党派の分裂がなくなっていく時にそうなるのです。

ソクラテス　それでは、きみの言う親愛は、考えが一致し、心が一つになることなのかね、それとも考えが分れ心が一つにならないことなのかね。

アルキビアデス　考えの一致することです。

ソクラテス　それでは、国家と国家のあいだで、数についての一致した考えができるのは、何の技術によるのかね。

アルキビアデス　算数の術によります。

ソクラテス　では、個人のあいだではどうかね。それもやはり同じ技術によるのではないか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　また各個人が、自分で自分に一致した考えをもつのも、そうではないか。

アルキビアデス　そうです。

D **ソクラテス**　また各人が、寸と尺でどちらが大きいかということについて、自分で自分と考えが一致するのは、何の技術によるのかね。それは度量の技術によるのではないか。

アルキビアデス　むろん、それに違いありません。

ソクラテス　そしてそれは、個人相互のあいだでも、国家相互のあいだでも、やはりそうなのではないか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　では、どうかね。重量についても同様ではないかね。

アルキビアデス　はい、そうです。

ソクラテス　では、いったいきみの言う考えの一致というのは、どういうものなのかね。また何についてのものなのかね。そしてその一致を生じさせるのは、どんな技術なのかね。また国家のためにそれを生じさせるのも、個人のために、自分が自分自身に対する場合でも、また他人に対する場合でも、これを生じさせるのも、はたして同じ技術なのかね。

アルキビアデス　ええ、とにかくそれがとうぜんでしょうからね。

E

ソクラテス　すると、それは何なのかね。もう答えはいやかもしれないが、まあへこたれずに、奮発して言ってみてくれたまえ。

アルキビアデス　わたしが親愛とか、一つ心とか言おうとしているのは、父母が息子を愛して、これと一つ心になるとか、兄弟や夫婦が一致した考えをもつとかいう場合のそれだと思います。

一二

ソクラテス　すると、アルキビアデス、きみは毛糸をつむぐのに、それの知識を欠いている夫が、それの知識

127

をもっている妻と、一致した考えをもつことができるだろうと思うのかね。

アルキビアデス いいえ、けっして。

ソクラテス またなんらその必要もないのである。それは女が知っていればいいことなのだからね。

アルキビアデス そうです。

ソクラテス では、どうかね。妻は夫に対して、自分が学んだこともない武術について、一致した考えをもつことができるだろうか。

アルキビアデス いいえ、けっして。

ソクラテス 今度は、それは男のすることだと、たぶんきみは主張するだろうからね。

アルキビアデス ええ、そう主張します。

ソクラテス してみると、きみの説では、女の学ぶことと、男の学ぶこととは別なのだね。

アルキビアデス それに違いありません。

ソクラテス したがって、とにかくそういう別々のものにあっては、男女のあいだに考えの一致が成立するということはないわけである。

アルキビアデス ええ、それはありえません。

ソクラテス したがって、親愛もまたないわけである。もし親愛というものが、考えの一致によって心を一つにすることだとしたならば。

アルキビアデス 見たところ、そうなります。

ソクラテス　してみると、妻女は自分たちの仕事をしているかぎりにおいては、夫たる男たちからは愛されないということになるのではないか。

B

アルキビアデス　ええ、そんなことになるかもしれません。

ソクラテス　またしたがって夫たちも、自分自身の仕事をしているかぎりにおいては、その妻によって愛されないということになる。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　またしたがって国家の政治も、そういうふうに、各人が自分自身の仕事をしているのでは、うまくいかないということになるのかね。

アルキビアデス　いいえ、それはうまくいくとぼくは思うんですが、ソクラテス。

ソクラテス　それは、どうしてそんなことが言えるのかね。われわれは親愛というものが生ずることによって、国の政治はよくなるけれども、そうでなければ、うまくいかないと主張したはずだのに、いまは現に親愛がなくてもいいことになるなんて。

C

アルキビアデス　いやしかし、そうやって、各人が自分自身の仕事をすることでも、かれらの間に親愛の関係が生まれてくると、ぼくは思うんです。

ソクラテス　それはさっきの議論では、そうはいかなかったのだ。しかし今度はまた、どう言おうとするのかね。考えの一致がなくても、親愛の関係は生ずるというのかね。それともまた、一方は知っているけれども、他方は知らないというようなことがらについて、考えの一致が生じうるというのかね。

アルキビアデス　それは不可能です。

ソクラテス　しかしめいめいが自分自身のすることをするという時、正しいことをしているのだろうか、正しくないことをしているのだろうか。

アルキビアデス　それは正しいことをしているのです。どうしてそうでないことがありましょう。

ソクラテス　それなら、正しいことをその国のなかで国民が行なっているのに、かれら相互のあいだに親愛関係が生じないというのだろうか。

アルキビアデス　いいえ、そういう関係が必ずまた生じなければならないと思いますよ、ソクラテス。

D

ソクラテス　そうすると、きみの言う親愛とか、一つ心に考えが一致するとかいうのは、いったい何なのかね。われわれがすぐれた善い人間であるためには、それについてこそわれわれは知恵をもち、よい考案を出すことができなければならないのだがね。ぼくのこの疑問は、それが何であるのか、また何もののうちにあるのか、理解することができないからなのだ。なぜなら、きみの議論からすると、明らかにそれは、同じ人たちについても、一方の条件で考えれば、そのうちにあることになるけれども、他の条件で考えれば、そのうちにはないということになるようなものだからだ。

二三

アルキビアデス　しかしながら、神々に誓って、ソクラテスよ、わたしも自分で何と言っていいのかわからないのです。おそらくもうずっと前から、わたしは自分自身のこのしごく恥ずかしいありさまに、まったく気がつ

(127)

いていなかったのかもしれません。

ソクラテス　いや、悲観することはないのだ。これがもし、きみが五〇の年齢になって、自分がこの病状にあるのを覚（さと）ったのだとしたら、自分自身に気をつけるということは、きみには難儀なことだったろう。しかし今のきみの年齢は、まさにそのことを覚るべき、ちょうどいい年齢なのだからねえ。

E

アルキビアデス　それなら、そのことを覚った者は、どうすればいいのですか、ソクラテス。

ソクラテス　質問に答えてくれさえすればいいんだよ、アルキビアデス。そしてきみがそうしてくれれば、神の御意がそこにあるかぎり、もしぼくの予感にも何か信ずべきものがあるとすれば、きみもぼくも、もっとうまくやれるようになるだろう。

アルキビアデス　わたしが答えるだけのことなら、おっしゃるとおりにしましょう。

128

ソクラテス　よしきた、それなら、自分自身に気をつけるというのは何かね——というのは、うっかりして時どきわれわれは、自分自身に気をつけているつもりで、実際はそうしていないことがあるんではないかと懸念するからだ——また人間がそうするのは、はたしてどういう場合のことなのだろうか。そもそもひとは、自分のことに気をつけている時には、また自分自身にも気をつけていることになるのだろうか。

アルキビアデス　ええ、わたしはそう思いますが。

ソクラテス　では、どうかね。人間が足に気をつけるのは、どういう場合だろうか。そもそも足に付属することがらに気をつける時が、そうなのだろうか。

アルキビアデス　というのは、どういう意味でしょうか、ぼくにはわかりませんが。

ソクラテス でも、手の何か〔付属物〕というようなことを言うことはないかね。たとえば指輪は、指のそれではなくて、人体の他の何かの部分のであるというようなことを、きみは主張するだろうか。
アルキビアデス いいえ、けっして。
ソクラテス それならまた、はき物が足の〔付属物〕である関係も同様ではないのか。
アルキビアデス 同様です。
ソクラテス また着物やふとんが、身体の他の部分のそれである関係も同様だろう？
アルキビアデス そうです。

B

ソクラテス それならはたしてわれわれは、はき物に気をつけている時は、足に気をつけている時なのだろうか。
アルキビアデス 御質問の意味がよくわかりませんが、ソクラテス。
ソクラテス では、どうかね、アルキビアデス、正しい仕方で気をつけ、面倒をみるということが、どんな事物についても、何かあるということをきみは認めるかね。
アルキビアデス はい、認めます。
ソクラテス それでは、ひとが何かを一段とよくする場合には、面倒のみかたが正しかったと言うのかね。
アルキビアデス はい。
ソクラテス それでは、はき物を一段とよくつくるのは、何の技術かね。
アルキビアデス 靴屋の技術です。

C

ソクラテス　すると、われわれがはき物の面倒をみるのは、靴屋の技術によるというわけなのかね。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　また足の面倒をみるのも、靴屋の技術でというわけかね。それともそれは、われわれが足をよくするための技術によるのかね。

アルキビアデス　ええ、その技術によります。

ソクラテス　ところで、足をよくするのは、またそれによって身体の他の部分もよくする技術なのではないか。

アルキビアデス　はい、そう思います。

ソクラテス　そしてそれは、体育術ではないのか。

アルキビアデス　最大限にそうです。

ソクラテス　してみると、体育術によってわれわれは足の面倒をみ、靴屋の技術によって、足の付属物の面倒をみるというわけかね。

アルキビアデス　ええ、まったくそうです。

ソクラテス　また体育術によって手の面倒をみ、指輪つくりの技術によって、手の付属物の面倒をみるということにもなる？

アルキビアデス　はい。

D

ソクラテス　また体育術によって身体の面倒をみ、機織(はたおり)その他の技術によって、身体の付属物の面倒をみるというわけかね。

アルキビアデス ええ、まったくそうです。

ソクラテス してみると、直接それぞれのものに気をつけて、面倒をみるのと、それの付属物に気をつけ、面倒をみるのとでは、いずれも別の技術によるわけだ。

アルキビアデス 明らかにそうです。

ソクラテス したがって、きみがきみの付属物に気をつけていても、それはきみ自身に気をつけていることにはならないわけだ。

アルキビアデス そうです、そういうことには決してなりません。

ソクラテス つまり自分自身の面倒をみるのと、自分の付属物の面倒をみるのとでは、いまの様子からすると、同じ技術によるのではないからだ。

アルキビアデス それは明らかです。

二四

ソクラテス さあ、それなら、いったいどのようなものによって、われわれはわれわれ自身に気をつけ、これの面倒をみることができるのだろうか。

アルキビアデス それはわたしには言えないのですが。

E

ソクラテス しかしとにかく、次の点までは同意ずみなのだ。すなわちそれはわれわれ自身をよりよくするためのものであって、われわれの付属物のうちから何か――それは何でもよいが――を、それによってよりよくす

るようなものではないということだけはね。

アルキビアデス　ええ、実際あなたの言われるとおりです。

ソクラテス　ところで、はき物をもしわれわれが知らなかったとしたら、はき物をよくするのはどういう技術であるかということを、いったいそもそもわれわれは知ることができただろうか。

アルキビアデス　いいえ、それは不可能です。

ソクラテス　また、指輪をもし知らなかったとしたら、指輪をよくするのはどういう技術であるかということを、知ることもできなかっただろう。

アルキビアデス　本当にそうです。

ソクラテス　では、どうかね。われわれが自分自身いったい何であるかを知らないでいて、自身をよくするものがどういう技術であるかを、はたしていったい知ることができるだろうか。

アルキビアデス　いいえ、それは不可能です。

ソクラテス　それなら、いったいどっちなのだ。自己自身を知るなんてことは、まさしく容易なことなのであって、デルポイの(ピュトの)神殿にこの言葉を献じた者は大した人間ではなかったということになるのか、それともそれは難事であって、誰でもできるというようなものではないということになるのか。

アルキビアデス　わたしには、ソクラテス、誰にでもできることのように思われることもしばしばですし、またたいへんむずかしいことのように思われることもたびたびあるのです。

ソクラテス　しかしアルキビアデス、それが容易なことにせよ、そうでないにせよ、われわれの事情はこうな

のだ。それを知れば、われわれはわれわれ自身に気をつけ、面倒をみるすべを、あるいは知ることができるかもしれないが、それを知らなくては、けっして知ることはできないのだ。

アルキビアデス　そうです、そのとおりです。

B

ソクラテス　さあ、それでは、どういう仕方でちょうどその「自身」というもの[1]が見いだされるのだろうか。というのは、これが見つかれば、われわれが自身いったい何であるかということも、あるいは見つかるかもしれないが、しかし依然これをまだ知らないでいたのでは、われわれにはそれを見つけることはできないだろうと思う。

アルキビアデス　お説のとおりです。

ソクラテス　さあ、そこでどうか、ゼウスの神かけて、ひとつ注意してもらいたいのだが、きみはいま誰と問答をしているのかね。ぼくとだろう。ね、そうじゃあないか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　したがって、ぼくもまたきみと問答しているのではないか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　してみると、問答をしかけるのはソクラテスかね。

アルキビアデス　ええ、まったくそのとおりです。

1　αὐτὸ ταὐτό でなく αὐτὸ τὸ "αὐτό" とよむ。オリュンピオドロス、シュタルバウムの読み方である。130D参照。

ソクラテス　これに対して問答をしかけられるのがアルキビアデスかね。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　そこでソクラテスは、問答をするのに言論をもってするのではないのか。

アルキビアデス　むろん、それに違いありません。

c

ソクラテス　ところで、問答をするというのも、言論を用いるというのも、きみは同じ意味に言うのだと思うがね。

アルキビアデス　はい、まったくそのとおりです。

ソクラテス　ところが、用いる者と用いられるものとは、別ではないのか。

アルキビアデス　というのは、どういう意味でしょうか。

ソクラテス　たとえば靴屋は、各種の刃物その他の道具をもって切断すると思うのだが。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　すると、この場合それを用いて切断する人は、その切断に用いられるものとは、別ものではないのか。

アルキビアデス　それに違いありません。

ソクラテス　すると、その仕方では、キタラ弾きが弾奏に用いるものと、キタラの弾奏者自身とは、別ものだということになるだろう。

アルキビアデス　はい。

D

ソクラテス　それならば、ぼくが今ちょっと前に質問しようとしたのは、このことだったのだ。つまり使用者と使用されるものとは、いかなる場合にも異なるものであると思われるか、どうかということだ。

アルキビアデス　それは異なるものだと思われます。

ソクラテス　それでは、われわれは靴屋について何と言ったものだろうか。かれはただ道具だけで切断するのだろうか、それともまた手でもやるのだろうか。

アルキビアデス　それは手でもやります。

ソクラテス　したがって、また手も使用するわけかね。

アルキビアデス　はい。

ソクラテス　そもそもまた、靴つくりの切断には、眼も使用するのかね。

アルキビアデス　はい。

ソクラテス　ところで、使用者と使用されるものとは異なるというのが、われわれの言論で一致した点なのだ。

アルキビアデス　そうです。

E

ソクラテス　したがって、靴屋もキタラの弾奏家も、手や眼のような、それでかれらが仕事をするものとは異なるということになる？

アルキビアデス　明らかにそうです。

二五

ソクラテス　ところで人間は、また身体の全体をも使用するのではないか。
アルキビアデス　ええ、まったくそのとおりです。
ソクラテス　ところで、使用者と使用されるものとは違うのだったね。
アルキビアデス　そうです。
ソクラテス　したがって、人間は自己の身体とは別ものであるということになるのかね。
アルキビアデス　そうかもしれません。
ソクラテス　では、人間とはいったい何だ。
アルキビアデス　答えられませんが。
ソクラテス　しかしとにかく、身体を使用する者だということだけは言えるはずだが。
アルキビアデス　はい。
ソクラテス　ところで、そもそもそれ(身体)を使用する者は、心(魂)のほかに何があるかね。
アルキビアデス　ほかにはありません。
ソクラテス　そしてそれは、身体を支配することによってではないのか。
アルキビアデス　ええ、そうです。
ソクラテス　さて、それなら、もう一つここに、誰も異論はないだろうと思うことがあるのだ。

アルキビアデス　どんなことですか。
ソクラテス　人間は三つのうちのとにかく一つだということさ。
アルキビアデス　三つって、何の三つでしょうか。
ソクラテス　心か身体か、あるいは両方を合わせた、その全体かということだ。
アルキビアデス　それに違いありません。
ソクラテス　ところがしかし、まさに身体を支配するものが人間だということを、われわれは一致して認めたのだ。

B

アルキビアデス　はい、認めました。
ソクラテス　すると、はたして身体は、自分で自分を支配するものなのだろうか。
アルキビアデス　いいえ、けっして。
ソクラテス　なぜなら、それは支配されるものだと、われわれは言ったのだからねえ。
アルキビアデス　はい。
ソクラテス　そうすると、これはわれわれの求めているものではないということになるだろう。
アルキビアデス　ええ、そういうことになるかもしれません。
ソクラテス　しかしそれなら、心身両方合わさったものが身体を支配するのだろうか。そしてしたがってこれが人間だということになるのだろうか。
アルキビアデス　たぶん、きっとそうかもしれません。

ソクラテス　いや、むしろその見こみはいちばん少ない。なぜなら、いっしょにいるもう一方のもの(心)が、支配してくれるのでなければ、両方合わさっても、それが支配するという道は何もないと思うからだ。

アルキビアデス　それはとうぜんです。

C

ソクラテス　ところで、身体も心身両方の合わさったものも人間ではないということになれば、思うに残るところは、そういうものは何もないか、あるいはもし何かあるとすれば、人間は心にほかならないという帰結だけであろう。

アルキビアデス　正確にそのとおりです。

ソクラテス　それでは、心が人間だということは、もっと何か明確な証明を必要とするだろうか。

アルキビアデス　いいえ、ゼウスに誓って、その必要はありません。これで充分だとぼくは思います。

ソクラテス　うん、それは厳密ではないにしても、ほどよく行なわれていれば、われわれには満足なのだ。厳密に知るということは、いまわれわれが多大の考究を必要とすることだとして、そのままにして来てしまったところのものを、われわれが発見してからのことだからね。

D

アルキビアデス　というと、それは何でしょうか。

ソクラテス　さっき何かこんなふうに言っておいたものさ。つまりまず直接に、「自身」というものそのものを見てみなければならないとね。ところが実際に今われわれがしたのは、じかにその「自身」というものをというのではなくて、個々のものについて、それの自身となるものを、何がそれであるのか直接に見るということだったのである。そしてたぶんこれで足りるだろう。なぜなら、われわれ自身の主となるものとしては、心よりも

っと適格なものを、何ひとつわれわれは挙げることはできないだろうと思うからだ。

アルキビアデス ええ、それはできませんとも。

ソクラテス それなら、こう見るのも悪くはないだろう。つまりきみとぼくの間の相互の交わりは、言論を用い、心で心に対する交わりなのだとね。

E

アルキビアデス ええ、まったくそのとおりです。

ソクラテス つまりこれが、少し前にもわれわれが言ったことだったのだ。ソクラテスはアルキビアデスと、言論を用いて問答しているというのがそれであったが、これはきみの外面を相手に言論をしているのではなく——と見るわけであるが——むしろアルキビアデスその人を相手にしているわけで、それはまたきみの心を相手にすることとなのだ。

アルキビアデス はい、そのとおりだと思います。

二六

ソクラテス してみると、「自身を知れ」という課題を出している人は、われわれに「心を知れ」と命じているわけなのだ。

131

アルキビアデス そうかもしれません。

ソクラテス してみると、身体のことを何かひとが知っていても、それは自分自身の付属物を知っているだけのことで、自分自身を知っているのではないことになる。

アルキビアデス　そのとおりです。

ソクラテス　してみると、医者は医者にとどまるかぎり、誰一人として自己自身を知る者はないのであり、体育家も体育家としてとどまるかぎり、やはり自分自身を知る者は一人もないのである。

アルキビアデス　そうかもしれません。

ソクラテス　してみると、農夫やほかの職人たちが、自分自身を知るなどということは、なかなかもってできないことだということになる。なぜなら、かれらはかれらの知っている技術によるかぎり、自分自身に付属するものさえも知らない模様であって、そういう自分自身の付属物よりも、さらに遠く離れたものを知るだけではないかと見られるからだ。というのは、かれらの知っているのは、身体がそれでもって奉仕され、世話を受けるところの、身体の付属物だからである。

B

アルキビアデス　あなたの言われることはほんとうです。

ソクラテス　してみると、自分自身を知るということが、克己節制するということ(思慮の健全さを保つこと)[1]だとすれば、これらの人たちは、その技術だけにたよっているかぎり、誰も思慮の健全な者はいないということになる。

アルキビアデス　ええ、そうなると思います。

ソクラテス　そしてまさにこの故に、これらの技術は、また単に職人的なものであり、すぐれた人の学ぶことではないようにも考えられたりするのである。

アルキビアデス　ええ、まったくそのとおりです。

ソクラテス それでは、またもとに戻って、こんどは身体の世話をする者をとってみると、これは自分自身の付属物を世話するけれども、自分自身を世話するのではないということになる。
アルキビアデス おそらくそうかもしれません。
ソクラテス うん、しかし金銭に奉仕する者は、自分自身に奉仕するのでもなければ、自分自身に付属するものの世話をするのでもなく、さらに遠く、自分自身に付属するものからも離れているものに奉仕しているのだと

c

いうことになるのではないか。
アルキビアデス ええ、ぼくはそう思います。
ソクラテス してみると、金もうけを主とする人というものは、自分自身のことを、もはや、していないことになる。
アルキビアデス とうぜんそうなります。
ソクラテス してみると、もし誰かアルキビアデスの肉体に愛着した者があるとすれば、それはアルキビアデスに恋愛したのではなくて、アルキビアデスの付属物の何かひとつを求めただけのことになる。
アルキビアデス ほんとうにあなたの言われるとおりです。
ソクラテス これに反して、きみに恋愛する者というのは、きみのたましい(心)を愛する者なのだ。

---

1 『カルミデス』164D sqq. 参照。原語「ソープロシュネー」の文字通りの意味は「思慮の健全」(正気)ということであるが、慣用の上では「克己」や「節制」を意味することになる。そしてそれはプラトンにおいて「自知」に結びつけられる。

アルキビアデス　必然にそうならなければならないことは、今までに言われたことから明らかです。

ソクラテス　それでは、きみの肉体を愛する者は、その花ざかりが過ぎれば、離れて遠のいてしまうわけではないか。

アルキビアデス　そうのようです。

D

ソクラテス　うん、ところが、そのたましいを愛する者は、それが向上の途(みち)をたどっているかぎり、離れ去ることはないのである。

アルキビアデス　ええ、そういうことが期待されます。

ソクラテス　それなら、ぼくがその離れ去ることをしない者なのだ。きみの肉体の開花期は過ぎ、ほかの連中は離れて行ってしまったのに、なおきみの側に残っている者なのだ。

アルキビアデス　ええ、どうも御親切さまです、ソクラテス。これでまた、あなたに見捨てられたりすることの、どうぞないように。

ソクラテス　それなら、ひとつ奮発して、できるだけ美しい人であるようにすることだ。

アルキビアデス　むろん、それは奮発しますけれど。

二七

E

ソクラテス　それはつまり、きみのことはこうなっているからなのだ。クレイニアスの子アルキビアデスには、恋する者が、おそらくは過去においても、また現在においても、ただ一人しかいなかったし、またいないのであ

って、その「いとしやただ一人」とは、ソプロニスコスとパイナレテの子ソクラテスなのだ。

アルキビアデス ほんとうに。

ソクラテス では、きみはさっきこう言わなかったかね。ぼくがきみのところへやってきたので、ほんの少しのところで先を越されてしまったが、むしろきみのほうが先にぼくのところへ来るところだったということをね。つまりなぜぼくだけがきみから離れて行かないのか、そのわけを知りたいというわけでね。

アルキビアデス ええ、たしかにそうでした。

ソクラテス それなら、その原因は、きみという人を愛したのはぼく一人だけで、ほかの人たちはきみの付属物を愛したにすぎなかったからだということにある。そしてきみの付属物は最盛期を過ぎようとしているけれども、きみ自身の開花期はいま始まりかけているからだ。そして今となっては、きみがアテナイの民衆によって腐敗させられ、いまよりも醜くなるようなことがないかぎり、ぼくは決してきみを見捨てるようなことはしないだろう。というわけは、ぼくがいちばん恐れているのは、そのことだからだ。きみが残念にも、民衆の恋人となって、腐敗させられはしないかということだ。なぜなら、よい生れの人で、そういう目にあった者も、すでにアテナイ人のうちにたくさんいるからだ。まことに「心ゆたけきエレクテウスの民」[1]は、外づらがいいからね。しかしそういう外皮ははぎとって、直接にこれを観察しなければならないのだ。それには、ぼくの言う用心を、きみはしなければならない。

1 ホメロス『イリアス』第二巻五四七行、エレクテウスは伝説的なアテナイの王。

アルキビアデス　それはどんな用心でしょうか。

B **ソクラテス**　まず練習だよ、しあわせな人、そして学ぶのだ。国事に赴くのは、それを学んでからにすべきであって、学ばない先にすべきではないというようなものがあるから、それを学ぶのだ。そうすればきみは、解毒剤をたずさえて行くことになり、何もひどい目にはあわないですむことになる。

アルキビアデス　それはどうも、ありがたいことを言ってくだすったようですね、ソクラテス。しかしまあ、もっとくわしい説明をしてみてください。どういうやり方をしたら、われわれはわれわれ自身に気をつけ、これの面倒をみることができるのでしょうか。

ソクラテス　それなら、われわれとしてはもうそこのところまではすませたことになるのだから、話をもっと先へすすめることができるというわけなのだね。というのは、われわれが何であるかは、かなりの程度まで議論が一致してしまっているからだ。ただわれわれの恐れるところは、その点でつまずいて、われわれ自身に気をつけているのではなくて、何かほかのものの面倒をみていながら、それに気づかないことがありはしないかということだったのである。

アルキビアデス　ええ、そうです。

C **ソクラテス**　またその次には、心に気をつけ、たましいの面倒をみなければならぬ、そしてこれに眼を向けるようにしなければならぬということで、われわれの議論は一致したのだ。

アルキビアデス　ええ、その点は明らかです。

ソクラテス　これに反して、身体や金銭に気をくばること(面倒をみること)は、ほかの者にまかせるほうがよ

いのである。

アルキビアデス それに違いありません。

ソクラテス それなら、問題のものをできるだけ明白に知るためには、どんなやり方がいいのだろうか。というのは、どうもわれわれは、それを知ることによって、またわれわれ自身をも知ることになるらしいからだ。神々に誓って言えば、今しがたわれわれが注意したデルポイ神殿の言葉は、うまく言われているのだけれども、われわれがその意味を理解しないのではないだろうか。

アルキビアデス そう言われるのは、どんなお考えからでしょうか、ソクラテス。

D **ソクラテス** ぼくはきみに打ち明けることにしよう。かの言葉がわれわれに何を語り、何を勧告しているものと、ぼくが推測しているかを。というのは、これの類例は、いろいろなところに数多く見られるというようなものでは決してなくて、ただ視覚においてのみ見られるものだからである。

アルキビアデス それはどういうお話なのでしょうか。

二八

ソクラテス まあ、きみもよく見てくれたまえ。もしかのデルポイの言葉が、われわれの眼に向かって、あたかも人間に対するがごとく、「なんじ自身を見よ」という勧告をしたとするならば、われわれはこれが何の忠告であるかということについて、どう解釈しただろうか。どうだね、それは眼をそのほうへ向けると、眼が自分自身を見ることになるような、そういうものへ眼を向けよとの忠告と解すべきではないか。

アルキビアデス　それは明らかにそうです。

ソクラテス　それでは、思い当るものがないか、考えてみようではないか。そもそも何へ眼を向けたら、そのものを見ると同時に、われわれ自身も見ることができるだろうか。

E

アルキビアデス　それはむろん、ソクラテス、鏡とか何かそういった種類のものを見ればよいわけです。

ソクラテス　まさにきみの言うとおりだ。それなら、われわれがものを見るのにつかう眼にも、やはり何かそういう種類のものが含まれているのではないか。

アルキビアデス　まったくそのとおりです。

133

ソクラテス　それなら、きみはもう気づいているだろうが、眼の中をのぞきこむと、自分の顔が相対する眼のおもてに、あたかも鏡に見るように現われていて、この鏡のようなものをまたわれわれは人見(ひとみ)と呼んでいるが、そこに現われてるものはのぞきこんでいる者の写影みたいなものなのだ。どうだね。

アルキビアデス　ほんとうに、あなたの言われるとおりです。

ソクラテス　してみると、眼は眼をながめることによって、とくにまたその最も大切な部分、まさにそれによって見るということが行なわれる部分、その部分へ眼を向けることによって、自分自身を見るということができるのである。

アルキビアデス　明らかにそうです。

ソクラテス　うん、ところが、人間の他の部分とか、あるいは事物一般の何かに眼を向けたのでは、それがたまたまこれと似ているのでもなければ、眼が自分自身を見るということはないだろう。

B

アルキビアデス ほんとうに、あなたの言われるとおりです。

ソクラテス したがって、眼は自分自身を見なければならないとしたら、眼で眼をながめることをしなければならない。とくに眼のうちでも、眼の本来の機能(徳)がちょうどそこに発動するような、そういう局所をながめなければならない。そしてその眼の本来の機能とは、視覚であると思うのだが。

アルキビアデス ええ、そのとおりです。

ソクラテス そうすると、愛するアルキビアデスよ、心もまた自分自身を知らねばならないとしたら、心で心をながめるようにしなければならないのかね。また特に心の本来の機能(徳)である知恵が、そこに生ずるような、心のそういう局所をながめなければならず、それ以外のものなら、ちょうどこれが似ているようなものを眺めなければならないのかね。

アルキビアデス ええ、そうだと思います、ソクラテス。

C

ソクラテス それなら、心のうちで、そのあたりに知るとか、思慮するとかいうことが行なわれるところよりも、もっと神に近い性質のものを、われわれは挙げることができるだろうか。

アルキビアデス それはできません。

ソクラテス してみると、神に似ているのは、心のこのところであって、ひとはこれをながめているうちに、また神的なものの全体を知ることになり[1]、それによってまた自分自身をも最大限に知ることができるようになる

1 バーネットによらず、θεόν τε καί φρόνησιν を省略する。

だろう。

アルキビアデス　明らかにそうです。(1)

ソクラテス　ところで、自分を知るということは、克己節制すること(思慮の健全さを保つこと)であるということについては、われわれの議論は一致していたはずだが。(2)

アルキビアデス　はい、そのとおりです。

二九

ソクラテス　それなら、われわれが自分自身を知らず、思慮の健全さを欠いているとしたら、われわれ自身に付属するものの善悪可否を、はたしてわれわれは知ることができるだろうか。

アルキビアデス　してどうして、そんなことができましょう、ソクラテス。

D

ソクラテス　それはたぶんきみの見るところでは、アルキビアデスを知らなければ、アルキビアデスのものがアルキビアデスのであることを知るのは、不可能だからだろう。

アルキビアデス　ええ、不可能ですとも、ゼウスに誓って。

ソクラテス　してみると、われわれのものをわれわれのものとして知ることも、もしまたわれわれ自身を知らないのだとしたら、不可能であろう。

アルキビアデス　ええ、不可能です。

ソクラテス　しかし、もしはたしてわれわれのものも知らないとすれば、われわれのものに付属するものは、

なお知らないだろう。

アルキビアデス　ええ、それは明らかです。

ソクラテス　してみると、さきほどわれわれは、自分自身は知らないけれども、自分のものは知っている人とか、あるいは自分のものの付属物は知っている人とかいうような、そういう人たちの存在を別々に認めることで、議論の一致を見たのだけれども、その一致はさっぱり正しくはなかったのである。なぜなら、これらのもの、すなわち自分自身も、自分のものも、自分のものの付属物も、みなすべてこれをしっかと見きわめるのは、［そういう別々の人たちではなくて］ただ一人のひと、ただ一つの技術でできることのように思われるからである。

E

アルキビアデス　おそらくそうなるかもしれません。

ソクラテス　またしかし、自分のものがわからなければ、また他人のものも、同じようにわからないだろうと思う。

アルキビアデス　ええ、それに違いありません。

ソクラテス　それなら、他人のものがわからなければ、国家社会のこともわからないことになるのではないか。

アルキビアデス　ええ、それは必然です。

ソクラテス　したがって、このような男が、一国の政治を扱うことはできないだろう。

アルキビアデス　ええ、けっしてできないでしょう。

1　133C8–17を省略し、B、T写本の通りに読む。

2　131B参照。

ソクラテス　また一家をととのえることも、けっしてできないだろう。
アルキビアデス　ええ、けっしてできないでしょう。
ソクラテス　うん、そして自分のしていることもわからないだろう。
アルキビアデス　ええ、たしかにそうです。
ソクラテス　しかしそれもわからないとすると、過ちをしでかすことになるのではないか。
アルキビアデス　ええ、まったくそうです。
ソクラテス　しかし過失をおかすとすると、それは公私いずれの場合においても、悪い(まずい)やり方をして(悪く行なって)いることになるのではないか。
アルキビアデス　それに違いありません。
ソクラテス　しかしまずい(悪い)やり方をするとなれば、それは〔まずいことになり〕不幸ではないのか。[1]
アルキビアデス　大いにそうです。
ソクラテス　では、そういう行為の相手にされる人たちはどうかね。
アルキビアデス　その人たちも不幸です。
ソクラテス　してみると、ひとが健全な思慮をもち、すぐれた善い人であるのでなければ、幸福であることはできないわけだ。
アルキビアデス　ええ、そうです。
B
ソクラテス　したがって、世の悪しき人びとは不幸なのだ。

アルキビアデス 大いにそうです。

三〇

ソクラテス したがって、ひとは富んだからといって、不幸をまぬかれるものではないのだ、思慮の健全さを保つのでなければ。

アルキビアデス それは明らかです。

ソクラテス してみると、城壁も三段櫓の船も造船所も、国家は必要としないのである、アルキビアデスよ、幸福であるためにはね。数量も容積も、徳(善さ)がなければ、何にもならないのだ。

アルキビアデス ええ、そうですとも。

ソクラテス だから、もしきみが国家のことを正しく美しく行なおうとするのなら、きみは国民に徳を分け与えなければならない。

C

アルキビアデス それに違いありません。

ソクラテス しかし自分がもっていないものを、ひとに分け与えることができるだろうか。

アルキビアデス またどうしてそんなことができましょう。

---

1 116B注1(四三ページ)参照。さきの場合はギリシア語で「いい行ない」と「うまくやる」が「しあわせ」の意味になったが、ここでは逆に、「悪いやり方をする」「悪く行なう」は、「まずくやる」「まずいことになる」「悪く行く」などの意味から、「不幸」を意味することになる。

ソクラテス　したがって、きみはまず自分で徳を身につけなければならないのだ。そしてこれはきみだけに限られることではなく、いやしくも個人として、自分自身と自分のものを支配し、これの面倒をみるにとどまらず、また国家と国家のことがらとについても、支配し面倒をみることをしようとする者は、そうしなければならないのだ。(1)

アルキビアデス　ほんとうに、あなたの言われるとおりです。

ソクラテス　してみると、きみがきみ自身のためにも、また国家のためにも用意しなければならないのは、何でも自分のしたいと思うことをする自由とか、支配的地位とかいうものではなくて、ただ正義と節制(思慮の健全さ)なのだ。

アルキビアデス　ええ、それは明らかです。

D

ソクラテス　なぜなら、正義と節制をもって行為すれば、きみもきみの国家も、神々から愛される行為をすることになるからだ。

アルキビアデス　それはとうぜん予期されることです。

ソクラテス　またそのうえ、さきほど(2)われわれが言っていたことであるが、きみたちは神的なもの、光明にかがやくものを見ながら、それらの行為をすることになるだろう。

アルキビアデス　ええ、それは明らかです。

ソクラテス　ところでしかし、きみたちはそこへ眼をやっていることによって、きみたち自身と、きみたちのもっている善いものを、しかと見て、知ることになるだろう。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　すると、きみたちの行ないは正当（正式）で、よくなされたということになるのではないか。

アルキビアデス　はい。

E

ソクラテス　さて、ところで、きみたちがこのように行為するとすれば、必ずや幸福はきみたちのものとなるだろうということを、ぼくは保証したいと思うのだ。

アルキビアデス　きっとそうなるでしょう、あなたの保証に間違いはないのですから。

ソクラテス　うん、ところが、不正な行為をする場合は、神なき闇黒に眼を向けているのであるから、とうぜん予期されるように、それに似た行為をすることになるだろう、自分自身を知らないで。

アルキビアデス　とうぜんそうなるかもしれません。

ソクラテス　なぜなら、もしひとが、愛するアルキビアデスよ、自分のしたいと思うことをする自由はあっても、知性をもたないとすれば、とうぜん予期される結果は、個人にとっても、あるいはまた国家のためにも、何だろうか。たとえば病気にかかっている場合に、何でも自分のしたいと思うことをする自由はあっても、医者の知性がなく、独裁者のようにわがままで、誰も何一つとがめだてする者もないほどだとしたら、その結果はどう

135

なるだろうか。とうぜん予期されるところでは、身体が台なしになってしまうというのが、その結果ではないだ

1　いわゆる治国平天下のもとは一身に徳をつむことにあるとするわけ。

2　133C.

ろうか。

アルキビアデス　ほんとうに、あなたの言われるとおりです。

ソクラテス　では、船に乗る場合はどうかね。もしひとが何でも自分の思うとおりにする自由はあっても、船を操縦するための知性も徳も欠けているとしたら、きみはよくわかるかね、その男のためにも、またいっしょに船に乗りくんでいる人たちのためにも、どういう結果になるだろうかということを。

アルキビアデス　ええ、わかります。全員が命を落すでしょう。

B

ソクラテス　それなら、国家の場合においても、またいっさいの支配的な地位や権能の場合にしても、徳がなおざりにされているならば、悪いやり方がついて来ることになるのではないか。

アルキビアデス　ええ、それは必然にそうなります。

三一

ソクラテス　してみると、きみたちの幸福のためには、このうえなくすぐれたアルキビアデスよ、自分のためにも、国家のためにも、用意しなければならないのは、独裁者的な地位ではなくて、徳なのだ。

アルキビアデス　ほんとうに、あなたの言われるとおりです。

ソクラテス　うん、そして徳を身につけないうちは、自分よりすぐれた者に支配されるほうが、支配するよりもよいのである。これは子供だけの話ではなく、大人でもそうなのだ。

アルキビアデス　明らかにそうです。

ソクラテス　ところで、その「よりよい」ということは、またより美しいということではないのか。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　そしてその「より美しい」ということは、よりふさわしいということであろう。

アルキビアデス　それに違いありません。

c

ソクラテス　してみると、劣悪なものにとっては、隷属することがふさわしいのである。なぜなら、そのほうがよい(為になる)からである。

アルキビアデス　そうです。

ソクラテス　してみると、劣悪さは奴隷となるにふさわしいものなのだ。

アルキビアデス　それは明らかです。

ソクラテス　これに反して、徳(卓越性)は自由人たるにふさわしいものなのだ。

アルキビアデス　はい。

ソクラテス　それなら、友よ、奴隷となるにふさわしいようなものは、避けるようにしなければならないのではないか。

アルキビアデス　ええ、最大限に避けなければなりませんとも、ソクラテス。

ソクラテス　しかしきみの現状は、どういうものなのか、わかっているかね。自由人たるにふさわしいものだろうか、それとも、そうではないだろうか。

アルキビアデス　ええ、それはわかりすぎるくらいよくわかっているつもりですが。

ソクラテス　それなら、きみのその現状から、どうやって脱出したらよいか、きみは知っているのかね。その現状の名をはっきり言うことは、美しい人のことだけに、憚(はばか)られるので言わないことにするけれども。

D

アルキビアデス　知っています。

ソクラテス　というと、どうやるのかね。

アルキビアデス　ソクラテス、あなたがその気になってくだされぱいいのです。

ソクラテス　その言い方はよくないね、アルキビアデス。

アルキビアデス　しかしそれなら、どう言ったらよいのでしょうか。

ソクラテス　それが神の御意ならば、と言うのだよ。

アルキビアデス　ええ、それはそう言いましょう。けれども、またそれに加えて、ぼくの言うことがあるのです。それはどうやらわたしたちの役柄を変えることになるのではないかということですよ、ソクラテス、つまりぼくがあなたの役をし、あなたがぼくの役をすることになるらしいのです。というのは、今日からはぼくがあなたをつけまわし、あなたがぼくにつきまとわれるということにならざるをえないからです。

E

ソクラテス　けだかい人よ、してみると、ぼくの愛はこうのとりのそれ(1)と、ちっとも違わないことになるだろう。それがきみのうちに翼をもった恋愛のこころをはぐくんで、今度は逆にそれから世話を受けるのだとすればね。

アルキビアデス　いや、そのとおりです。そして今日このところから、正義に気をつけることを始めましょう。

ソクラテス　そしてまたきみが有終の美をおさめることを希望したいと思う。しかしきみの生れつきについて

は、何の不信ももたないのだけれども、この国家社会の影響力を目にすると、ぼくもきみも負けはしないかと、ぼくは心配なのだ。

1 古注によると、こうのとりは幼い時に親鳥から受けた配慮を、長じてから年とった親鳥に返すと言われているとのことである。したがってソクラテスの言葉の意味は次のようになるだろう。「ひなを孵(かえ)し世話をした老いたこうのとりが、年とってから今度はそのひなから世話され養われるように、ぼくのきみに対する愛もまた、それがきみのぼくに対する愛を醒し育てたのだから、後には逆に君の愛によって世話されるだろう」。なおこの逆転については『饗宴』222B参照。

アルキビアデス II

——祈願について——

川田殖訳

登場人物

ソクラテス

アルキビアデス

ソクラテス　おや、アルキビアデス、これはそもそも祈願のための神参りというわけかね。

アルキビアデス　ええ、まさにそのとおりなのです。ソクラテス。

ソクラテス　ともかく、なにごとか思案ありげに、ふさぎこんだ面持ちをして、うつむいている様子だからねえ。

一

アルキビアデス　して、なんの思案ごとだということになるでしょうか(1)、ソクラテス。

B

ソクラテス　いちばんたいせつな思案ごとをだ、とぼくは思うね、アルキビアデス。それはそうと、ひとつゼウスの名にかけて、答えてもらいたいのだが、神々はわれわれが公私いずれにおいても祈り求めるそのものを、時によって、そのあるものはかなえるが、他のものはかなえなかったり、またある人びとには与えるが、他の人びとには与えないといったことがある、ときみは思わないかね。

アルキビアデス　ええ、まったくそのとおりです。

ソクラテス　だから大いに用心が必要だ、ときみには思われないかね。ひとが(2)悪の大いなるものを善いものだと思いこんで祈願しながらそれと知らずにいるのに対してたまたま神々の方も、人がうっかり祈願するものを何でも自分の方からかなえてくれるような状態になっているようなことがあってはこまるからだ。たとえば、早いはなしが、オイディプスは自分の息子たちが父の遺産を力に訴えて分け合うように祈ったと言われている。(3)かれ

C

は自分の身にふりかかった現在の災いをまぬがれるよう祈願することができたのに、現にふりかかっている災厄の上にさらにほかの災いをも呼びまねくことになった。そしてまさにこのゆえに彼の祈った事柄が成就したばかりでなく、このほか数々の怖ろしいことがここから起ったのだが、これを何もいちいちあげなければならんということはないだろうね。

アルキビアデス　しかしソクラテス、あなたが引き合いに出されたのは気のちがっている人ですけれども、健全な人なら誰があえてそのようなことを祈願するだろうと、あなたは思いますか。

二

ソクラテス[4]　その気がちがっているということは、思慮をはたらかせていること(正気)のそもそも正反対のものであるときみに思われるかね。

1　原文におけるこの文章の主語「τις ひと」は、自分のことをぼかして言っているものととる。

2　ベッカーの読み λήσει τις をとる。

3　テバイの王オイディプスが、知らずに父を殺し母をめとったというかどでみずからの目を突いた消息は、ソポクレス『オイディプス王』に明らかであるが、エウリピデス『フェニキアの女たち』の冒頭(一—六八行)では、——オイディプスの母にして妻であったイオカステの口を通して——この運命的なできごとが要約されたのちに、息子のエテオクレスとポリュネイケスは、この運命が忘れ去られるようにと、父親を門で閉じこめたが、オイディプスはこの運命に気が狂い、息子たちには「鋭い剣にかけてこの王家を分け合うがよい」(六八行)との呪いをかけたことが語られている。なおアイスキュロス『テバイ攻めの七将』七二〇行以下参照。

4　クセノポン『ソクラテスの思い出』第三巻(九の六)参照。

D

アルキビアデス　ええ、まったくそのとおりと思います。

ソクラテス　ところできみは、思慮のない人もあれば、また思慮のある人もある、と思うかね。

アルキビアデス　ええ、もちろんあると思いますね。

ソクラテス　よろしい、それでは、これらの人びとがいったいどのような人びとであるかを考えてみることにしよう。というのは、思慮のない人もあれば、思慮のある人もあり、また別に、気のちがった人もある、ということは同意されているからだ。

アルキビアデス　ええ、同意されましたからね。

ソクラテス　それからまた、ね？　健康な人もあるし……

アルキビアデス　ええ、あります。

ソクラテス　また別に、病気の人もあるのではないかね。

アルキビアデス　ええ、まったくそうです。

ソクラテス　これらの人びとは同じではないね。

アルキビアデス　ええ、同じではありません。

ソクラテス　それではまた別に、これら両者のどちらでもない状態の人が誰かいるかね。

アルキビアデス　いいえ、決して。

ソクラテス　なぜならひとはかならず病気か病気でないかのどちらかだからだね。

アルキビアデス　たしかにそう思います。

ソクラテス ではどうだね。思慮と無思慮についても、きみは同じように考えるだろうか。

アルキビアデス とおっしゃいますと、どういうことでしょう。

ソクラテス ひとはかならず思慮ある者か無思慮な者かのどちらかでしかありえないときみには思われるだろうか、それともこの両者の中間に、人間を思慮ある者にも無思慮な者にもしないところの、第三の状態とでもいうべきものがあると思われるかね。(1) B

アルキビアデス いいえ、決して。

ソクラテス してみると、ひとはかならずこれら二つのうちのどちらかの状態にあることになる。

アルキビアデス わたしにはそう思われます。

ソクラテス それならきみは、気がちがっているというのは、思慮がはたらいているのと反対であると同意したことを覚えているかね。

アルキビアデス 覚えてますとも。

ソクラテス それからまた、人間を思慮ある者でもなければ無思慮な者でもないようにする何か第三の中間状態ともいうようなものは一つもない、ということも?

アルキビアデス ええ、それがわたしの同意したことなのですから。

---

1 バーネットの読み方が比較的写本に近く、「思慮ある者か無思慮な者であるかが可能」と訳すことができるが、文意なお不明確なので、アストに従って ἀναγκαῖον を補ってよむことにした。

C

ソクラテス　さらにまた、ひとつの事柄に対してどうして二つの反対のものがありうるだろうか。[1]

アルキビアデス　いや、そういうことは決してありえません。

ソクラテス　してみるとどうやら、無思慮と気がちがっていることとは同じものであるらしいね。

アルキビアデス　ええ、それは明らかです。

三

ソクラテス　したがって、われわれは、アルキビアデスよ、すべて思慮のない人たちというのは気がちがっているのだと主張したら、それで正しい主張をしたことになるだろう。早いはなしが、きみと同じ年ごろの人たちで、——事実そういう人たちがいるのだが——無思慮な人たちの場合を例にとってみても、いや、もっと年上の人たちの場合を例にとってみてもね。なぜかというと、ひとつゼウスの神かけて答えてもらいたいのだが、この国に住んでいる人たちのうちで、思慮ある人びとは少数であって、大多数の人びとはまず思慮を欠く——したがってきみの呼び方では気ちがいどもということになる——とは思わないかね。

アルキビアデス　ええ、そう思います。

D

ソクラテス　そうだとすると、われわれはこんなに多くの気のちがった人たちと国家社会を共にしていて愉快にしていられるときみは思うかね。いや、たたかれたり、ものをぶつけられたり、その他狂人たちがよくやらかすたぐいのことをされて、もう早くからその報いを受けないでいられたと思うかね。さあ、よく見てごらん、仕合せさんよ、事情はいま言ってきたようなこととはちがっているのではないか。

アルキビアデス　それならいったいどうなのでしょうか、ソクラテス。というのも、どうやらわたしの考えていたような事情とはちがうらしいですからね。

ソクラテス　いや、ぼくだってそう思うよ。だが、よく見てみなければならないね、大体こんなふうに。

アルキビアデス　いったいどんなふうにとおっしゃるのですか。

ソクラテス　うん、それはぼくがきみに話すことにしよう。われわれは病気の人びとがいるとにかく考える、ね。

アルキビアデス　ええ、考えますとも。

E

ソクラテス　それではきみは、病人というのは、かならず、痛風か、熱病か、眼病かのどれかをわずらっていなくてはならぬと思うかね。それともこれらのうちのどれにもかかっておらず、ほかの病気をわずらっていることだってありうるとは思わないだろうか。なにしろ病気はじつにたくさんあって、これらだけではないからね。

アルキビアデス　はい、そうだと思います。

ソクラテス　では眼病はすべて病気であるときみは思うかね。

アルキビアデス　はい。

ソクラテス　そうするとまた、病気はすべて眼病である、ということになるだろうか。

アルキビアデス　いや、けっしてそんなことはないと思います。とはいえ、どう説明したらよいか困るのです

1　このような命題の形については『プロタゴラス』332C参照。

けれど。

140 **ソクラテス**　しかしとにかく、もしきみがぼくに忠実についてきてくれるなら、「そして二人でいっしょに考えるなら[1]」、ひょっとして発見ができるかも知れないね。

アルキビアデス　いや、忠実について行きますよ、ソクラテス、わたしの力の及ぶかぎり。

ソクラテス　ところで、われわれのあいだでは、眼病はすべて病気であるが、だからといって、病気がすべて眼病であるわけではないということが、同意されたのではないかね。

アルキビアデス　ええ、同意されました。

ソクラテス　そしてまたその同意は正しかったとぼくは思う。なぜなら、事実熱病にかかっている人びとはすべて病人であるが、だからといって、病人がすべて熱病にかかっているわけでもなく、また痛風にかかっているわけでも、眼病をわずらっているわけでもない、と思うからだ。しかしこのようなものはすべて病気であるけれども、――われわれが医者と呼ぶ人びとの言葉をかりれば――病気の症状[2]においていろいろとちがっているのだからね。なぜなら、あらゆる病気が、同じようなものでもまた同じように進むのでもなくて、その特性[3]によって

B いろいろだからだ。とはいえこれらはすべて病気である。われわれは職人たちもちょうどこれと同じだと考えるのではないかね。

アルキビアデス　ええ、まったくそうです。

ソクラテス　すると、靴屋も、大工も、彫像家も、そのほか――いちいち数えあげるまでもないだろう――まったく多くの職人たちもそうではないのかね。とにかく彼らは職人の仕事の部分部分を分けもっていて、そして

C そのすべてが職人であるからだ。もっとも彼らは全部が全部(総体としては)職人であるけれども、その全部が大工であるわけでもなければ、全部が靴屋でもなく、また全部が彫像家でもない。

アルキビアデス ええ、けっして全部がそういうことはありません。

ソクラテス それならば、また人びとは無思慮をも同様の仕方で分けもっているのだ。そしてその最も大きな部分を分けもっている人びとをわれわれは気がちがっていると呼ぶし、それよりもいくらかわずかの部分を分けもっている人びとを馬鹿とか阿呆とか呼んでいるわけだ。もっともそれをできるだけ慎しみのある名で呼びたいと思う人びとは、意気さかんな[4]人と呼ぶ人びともあれば、お人好しと呼ぶ人びともあり、また、無邪気とか世間

D 知らずとか愚直とか呼ぶ人びともあり、なおさがせばこのほかたくさんの名前が見つかるだろうがね。しかしこれらはすべてが無思慮なのであって、これらが相違する仕方は、ひとつの技術が他の技術と相違し、ひとつの病気が他の病気と相違するとはっきりわれわれに見られたのと同じような仕方においてなのだ。それともきみにはどう思われるかね。

アルキビアデス ええ、わたしにはそのように思われます。

---

1 ホメロス『イリアス』第一〇巻二二四行。

2 原語の ἀπεργασία には(1)生み出された結果 effet(スイエ)の意味と、(2)処方・治療 treatment(リデル、スコット)の意味が考えられるが、ここでは(1)に従った。

3 原語は δύναμις、これを「病勢」ととる向きもある。

4 原語は μεγαλόψυχος(高邁の心・気宇壮大の人)。ここでは悪い意味。

四

ソクラテス　それではもとの問題にもどって、そこからもう一度やることにしよう。というのは、たしか話の始めのところ(1)でも、無思慮な人びと、思慮ある人びとがいったいどのような人びとであるかを考えてみなくてはならぬということだった。このような人びとがあるということは同意されたのだから。そうだったね。

アルキビアデス　ええ、同意されました。

E **ソクラテス**　それならきみは、なすべきこと語るべきことを知っている人びとなら、これを思慮ある人びとと考えるかね(2)。

アルキビアデス　ええ、たしかにそう考えます。

ソクラテス　では、どちらを無思慮な人びとと考えるかね。そもそもこれらのことのどちらをも知っていない人びとをではないかね。

アルキビアデス　ええ、そうした人びとをです。

ソクラテス　それでは、これらのことのどちらをも知っていない人びとというのは、語ったりなしたりしてはならないことを、自分ではそうと知らずにすることになるのではないか。

アルキビアデス　明らかにそうです。

141 **ソクラテス**　いいかね。アルキビアデス、ぼくの言おうとしたのは、オイディプスもまた、まさにこのたぐいの人びとの一人だ、ということだったのだ。だがなおきみはいまの人びとの中にもオイディプスのように、怒り

にかられてではないが、悪しきものをそうと思わず良いものだと思いこんで、自分たちのためにそれを祈願している多くの人びとを発見するだろう。オイディプスは良いことを祈願しなかったし、また祈願していると考えもしなかったが、これとはまったく反対の状態にある人びとがほかにいる。というのはぼくはまずきみが次のような場合にその一人になると思うのだ。つまりいまもし、きみがちょうどおまいりに行こうとしているその神がきみの前に顕現して、きみがまだ何も祈願しないうちに、きみに向って「お前はアテナイの僭主になれれば満足するか」とたずねたとする、またきみがそれを大したことでない(つまらないことだ)と考えている場合には、「ギリシア全土の支配権をも」これにつけ加えるとする、それでもきみがヨーロッパ全土の王になるのでなければまだ足りないと考えているのを見る場合には、それをもまた許し、これを許すだけでなく、きみが望むなら即日にでも、クレイニアスの子アルキビアデスが王であることを万人が認めるようにはからうとする、こんなことがもし起ったらきみ自身は最大の財産を手に入れたと考え、嬉しくて有頂天になって引き上げて行くだろう、と思うのだが。

B

アルキビアデス　思うに、ソクラテス、もしそんなことが起ろうものなら、ほかの誰だって有頂天になるでしょうよ。

C

ソクラテス　いや、しかしだね。自分の生命とひきかえにしてというのであれば、それまでしても、全ギリシア人、全外国人の領土と王座がわがものになるようにときみは望みはしないだろう。

1　138D 参照。

2　『プロタゴラス』332A〜C 参照。

アルキビアデス　それはそうでしょうね。それらをつかう何の目あてもないのに、そんなものを望むはずがありませんからね。

ソクラテス　では万一それをへたに、また身に災いをまねく仕方でつかうおそれのある場合にはどうだね。この場合にもまた同じではないかね。

アルキビアデス　ええ、けっして望むはずがありません。

五

ソクラテス　すると、もし万一ひとがそのために害を受けることになるとか、あるいはまったく生命を奪われることになりそうだとしたら、その場合には、授けられるものをむぞうさに受けとることも、また自分がそうなるように自分の方から祈願することも安全ではない、ということになるね。すでにこれまでにも、それがなにか得になることをしているのだと思って、僭主の地位を望み、さらにそれを手に入れるために一生けんめいになったが、僭主の地位をめぐる陰謀の犠牲となって、生命をとられた人びとを、ぼくは、なおたくさんあげることができるのだ。だが、きみも、つい「きのうかおととい」(1)に起ったできごと——つまりマケドニアの僭主アルケラオス(2)を、その小姓が殺したというできごと——について聞いていないはずはないと思うのだよ。その小姓は、アルケラオスが小姓に愛着していたのにおとらず、僭主の地位に愛着していたので、僭主の地位に就いてしあわせな人間になろうと思い、恋してくれる人を殺したわけだ。だがこの男も、ほんの三、四日のあいだ僭主の地位を手に入れていただけで、またほかの者の陰謀の犠牲になって最後をとげた。またこれはきみもすでに知っている

142 ことだが――なぜならこのことは、ほかの人たちから聞いたのではなくて、自分たちが現にそこにいて知っていることなのだからね――つまり、すでにわれわれの市民の中にも将軍職を望んでそれを手に入れたが、そののち、あるいはいまだにこの国からの追放者となっており、あるいは生命を落してしまった人びとがいるということ、あるいはまた彼らのうちでいちばんうまくやってきたと思われている人びとでさえ、多くの危険と恐怖とをくぐり抜けて来たのであって、しかもそれは軍隊を指揮しているときばかりのことではなくて、自分のところに帰ってからも、敵軍の手にかかるのにもおとらず中傷者たちの手にかかって、いつまでも包囲攻撃をうけつづけたので、かれらのうちのいく人かは、将軍の地位にあるよりはむしろ将軍などになっていなかったほうがよかったと、願うようになる。(3)

B こういうわけで、もしこれらの危険や苦労が得になるのだったならば、これもそれなりに説明がつくことにな

1 『イリアス』第二巻三〇三行のいいまわし。

2 在位、前四一三―三九九年。前王ペルディッカス二世とその兄(アルケタス)の女奴隷シミケとの間の庶子。『ゴルギアス』471A sqq. には、彼がいかにして王位を奪ったかが語られている。治世中軍隊を整備し道路や要塞を築き(トゥキュディデス『歴史』第二巻(一〇〇))、エウリピデスやアガトンなど多くのギリシアの芸術家を招いた。その死についてはアリストテレス『政治学』第五巻($1311^{b}8$-18)によれば、クラタイアスという男が王によって体に辱しめをうけたためにこれを根にもち、王女を彼に与えるという約束を王が破ったということを口実に王を攻撃した、とあり、またディオドロス『歴史』第一四巻(三七の六)によれば、狩をしていた際、クラテロスという寵臣の手によって偶然殺された、という。ただし本篇では、前四〇四年に殺されたアルキビアデスと、前三九九年に毒杯を仰いだソクラテスとが彼のうわさをすることになっていて、まったくのアナクロニズムであることに気づかせられる。

3 このような将軍たちの消息については、また『国家』Ⅷ. 553B にもその言及がある。

るだろう。だが事実はこれと逆なのだ。子供のための祈願もまたこれと同じことで、ひとが、子供を与えられるようにとすでに祈願しておきながら、さて実際にそれが生まれてみると、何とも大きな不幸や苦難をわが身に背負いこむことになるということが、きみにわかるだろう。ある人びとはその子供たちが徹頭徹尾悪いために、苦 C しみながら全生涯を送り、またある人びとは、子供は良い子だったのだが、災難のためにそれを亡くすることになり、この人びともまたさきの人びとにおとらぬ不運な身の上となって、子持ちであったよりはいっそ子を持たぬ身の方がよかったと思うだろうからだ。(1) だがこうしたことや、このほかにもこれに似たことがたくさんあって、明々白々であるにもかかわらず、それでもなお、与えられようとしているものを避けようとする人びとや、祈願によってあることが叶えられそうになってくると、その祈願をやめようとする人びとにはごくまれにしかお目に D かかれないのだ。かえって多くの人びとは、支配者の地位とか将軍の地位とか、その他それが現実になれば得になるよりも、むしろ損害をもたらすような多くのものを、それが与えられることになれば、避けようとはせずに、自分にそれがない場合には、それが与えられるように祈願しさえする。(2) だがしばらくすると、彼らはえてして最初に祈願した事柄をすべて願い下げにして、取り消しの唱えごとなどをする。それでぼくは、本当に、人間が、自分たちの不幸は神々から来るなどと言って、おろかにも神々を責めはしないかと疑うのだ。「彼らはおのれの E 不遜さゆえに――というか、無思慮のゆえにというか――定めをこえた苦労をなめている」(3) のにね。というのは、アルキビアデスよ、とにかくかの詩人はなにか思慮をそなえた人であったように思われるからだ。つまりその人は、ぼくの思うところでは、何人かの無分別な友人たちと交わりを結んでいたが、この人たちが、自分たちはいいと思ったけれども本来はあまりよいものでもないことを、実行しまた祈願しているのを目にすると、彼ら全員

143 のための共同の祈願をつくったと思われるのだ。それはなにか次のようなものだった。

王なるゼウスよ、祈るとも祈らずとても、善きものは与え給えや、

禍いは、たとえ祈るも、避けさせ給え。(4)

こういうわけで、この詩人の歌い方は立派でもあり、また安全でもあると思われるのだ。だがもし、これに対して、きみに何か言い分があるなら、黙っていないことだ。

六

アルキビアデス　いや、ソクラテス、そう上手に言われてしまうと、反論するのは容易ではありません。しかしとにかく、このことは合点がいきます。つまりどうやらわれわれ自身が、無知のせいで、知らずに最悪のこと B をなしたり、あげくのはてには、それがわれわれに与えられるようにと祈願したりしているところを見れば、無知というものが人間にとってどんなに多くの悪しきことの原因(5)になっていることか、ということです。たしかに

1　文芸作品にもよくあるテーマ、エウリピデス『メディア』一〇九四―一一一五行等参照。

2　『パイドロス』243A～Bなど参照。

3　ホメロス『オデュッセイア』第一巻三二行。ホメロスの原文にある「不遜さ ἀτασθαλία」のほかに「無思慮 ἀφροσύνη」を加えて本篇のコンテクストに合わせた(シュタルバウム)。なお『国家』X.617E、『パイドン』90D参照。

4　作者不明の詩、なお、ディオドロス『歴史』第一〇巻(九の八)によれば、ピュタゴラスは、祈願に際して、たとえば能力・富・美しさといった、ある特定の善きものを神に求めず、一般的に「善きもの」を願い求めたといわれる。ソクラテスの同様の祈願についてはクセノポン『ソクラテスの思い出』第一巻(三の二)参照。

5　『アルキビアデス I』118Aにも同様の表現がある。

このことこそ誰ひとりとして考えようとはしないことであり、自分にとって最善のものを祈願するくらいのことは十分自分でできるのであって、最悪のものを祈願するなんてことはない、とだれでも考えたがるのですね。こんなことは、実際のところ、祈願というよりはむしろ何か呪詛に似ているといっていいのにね。

C **ソクラテス** だがおそらく、この上もなくよき人よ、たまたまぼくよりも、またきみよりも賢い人がいて、その人は主張するかも知れないね、われわれが無知というものをそんなに無造作に非難して語るのは正しくない——すくなくともあることについての無知は、それがかの人びとにとって悪であるように、ある人にとっては、またある状況においては、善である、というふうにつけ加えない限りは——とね。

アルキビアデス それはどういうお話なのでしょうか。なにごとにもせよ、またいかなる状況においてであれ、ひとが知っているよりは無知である方がよいというような事柄が、いったい何かあるのですか。(1)

ソクラテス うん、ぼくはあると思うのだが、きみはそう思わないかね。

アルキビアデス ええ、ゼウスに誓って、そうは思いません。

ソクラテス いや、それだけではない、ぼくはまたきみが自分の母親に対して、かのオレステス(2)やアルクメオン(3)がやったといわれること、また誰であれ同様のことを仕出かした他の者たちのしたようなことを、やりとげたいと思っているとは認めないだろう。

D **アルキビアデス** しっ！ どうかゼウスに誓って、言葉を慎しんでください、ソクラテス。

ソクラテス いや、アルキビアデスよ、言葉を慎しめときみが命令しなければならないのは、きみがそんなことをやってのけようとは思っていないと言う人にではなくて、もしこれと反対のことを言う人があれば、その人

にこそなのだよ。そんな無造作な言葉づかいをするだけでもいけないというほど、この事柄はたいへん怖ろしいものにきみには思われるのだからね。だがきみはこのオレステスが、もし思慮ある者であって、何をするのが自分にとって最も善いことであるかを心得ていたとしたら、あえてこうしたことをなにかやってのけようとしたと思うかね。

アルキビアデス いいえ、けっして。

E

ソクラテス またほかのだれひとりとして、そのようなことをやろうとはしない、とぼくは思う。

アルキビアデス ええ、むろんそのとおりです。

ソクラテス してみると、どうやら、最も善きことに対する無知、つまり最善についての知が欠けていること、

---

1 以下第七章末までの議論は『アルキビアデスI』117B～118Cの議論と対照してみること。

2 ミュケナイの王アガメムノンと妻クリュタイムネストラの息子、イピゲネイアとエレクトラの兄弟。父を殺した母とその情夫アイギストスに対する復讐の話は、ホメロス以来彼に関する伝説の中心をなし、ステシコロスの失われた作『オレステス』、アイスキュロスの『オレステイア三部作』、ソポクレス、エウリピデスの『エレクトラ』、エウリピデスの『タウリケのイピゲネイア』『オレステス』などに、種々の形でとりあげられている。

3 アルゴスの英雄アンピアラオスと妻エリピュレの子。父アンピアラオスは、テバイを攻めようとしたポリュネイケスが参加助勢を求めた際、出征する者のうち総帥アドラストス以外には生還の見込みのないことを知っていたために、これを拒否するが、ポリュネイケスはエリピュレを頸飾りで籠絡し、アンピアラオスをしぶしぶ承知させる。アンピアラオスは自分を戦争に参加させることに加担した妻を呪い、子アルクメオンに、「自分の死後母を殺して仇を討ち、再度テバイを攻め」るよう命ずる。アルクメオンはこの言いつけを守って母を殺し、復讐の女神に追跡されて諸国をさまよい、アケロオス河神のもとではじめて潔めをうける。

(143)

が、悪だということになるらしい。

アルキビアデス　はい、そのとおりだと思います。

ソクラテス　それは、かの人にとってそうであるばかりでなく、他のあらゆる人びとにとってもまたそうなのではないか。

アルキビアデス　そうです。

七

ソクラテス　では、さらにこういうことも考えてみようではないか。もしかりにきみがたとえば、きみの後見人(1)でもあり同時に友でもあるペリクレスのところへ短刀を手にして(2)その戸口まで行き、ほかならぬその人を殺そうという心組みで、彼が家にいるかどうかを尋ねようと——それをむしろ良いことのように思って——思い立ったとする。そして家のものが(3)「在宅です」と告げたとする。——いや、ぼくはきみが何かこのたぐいのことをしたいと思っているなどと言っているのではないのだよ。そうではなくて最も善きことについて無知である者の心にいつかひとつの考えが浮んで、最も悪しきことさえも最も善いといつかは思いこんでしまうことだってむろん十分ありうるのだが——そうきみに思われるだろうとぼくは考えるが、もしそうならば……それともそうは思わないかね。

144

アルキビアデス　ええ、まったくそう思います。

ソクラテス　そこでもし内へ通ってペリクレスその人を見ても、きみが彼に面識がなく、そのためにその人を

B 誰かほかの人だと思ったとする。それでもなおきみはあえてその人を殺そうとするだろうか。

アルキビアデス めっそうもない。決してそんなことはしないと思います。

ソクラテス きみが殺そうと目論んでいたのは、決してただ行きずりの人をではなくて、まさにペリクレスその人をであるからだね。

アルキビアデス はい。

ソクラテス するともしきみがたびたびやってみても、事をなそうとするたびごとにいつもペリクレスを見わけることができないとしたなら、決して彼におそいかかることはできない、ということになるのではないか。

アルキビアデス ええ、決して。

ソクラテス では、どうかね。あのオレステスも同じように母を見わけることができなかったとしたならば、いったい母におそいかかることがありえたと、きみは思うかね。

C **アルキビアデス** いいえ、そうは思いません。

ソクラテス 彼が殺そうと目論んでいるのは、けっして、最初に出あう女なら誰でもというのでも、誰かほかの人の母でもというのでもなくて、ほかならぬ自分の母を自分でということだったからだね。

アルキビアデス そうです、そのとおりです。

---

1 アルキビアデスの父クレイニアスは、前四四七年、コロネイアで戦死したため、当時四歳であったアルキビアデスは、兄弟とともに、近親であったペリクレスの手に托された。『アルキビアデス I』104B参照。

2 『ゴルギアス』469Dにもこのような場面がある。

3 原文では「相手の人は」。前後関係からこう訳した。

ソクラテス　してみると、すくなくともこのような事柄については無知であるほうが、このような気分になっていて、このような考えをもっている人びとにとっては、よりよいことだということになる。[1]

アルキビアデス　ええ、そうらしいですね。

ソクラテス　したがって、あることについての無知は、ある人びとにとっては、またある状況においては善いものであって、たったいままできみに思われていたように悪いものではないということがわかるではないか。

アルキビアデス　ええ、そういうことになるかもしれません。

八

D **ソクラテス**　ではさらに、もしきみが、これにつづくものを探る気があるなら、それはじつに意外なものであるようにきみには思われるかもしれないよ。

アルキビアデス　それはまた、なんですか、ソクラテス。

ソクラテス　それは言ってみれば、ほかのどんな知識をもっていたとしても、最も善きものについての知識が欠けていたのでは、[2]おそらくこれらの知識をもっている人を益することはめったになくて、むしろ害するほうが多いだろう、ということなのだ。また、こういうふうに考えてみたまえ。そもそもわれわれが何かを行なったり語ったりしようとする場合、まさにいま語ったり行なったりしようとしている当のことを、まずわれわれは知っ

E ていると思っているか、もしくは本当に知っているかでなくてはならぬ[3]——このことは必然だときみは思わないかね。

アルキビアデス　ええ、わたしはそう思います。

ソクラテス　そこで演説家を例にとってみると、彼らは勧告することを知っているか、ないしは知っていると思って、ある者は戦争や平和について、ある者は城壁の建設や港の設営について、そのつど、われわれに勧告している[1]ね。そして、一言でいえば、およそ国家が他国に対して、あるいは自国の問題として、行なっている事柄は何であれすべて、これら演説家の勧告がもとになってなされているのだね。

145

アルキビアデス　ほんとうに、あなたの言われるとおりです。

ソクラテス　さあそれでは、これにつづくことも考えてみたまえ。

アルキビアデス　ええ、私のできることなら。

ソクラテス　ほかでもないがきみはむろん、人びとを思慮ある人びとと言ったり、無思慮な人びとと言ったりするだろうね。

アルキビアデス　はい、そうです。

ソクラテス　しかも、多くの人びとを無思慮だと言い、少数の人びとを思慮があると言うのではないかね。

アルキビアデス　ええ、そのとおりです。

ソクラテス　そのときみは、ある何ものかに着目して、それとの関係で両者をそう名づけるのではないか。

1　143C参照。

2　『カルミデス』174B～D、ことに『国家』VI. 505A～B参照。　3　『アルキビアデス I』117D参照。

B

アルキビアデス　はい。

ソクラテス　それなら、こういう人——勧告することは知っていても、どちらのほうが善いか、いつのほうが善いかということをぬきにしているような人——を、きみははたして思慮ある人と呼ぶだろうか。

アルキビアデス　いいえ、決して。

ソクラテス　またおもうに、戦争をすることそれ自体だけを知っていても、いつのほうが善いか、どれだけの間のほうが善いかということをぬきにしているような人は、思慮ある人ではあるまい。ね、そうだろう。

アルキビアデス　はい。

ソクラテス　それなら、また、誰かを殺したり、ひとの財産を奪いとったり、ひとを祖国から追放したりすることを知っていても、いつのほうが善いか、誰のほうが善いかということをぬきにしているのでは、その人は思慮ある人ではないのではないか。

アルキビアデス　ええ、たしかにそのとおりです。

C

ソクラテス　してみると、思慮ある人とは、このような事柄のどれかを知っているだけでなく、さらに最も善いことについての知識——しかもこの知識とためになることについての知識とはむろん同じものだ(1)——がその人にそなわっている場合だということになる。ね、そうだろう。

アルキビアデス　はい。

ソクラテス　そしてこうした人をこそわれわれは、思慮ある人であり、国家にとっても、その人自身にとっても、十全な勧告者であるということができるのだ(2)。これに反してこのような条件を欠いている人は、これとは反

対の者であるというのだ。それとも、どう思われるかね。

アルキビアデス ええ、私にはそのとおりに思われます。

九

ソクラテス ではある人が馬術とか、弓術とかを知っている場合、あるいはまた拳闘とか角力とか、あるいはD その他競技にかかわりのある何かとか、その他われわれが技術によって知るようなもののうちの何かを知っている場合は、どうだね。その特定の技術にしたがって生み出されるもののよりよい方(よしあし)[3]を知っている人を、きみは何と呼ぶかね。たとえば馬術にしたがって生み出されるもののよりよい方を知っている人を、馬術の心得ある人[4]と呼ばないかね。

アルキビアデス ええ、そう呼びます。

ソクラテス また、おもうに、拳闘の術にしたがっての場合なら、ひとはこれを拳闘の心得ある人と呼び、笛吹きの術にしたがっての場合なら、これを笛吹きの心得ある人と呼ぶ。きっと他のこともこれらに応じた言い方で呼ばれると思う。それともなにか別の仕方で呼ばれるかね。

1 また「有用性」。『国家』V. 457D に中性(τὸ ὠφέλιμον)ででてくるこの語は「有益な」の意で、同書 X. 607D、『ゴルギアス』470A などで重要な意味をもって用いられている。

2 『アルキビアデス I』106C, 113B, 132B 参照。

3 これと同様の表現が『アルキビアデス I』108B にある。

4 『プロタゴラス』350A〜C には「馬術の心得のない人」と対照されて、知恵＝勇気の議論が展開されている。

アルキビアデス　いいえ、その通りの仕方で呼ばれます。

ソクラテス　それではこのような技術についてなにかを知っている人ならば、とうぜんまた思慮ある人でもあるのでなければならないときみには思われるかね。それともなかなかもって思慮ある者などではありえない、と

E

われわれは言うべきだろうか。

アルキビアデス　いや、とんでもない、ゼウスにかけて、なかなかもって思慮ある者などではありえません。

ソクラテス　それならいまここにひとつの国家があって、そこには立派な射手や立派な笛吹きがおり、さらに運動選手たちやその他の技術の心得ある者たちがおり、またわれわれがたったいま語ったこれらの人びとの中に、ただ戦争することだけを知っているとか、人をただ殺すことそれだけを知っている者たちが混りこんでおり、その上また国家についての大ぼらを吹く演説家たちもいるとする、しかしこうした者たちが全部いるのだけれども、最も善きものに対する知識がなく、これらの人びとそれぞれを働かせて行くのには、いかなる時が善いか、何を目的とするほうが善いかを知っている人がいないとしたら、[1]そういう人たちだけで作られる国家の体制は、どの

146

ような国家体制だときみは思うかね。

アルキビアデス　なんともつまらぬ国家体制だと思います、ソクラテス。

ソクラテス　おそらくきみはそう言うだろうね。そこに住む一人びとりがわれこそはという名誉心をもち、国政の最大の部分は

おのれが得意中の得意とするところにこそ[2]

あるべきものとしているのを見る場合にはね。ここでぼくが「得意中の得意」というのは、ぼくの意味では「そ

の技術にしたがって生み出される最も善きもの(3)」のことを指すのだがね。しかしこの人は国家にとっても、またみずからにとっても、最も善きものについてたいていは誤りを犯してしまっているし、それは、ぼくの思うところでは、知性をはたらかせずに、思わくを信じこんでいるからなのだよ。事情がこのようであってみれば、われわれがこのような国家体制を多くの混乱と不法(無秩序)に満ちみちた国家体制であると主張してもそれは正しい主張であるといってよいのではなかろうか。

B

アルキビアデス ええ、ゼウスに誓って、たしかに正しい主張です。

ソクラテス ところで、われわれがいままさに行なったり語ったりしようとする場合、その当のことを、まずわれわれは知っていると思っていなければならない、あるいはこれを本当に知っているのでなくてはならぬ――

1 善の知識なしにはまことの知はありえぬということの考えはまた、プラトンの対話篇の随所に示されているソクラテスの考えでもあった。たとえば『カルミデス』174C～D、『パイドン』97D、『ゴルギアス』465Aなど参照。なおこの善の知が有益の知と重なることについては本篇145Cのほか、『ヒッピアス(大)』296E、『メノン』87E、とりわけ『国家』II. 379Bなど参照。

2 『ゴルギアス』484Eにも引かれている、エウリピデスの失われた作品『アンティオペ』よりの引用。アンティオペはボイオティア王ニュクテウスの娘であったが、ゼウスによって身重にされた時、父を恐れて、シュキオンのエポペウスの所へ逃げる。父は怒りと絶望に自刃するが、死のまぎわに弟リュコスに命じて、娘とエポペウスとを罰せよという。弟はシュキオンを陥し、エポペウスを殺し、アンティオペを捕えて帰る。しかしその途中、彼女は双児の兄弟ゼトスとアンピオンを生む。彼らはその生地キタイロンに捨てられたが、土地の牛飼いに育てられた。アンティオペは二〇年間を獄中で過したが、のち逃亡し、山中で息子たちに会う。息子たちはリュコスに代ってテバイの支配者となる――というのがこの作品の筋であったと推測される。この句はこのうち、活動家たるゼトスと、音楽を愛し瞑想的なアンピオンとが、それぞれの生き方を誇り、活動的人間と芸術家の価値を論じている場面の句であろうとされる。

3 145D参照。

このことは必然だ、とわれわれに思われた(1)のではなかったかね。

アルキビアデス ええ、そう思われました。

ソクラテス そしてまたひとが知っていること、もしくは知っていると思っていることを行なう場合、もし「ためになる仕方で」ということがそれに伴なうならば(2)、われわれにはその人が、国家のためにもその人自身の

C ためにも、利益となる仕方において行なっていることがわかるだろうと思ったのではないかね。

アルキビアデス それに違いありません。

ソクラテス だがおもうにこれと反対のことをすれば、その人は、国家にとってもその人自身にとっても、そうではなくなるね。

アルキビアデス ええ、なくなりますとも。

ソクラテス ではどうかね。きみはいまでもなお前と同じように考えているか、それとも何か別なように考えるかね。

アルキビアデス いいえ、同じように考えています。

ソクラテス ところできみは、多くの人びとを無思慮だといい、少数の人びとを思慮がある人というように呼ぶことを主張した(3)のではないかね。

アルキビアデス ええ、そう主張しました。

ソクラテス したがって、多くの人びとは、ぼくの思うところでは、すくなくともたいていの場合、知性をつかわないで思わくを信じこんでいるゆえに、最も善きものについてひどい誤りを犯している(4)——とわれわれは再

度主張することになるね。

D

アルキビアデス はい、そういう主張になります。

ソクラテス してみると、多くの人びとにとっては――自分たちが知っていたり、知っていると思っていたりすることを、何がなんでも行なおうと熱心になるけれども、やったあげくは、まずたいていがためになるよりは害を受けるというのでは――知っておらずまた知っているとも思わないほうが彼らのためによい、ということになる。(5)

アルキビアデス あなたの言われることはまったく本当です。

一〇

E

ソクラテス だからきみの見るところ、ひとはほかのどんな知識をもっていても、最も善きものについての知識をもっていない場合には、これらの知識をもっていることが、その人を益するということはおそらくめったにないのであって、むしろ害する方が多いのではないかとぼくが主張した時、(6)事実、明らかにぼくの主張は正しかったのではないかね。

アルキビアデス あの時にはそう思わなかったとしても、いまはそう思います、ソクラテス。

1 144D 参照。
2 145C および注1参照。
3 145A 参照。
4 146A 参照。
5 『アルキビアデス I』117E 参照。
6 144D 参照。

147 **ソクラテス**　してみるとひとつの国家にしても、一個の生命にしても、正しく生きて行こうとするならば、ちょうど病人が医者をたよりにし、安全に航海しようとする者が舵とりをたよりにする、そのように、この知識をたよりにしていなくてはならない、ということになる。なぜならこの知識をぬきにしては、財産を得ることにかけての、または身体が強くなることにかけての、その他何であれそのようなことにかけての「順風にのる好運(1)のかがやかしさ」が増せば増すほど、それだけいっそうこれらから生ずる誤ちもまた必ず大きくならねばならぬように思われるからだ。また世のいわゆる博識や多芸を身につけている人(2)もこの(善の)知識が欠けていては、他のあれこれの知識に引きまわされて、おもうに舵とりのないままに大海の上にいつまでもうろうろしているから、

B 生涯の道程をいくらも行かないうちに、しごくとうぜんにも烈しい冬の嵐にぶっつかることになるのではあるまいか(3)。だからこの場合にもまた、「多くのことを知ってはいたが、そのすべては悪しき仕方で知っていたのだ(4)」と、かの詩人が誰かについて非難の意味で言ったことがあてはまるように思われるのだ。

アルキビアデス　して、いったいどうして、この詩人の言葉がぴったりなのですか。ソクラテス。私にはあの人の言ったことはちっとも論点にふれていないように思われるのですが。

ソクラテス　ところがそれがおおいに論点にふれているのだ。ただそれを、この上もなくよき人よ、この詩人も、他のほとんど全部の詩人もそうだが、謎めかして語っているのだ(5)。なぜならおよそ詩の技というものは全体

C として本来が謎めいたものなのであって、そんじょそこらの誰にでもはっきりわかるというようなものではないのだからね。しかも詩が本来そのようなものであるうえに、ものおしみして自分の知恵をわれわれに示そうとせず、できるだけ隠しておこうとするたちの人を詩がとらえる場合にはかならず、その詩人ひとりびとりがいった

い何を考えているのか、それをはっきり知ろうとすることはかくべつに困難なように思われるのだ。というのもきみはむろん、最もけだかく、最も賢い詩人であるホメロスが「悪しき仕方で知っていた」ということはありえないというのを知らなかったとは考えないだろうからね。なぜならマルギテスは多くのことを知ってはいたが、

D 「そのすべてを悪しき仕方で知っていたのだ」と言ったのは彼だからだ。しかしおもうに、彼は、「悪いこと」のかわりに「悪しき仕方で」、「知ること」のかわりに「知っていた」と、言葉づかいを若干変えて、謎めいた仕方で語っているのである。そこでこれをつづり合わせると、韻律は失われるが、彼のいわんとしていることはのこる。つまり「彼は多くのことを知ってはいたが、しかしそれらすべてを知ることが彼のためには悪いことだっ

1　写本では τὸ τῆς ψυχῆς とあるが、シュタルバウム以来の(バーネット、ラム、スイエ等の)よみ方に従って、ψυχῆς を τύχης とよむ。

2　ヘラクレイトスに「博識はさとりを教えない」との有名な言葉がある(Fr. 40(DK))。なお『法律』Ⅶ. 819A、『恋がたき』139A参照。

3　ここの原文は乱れているが一応バーネット(=ラム、スイエ)のよみ方に従った。中ほどのところをシュライエルマッハーは「むろん長い時間ではないが一生涯のあいだ走りつづけるから」とよみ、アーペルトは χρόνον οὐ μακάριον βίον θεῶν とよみ、「舵とりのないままに、時という大海の中で、神々のもつしあわせな生涯とはちがう一生を過し、しごくとうぜんにも……」と訳す。

4　この句は——本篇のほか、アリストテレス『ニコマコス倫理学』第六巻(1141^a15)その他に一部のこるのみで他は失われたところの——古来ホメロスに帰せられる——滑稽叙事詩『マルギテス』中のものとされる。この詩の主人公たる同名の英雄マルギテス(原義、狂気の人)は、奇想天外な考えをもち、有用なことはなにひとつ実行することのできない人間の典型として描かれている。なおこの叙事詩がのちの喜劇に対してもった関係のアリストテレスによる評価については『詩学』(1448^b34–1449^a3)参照。

5　プラトンが詩人その他の作家の言葉を引用し、これを解釈・検討して事柄の意味をさぐって行く例としては、他に『カルミデス』162A、『リュシス』214D、『国家』I. 332Bなど。

(147)

た」⑴というのである。そうすると明らかに「多くのことを知ることが彼のためには悪いことであったとすれば、彼はじつにつまらぬ人間であった」ということになる。いやしくも、もしさきに主張された議論を信ずべきだとするならばね。

E

アルキビアデス いや、ソクラテス、それは信ずべきだと思います。実際その議論を信ずることができなければ、ほかのどんな議論だって容易に信ずることはできないでしょう。

ソクラテス それでまたそうきみが考えるのが正しいのだ。

アルキビアデス もう一度あらためてわたしはそう思うのですが⑵……。

一一

148

ソクラテス いや、まあとにかく、さあ、ゼウスにかけて、——というのはむろんわれわれの困惑がどれほど大きなものであり、またどんな性質のものであるか、むろんきみにはわかっていると思うからだが、まさにこの困惑をきみもぼくとすっかり共有しているように思われるのだ。とにかくあれこれと考えをかえて、ちっとも落ちつくことがなく、あることを固く信じこんでいるかと思うと、こんどはまたそれをすっかりぬぎすててしまって、もうそのようには思われないというのだからね。——だからもしきみの前に、いままたも、きみがちょうどお参りしようとしていた神が顕現して、きみが何か願いごとをする前に、最初にも語られた事柄⑶のうちどれかが実現するとしたらきみは満足するかどうか、それとも祈願はきみ自身にまかせてもらうほうがよいか、と問うようなことが、かりにあるとしたら、きみは神からいただくもののうちから何をとるならば、あるいは何が叶えら

れることを自分で祈願すれば、この好機をとらえたことになるだろうと思うかね。

アルキビアデス いや、神々に誓って、ソクラテス、私にはそう無造作な答えはできませんね。むしろそんなことをするのはなにかマルギテス流の気ちがいじみた(マルゴン)ことであって[4]、それこそほんとうに大の用心が必要だと思います。そうでないと知らずに善いものだと思いこんで悪しきものを祈願しているようなことになるおそれもあり、またその後で、ちょうどまたあなたの言われた通りに[5]、何であれ最初に祈願した事柄をしばらくするとすべて願い下げて、取り消しの唱えごとをするようなことになってては困りますからね。

B

ソクラテス それなら、ぼくがこの議論の最初にそのことばを引き合いに出した詩人は、われわれよりももっと多くの知をもっている、ということになるのではないか。彼は「禍いは、たとえ祈るも、避けさせ給え[6]」と願うように命じたのだからね。

アルキビアデス はい、そう思います。

---

1 このように語句をちょっとひねって、別の意味のものにしてしまう例はたとえば、『プロタゴラス』342A〜347A(ソクラテスの即興的シモニデス解釈)など。

2 このアルキビアデスのうけ答えが、シュタルバウムも認めるように、話者のどちらに属するものかあいまいであるために、ミュラー、シュタインハルト訳では、アストの原文処理同様、これを削除して、つぎのソクラテスの言葉につづくようにしている。しかしもし πάλιν αὖ が、「こんどは逆に」「また逆に」の意にとることができるならば、文意は反対になり、あとのソクラテスの言葉をひき出すきっかけをつくることになるとも見られるだろう。

3 141A〜B参照。

4 原語 μάργον、147B注4のマルギテスと類似の音ゆえ、これにかけたものともいわれる。ドブリーは μέγα ἔργον(たいへんな仕事、途方もないこと)とよみ、スイエもこれにならっている。

5 142D参照。

6 143A参照。

(148)
C

ソクラテス　かくていま、アルキビアデスよ、ラケダイモン人たちもまた、この詩人を熱心に見習ったためか、あるいは自分たちでもまたそのような観察をしたためか、公私いずれにおいても、いつもこれによく似た祈願をささげているのだ、神々が彼ら自身にも善きものの上に美しきものを与えたまえ、と願ってね。だがこれ以上のことを彼らが祈願するところを誰ひとりとして聞くことはできないだろう。(1) まさにこのゆえに、いまにいたるまでの間、彼らは誰にもおとらずしあわせな人間であるのだ。だがもしひょっとして彼らに万事よしとはいかないようなことが起ったとしても、しかしとにかく、それは彼らの祈願のせいではない。人がたまたま祈願しているものを与えるのも、これとは反対のものを与えるのも、神々の手によると思われるのだ。

D

二

また、べつにいまひとつの話をきみに話してあげようかね。それはむかしぼくがある年上の(2)人たちから聞いた話なのだが、それはこうだ——かつてアテナイ人たちとスパルタ人たちとの間に紛争が起ったが、その時われわれの国の方は海陸のどちらにおいても、戦闘が起るたびごとに、いつでも運が悪くて、決して勝つことができなかった。そこでアテナイ人たちはそのことを嘆き、かつ当惑して、なんらかの方法によって現にふりかかっているわざわいを払いのける道を見つけなければならなくなり、彼らの間で相談した結果、かの神アンモンのところ(3)に使をさしむけて、この神にうかがいを立てるのがいちばんよいということになった。(4) そしてこれに加えてつぎのこと、すなわちいったい何のむくいで神々は自分たちアテナイ人よりも、スパルタ人たちに勝利を与えられるのか〔をうかがうのがよい(5)〕ということになった。彼らの言い分としては「自分たちはギリシア人の中でいちばん

E

149

多くの、しかもいちばん美しい犠牲獣をささげ、他のいかなる人びともしないほど立派に自分たちの神殿を奉納物でかざり、年々歳々いちばん豪華ないちばんおごそかな祭列を神々にささげ、他のギリシア人たちが束になってもかなわぬほどの金銭を納めている。しかるにスパルタ人たちは――というのが彼らの言い分だが――いまだかつてそのようなことを何ひとつ心にかけず、神々のことなどほとんど念頭にないといった状態であるために、財産はわれわれの国よりもちっとも少くないにもかかわらず[6]、いつでも不完全なものを犠牲としてささげ、その他多くの点においても、われわれがするよりもはるかにおとった仕方でしか神々に敬意を払っていないのに」と

1　同様のことがプルタルコスによっても報じられている――「かれらの祈願は善きものの上に美しきものを与えたまえ、ということであって、これ以上のものを祈願したのではない」(「スパルタ人たちの習慣について」(二七)『倫理論集』239A)。

2　この「年上の」という語をバーネットは削除。ちなみに以下の話の出所は不明(シュタルバウム)。

3　エジプトのみならず、キュレナイやギリシアの諸地方で崇拝されたエティオピアの神。神託・予言で有名。ことにギリシアではゼウスと同視され、その神殿がテバイとスパルタにもあった。しかしここで言われているのは、おそらく、アフリカ北部のリビア砂漠にあった神殿をさしているのであろう。この神託所の建設についてはヘロドトス『歴史』第二巻(四二)参照。なお『ポリティコス(政治家)』の登場人物の一人、キュレナイのテオドロスは「われらの神アンモン」と言っている(257B)。アリストテレス『アテナイ人の国制』(六一の七)によれば、前四世紀の終りごろ、このリビアの神がアテナイでも尊崇されたことがわかる。

4　直訳「彼ら(アテナイ人)にとってこの神にうかがいを立てるのがいちばんよいと思われた」

5　前文「うかがいを立てる」から「うかがう」を補う。スイエは εἰπεῖν を補っているが、文意はこのままでも明瞭である。

6　スパルタ人の富については『アルキビアデス I』122D～123B参照。なお、アリストテレスによれば、スパルタ人たちは、歳入についての処理が不完全なために、国家は福祉を享受しえず、町は貧しくなり、人びとは貪欲になった、といわれる(『政治学』第二巻($1271^{b}10$sqq.)、さらに第六巻全体を参照)。

いうわけだ。彼らはこれだけのことを言ったあとで現にふりかかっているわざわいから自分たちがまぬかれる方
B 法を見つけ出すにはどうしたらよいかをたずねたところが、神のお告げを伝える者はほかには何ひとつ答えずに、――明らかに神はそれを許さなかったからだが――ただ自分から親しくかれを呼んで次のように言ったという。「アンモンの神はアテナイ人のためにこうおおせられる、『わが欲するところは、ギリシア人のささげもののすべてにまさって、むしろスパルタ人のつつしみある言葉なり(1)』と」というのである。つまり、お告げを伝える者の語ったのはこれだけで、それ以上はひとことも語らなかった、という。

そこでぼくはこの「つつしみある言葉」という語で神が言わんとしているのは、ほかならぬ、彼らの祈願のこ
C とではないかと思うのだ。なにしろ彼らの祈願はほかの人びとの祈願とは実際大いにちがっているからね。なぜならほかのギリシア人たちは、そのある者は角に金箔をかぶせた牛をかたわらに立たせ、また他の者は神々に贈り物をささげて、善悪の頓着なしに、出まかせのことを祈願する。だから神々は彼らが神々を冒瀆するようなことばを漏らしているのを聞いて、金をかけたそれらの祭列や犠牲を受け入れないのだ。とにかくぼくの思うところでは、いったい何を言うべきであり、何を言うべきでないかということについては、大いに用心が必要であり、よく思案しなければならないのだ。

一三

きみはまたホメロスにも、ほかの、これと似た話が語られているのをみつけることができるだろう。すなわち
D ホメロスの語るところによれば、トロイア人たちが野営するにあたって、

不死なる神々へ、こよなき贄(にえ)をささげ、
また風がその脂を焼く甘き香りを平野から空の中へと運んで行ったが、
幸(さき)わい給う神々はそをうけ入れずそれのみかうけ入れる意もあらざりし、
E
きよきイリオス、プリアモス、またこの王のとねりこの
槍にすぐれし兵らをも、いたく悪(にく)みていたまいしゆえ。(2)

ということになった。

こうして彼らは神々に悪(にく)まれていたために、犠牲をささげることも、贈り物を献納することも空しく、なんら彼らの役には立たなかったのだ。なぜなら、おもうに、腹黒い高利貸よろしく、贈り物によって心を動かされるというようなことは、(3)神々のなさることではないからで、むしろこうした点でスパルタ人たちを凌いでいると思っているなら、われわれもまたお人好しの言葉を語っていることになる。というのも、もし神々がわれわれのさ
150
さげる贈り物や、犠牲には目をとめるが、ひとがまさに敬虔であるか、正しくあるかといった、魂のほうには目もくれないというのであれば、それはなんともたいへんなことになるかも知れないからねえ。いやおもうにむし

1 原語 εὐφημία。のちの「神々を冒瀆するようなことば βλασφημία」に対照されるもの。
2 『イリアス』第八巻五四八、五五〇—五五二行。引用された四行はテクストには欠けた写本が多い。
3 贈り物によって神々の心を動かしうるというような考え方は、たとえば、『国家』II. 365E sqq. および『法律』X. 888C に紹介されている。これに対するプラトンの反論批評は、『国家』III. 390E sqq. および『法律』X. 905E sqq. 参照。

ろ神々はこの魂のほうにこそはるかに目をむけ給うのだ。あるいは神々に対し、あるいは人びとに対して、大いなる過ちを犯しておきながら、平然として個人も国家も年々歳々それをささげることができるような、そのような、金にあかした祭列や犠牲に目をむけ給うよりはね。そして神々は、この神や、神々のお告げをつたえる者たちが主張しているように、収賄者ではないから、そのようなものは、ものの数には入れないのだ。とにかく事実はおそらく、神々にとっても、知性をもっている人びとにとっても、正義と思慮こそがとりわけ尊重されるのだからね。してまた、思慮があって正しい人とは、神々に対しても人びとに対しても、行なうべきこと語るべきことを知っている人びとにほかならないのだ。(1) だがきみがいまいわれたことについていったいどんなことを考えているか、ひとつ教えてもらいたいとも思うのだがね。

B

アルキビアデス いや、私にしても、ソクラテス、あなたや神々にとってよいと思われる以外の考え方が、よいとは思われません。私が神に対する反対投票者になるのは穏当なこととは思われませんからね。

ソクラテス ところで、きみは、自分が知らずに悪しきものを善いものだと思いこんで祈願することがないかと大いに困惑している、(2) と言ったことを覚えていないかね。

C

アルキビアデス ええ、覚えてますとも。

ソクラテス すると、きみが祈願のために神まいりをしようとしていることは、危険のないことではないということがわかるではないか。きみが冒瀆のことばを漏らしているのを神が聞かれて、きみのささげる犠牲をいっさいうけつけないようなことになっていてはこまるし、またひょっとしてそのほかにも何かきみがわが身の上にまねいてしまっていることがあってはいけないからね。だからぼくには、きみはじっとしずかにしているのがい

D ちばんよいように思われるのだ。なぜなら、ぼくには、きみが意気大いにあがっているときに[3]――このことばは無思慮を意味する名前の中でいちばんきれいなことばだが――スパルタ人の祈願をささげるような気持になるとは思わないからね。だからひとは神々に対し、また人びとに対して、いかにあるべきかを学び知るまでは、じっと待っていなければならないのだ。

一四

アルキビアデス ではいったい、その時はいつやって来るのでしょうか、ソクラテス。またそれを教えてくれることになる人は誰なのですか。というのは、誰がその人であるかを知ることができたら、それ以上嬉しいことはないと思うからですが。

ソクラテス きみのことを心にかけてくれる人がそれなのだよ。だがぼくの思うところでは、ちょうど女神アテナがディオメデスのために、

相手が神か、はた人か、さだかに見分かちえんために

E その目から霞(かすみ)を拭い去った、とホメロスがのべているように[4]、きみもまたその魂から、いまちょうどかかっている霞を拭い去ってもらわなければならないのだ。そのときになればもうきみは、悪も善もともに見わけるための

1 『ゴルギアス』507 A sqq. の議論の要約ともいうべきもの。
2 148 A～B 参照。
3 140 C およびその箇所の注参照。
4 『イリアス』第五巻一二七行。

手だての適用ができるのだ。というのは、いまのところ、きみにそれができるとは思われないからだ。

アルキビアデス　お気に召すままに、それを霞と呼ぼうとも、ほかの何と呼ぼうとも、とにかくそれを拭い去り給え。それがどなたであろうとも、いやしくも私がもっと善くなるようにしてもらえるのなら、その方にいいつけられることのうち、なにひとつとして避けはせぬ心の備えができていますから。

151

ソクラテス　だがたしかにかの人も、きみに対してそれこそ驚くほどの熱意をもっているのだよ。

アルキビアデス　では、その時まで犠牲のほうもくりのべるのがいちばんよいと思います。

ソクラテス　そう思って間違いない。なにしろそれほどの危険をおかすよりその方が安全だからね。

アルキビアデス　しかしどうでしょう、ソクラテス。さあ、それではおもうにあなたは私の善い相談相手になってくれましたから、私はこの花の冠をあなたにかぶってもらうことにしましょう。そして神々には、のちほど、

B

かの日がやって来たことがわかった時に、その時に花の冠やその他、ふつうささげられるあらゆるものをささげることにしましょう。そしてその時はまもなくやってくることでしょう。もし神々の思し召しがそうなればね。

ソクラテス　ではこの贈り物もいただくとしよう。そしてそのほかぼくとしてはきみから貰うものならばどんなものでも頂戴しよう。そういう自分を見るのは愉快だからね。ちょうどかのクレオンもまた、黄金の冠をつけているテイレシアスを見て、〔その冠が〕彼自身の腕で敵から分捕った最初の獲物であることを聞いたとき、

あなたの勝利の冠は、わしにとっては吉兆だ。

あなたも承知のように、われわれは大波にもまれているのだから。(1)

C

という台詞をエウリピデスによって、言わされているように、ぼくもまた、きみのほうから受けるこの栄誉を吉

兆と解することにしよう。

ぼくの思うところでは、ぼくはクレオンにおとらぬ大波の中にもまれているが、きみに思いをかけている数多い者たちの中で、あっぱれ勝利を得たいものだと思っているのでね。

1 エウリピデス『フェニキアの女たち』八五八―八五九行。盲目の予言者テイレシアスは、うちつづく戦に協力した功績によって、アテナイ人から冠をさずけられた。またテバイの王子エテオクレスは、王座を兄弟ポリュネイケスと争うため、叔父クレオンに留守を托して国を出て行く――このような背景の中で語られたクレオンの言葉。

ヒッパルコス

──利得愛求者──

河井　真　訳

登場人物

ソクラテス

友　　人

一

ソクラテス　そうすると、[1]いったい利得の愛求（欲深いこと）とはどういうことなのか、また利得愛求者（欲深者）とはどういう人びとなのだろうか。

友人　わたしには、無価値なものごとから利得を得ることを期待する人びとのことである、と思われます。

ソクラテス　ではいったい、その当のものが価値の無いものごとだということを、かれらが知っていてのことであると、きみは思うのかね。それとも知らないでいてのことと思うかね。というのも、知らないでいてというのであれば、利得を愛求する人びとは無知な人びとであると、きみは言っていることになるからだ。

友人　いや、無知な人びとであると言っているのではありません。そうではなくて、わたしが言いたいのは、かれらが何でもやりかねないような、よこしまな、利得に目がくらみやすい人びとである、ということなのです。

B かれらは、自分たちがそこから敢えて利得を得ようとする当のものが、価値の無いものであると知っていて、なお恥知らずにも敢えて利得を追い求めるのです。

ソクラテス　するといったい、きみが言うところの利得の愛求者とは、こんなひとのことなのだろうか。たとえばもし農夫が、ある植物は価値が無いと知っていて、それを植え、それが成長したら、そこから利得が得られると期待するとしよう。きみが言わんとするのは、こういうひとのことなのかね。

友人　いやじっさい、利得を愛求するひとはね、ソクラテスさん、どんなものからでも利得を得ねばならぬと

思っているんですよ。(2)

ソクラテス　そんなに投げやりに、誰かに何か不当な仕打ちを受けたみたいないい方をしないで、ちょうどわたしが、もう一度はじめから尋ねたとして、よく注意して答えてくれ。利得の愛求者とは、かれがそこから利得を得ることを期待する当のものの価値について、心得ているひとのことである、ということにきみは同意しないのだろうか。

C

友人　同意します。

ソクラテス　では、植物の価値について、それがいかなる時期と場所に植えられるのがふさわしいかということを、心得ているのは誰だろうか。訴訟にかけては腕利きの人びとが、かざってつかう美しいことば、かの賢者たちのことばづかいを、われわれも少し取り入れてみようというわけだがね。(3)

友人　それは農夫だと思います。

D

ソクラテス　ところで、利得を得ることを期待する、というのと、利得を得なければならぬと思う、というのとは、別のこととしてきみは言っているのだろうか。

1　句読点については、デニストン(Denniston)の提案にしたがう。いずれにしても、対話のいとぐちとしては、いささか唐突である。

2　「価値がある」ということばと、「期待する(価値があると考える)」ということばとは、原語が同族語であるため、一方が否定でいわれ、他方が肯定でいわれると、いっそう皮肉な問いかけとなる。そこで、いささか棄て鉢な答え方になっている。

3　「いかなる時期(ὥρα)と場所(χώρα)に」という箇所で、同じ母音を重ねて用いる、ソフィストの修辞法を真似たことをさしている。似た例は『ゴルギアス』467Bにもある。

友人　同じこととして、わたしは言っているのです。

ソクラテス　だから、きみはそんなに若いのに、もう年老いたぼくを、今のようにきみ自身が思ってもいないことを答えて、あざむこうなどとはしないでほしいのだ。そうではなくて、ほんとうのことをいってくれたまえ。そもそも、農夫たるもので、しかも価値の無い植物を自分が栽培していることを知っていて、なお、それから利得が得られると思うものがあると、きみは思うのか。

友人　ゼウスに誓って、思いません。

ソクラテス　それではどうかね。騎士たるものが、自分が馬に価値の無い餌を与えていることを知っていて、しかも自分がその馬を駄目にしていることを知らないでいる、とでもきみは思うのかね。

B

友人　いいえ、わたしはそうは思いません。

ソクラテス　してみると、かれが無価値な餌から利得が得られるとは思っていない、ということは確かなのだ。

友人　そうです、思っていません。

ソクラテス　ではどうかね。船長(ふなおさ)たるものが、無価値な帆や舵を、その船に備えておきながら、自分がその報いを受けて、自身も、船も、また積荷のすべてをも、失なう危険があることを知らずにいる、などときみは思うのかね。

友人　いいえ、わたしはそうは思いません。

C

ソクラテス　してみると、かれが無価値な備えから利得が得られるとは思っていないということは、確かである。

友人　はい、そうなのですから。

ソクラテス　では、将軍たるものが、自分の軍隊が価値の無い武器をたずさえていると知っていて、それらの武器から利得が得られると思ったり、ないしは得ようと期待したりするだろうか。

友人　決してしません。

ソクラテス　では、笛吹きが価値の無い笛を持っているとか、あるいは琴弾きが価値の無い琴を持っているとか、あるいは射手が価値の無い弓を持っているとか、総じてどんな職人であれ、また、ものごとに精通した人びとの誰であれ、無価値な道具やその他の備えを持っていて、それらのものから利得を得ようと思うだろうか。

D

友人　いいえ、そうは思わないようです。

二

ソクラテス　それではいったい、利得愛求者とはどういう人びとであると、きみは言おうとするのか。というのも、われわれがこまかに検討してきた人びとのことではなさそうだけれども、しかし、価値の無いものと知っていて、それらのものから利得を得なければならぬと思っている人びとである、ということになるからだ。だがそうとすれば、おどろくべきことには、きみ、きみの言うとおりなら、人びとの中で利得愛求者たるひとは誰もいないことになるのだ。

友人　いや、ソクラテスさん、わたしが利得愛求者と言いたいのは、いつもがつがつしていて、まったくちっぽけな、ほとんどというよりはまったく価値の無いものごとに、度を越して執着して利得を愛求している、そう

E

いうひとたちのことなのです。

ソクラテス　まったくいいひとだね、きみは。だがきっと、そのひとたちはそれが価値の無いことを知っていてそうするのではない。というのも、そんなことはあり得ないと、すでにわれわれが自身を論破してしまったのだから。

友人　どうもそのようです。

ソクラテス　それで、もしそのひとたちが知っていてのことではないとすれば、無知であってのことであるのは明白で、かれらは価値の無いものを、たいそう価値があると思っているのだ。

友人　それは明かです。

ソクラテス　さて、利得愛求者が利得を愛し求めることは、いうまでもないね。

友人　はい。

ソクラテス　ところで、きみは利得は損害の反対であると言うのかしら。

友人　申しますとも。

ソクラテス　さて、損害をこうむることがそのひとにとって善いことであるようなひとが、いるのかしら。

友人　誰にとっても善いことではありません。

ソクラテス　むしろ、悪いことだね。

友人　はい。

ソクラテス　してみると、ひとは損害によってそこなわれるわけだ。

B

友人　そこなわれます。
ソクラテス　してみると、損害は悪いことである。
友人　はい。
ソクラテス　ところで、利得は損害の反対である。
友人　反対です。
ソクラテス　それゆえ、利得は善きものである。
友人　はい。
ソクラテス　そこで、善きものを愛求するひとを、きみは利得愛求者と称することになる。
友人　そのようです。
ソクラテス　そうすると、ねえ、友よ、きみが利得愛求者と言っている人びとは、決して気ちがいじみたひとではない、ということになる。だが、きみ自身はいったい、善きものであるようなものごとを、愛求するのか、しないのか。
友人　いたします。
ソクラテス　で、きみが愛求しないような善きものが何かあるのか。むしろきみは、悪しきものを愛求するのだろうか。
友人　ゼウスに誓って、わたしはそんなことは致しません。
ソクラテス　そうではなくて、すべての善きものを、きみはひとしく愛求している。

友人　はい。

ソクラテス　さあ、こんどはきみの方がぼくに、ぼくも同様にそうしないかと尋ねてくれ。というのは、ぼくも善きものを愛求すると、きみに同意するだろうから。それどころか、ぼくやきみだけではなく、他のすべての人びとが、善きものを愛求し悪しきものを憎むと、きみには思われないだろうか。
C

友人　そのように思われます。

ソクラテス　ところで、利得は善きものであると、われわれは同意したのだったね。

友人　はい。

ソクラテス　こんどはまた、このやり方では、すべてのひとが利得の愛求者としてあらわれる。ところで、さきほどわれわれが言っていたやり方では、利得の愛求者であるものは誰もいない、ということであった。さて、いったいどちらの議論によるならば、ひとは誤りをおかさないですむだろうか。

友人　ソクラテスさん。もし、利得愛求者というものを、ひとがただしく把握するならば、とわたしは思いますよ。で、ただしくというのは、利得愛求者とは、よきひとならばそこから利得を得ようとは敢えてせぬものごと、そういうものごとに精を出し、そこから利得を得ようと期待するひとである、というふうに考えることです。
D

ソクラテス　そうれごらん、甘いね(1)、きみは。われわれはさきほど、利得を得るとは益があるということである、と同意したんだよ(2)。

三

友人　それがどうしたというんですか。

ソクラテス　それに加えて、すべてのひとは、つねに善きものを欲するということも、われわれが同意したからだよ。[3]

友人　はい。

ソクラテス　すると、善きひとといえども、すべての利得を手にすることを欲するのではないか。もしそれが善きものであればね。

E

友人　自分たちが、それでそこなわれることになるような利得は、かれらが欲するところではありませんよ、ソクラテスさん。

ソクラテス　ところで、そこなわれる、というのは、損害をこうむる、という意味で言っているのか、それとも別のことをさして言っているのかしら。

友人　いや、別のことではなくて、損害をこうむる、という意味で言っているのです。

ソクラテス　するといったい、ひとが損害をこうむるのは、利得によってなのか、それとも損害によってなのか。

友人　両方によってです。というのも、ひとは損害によっても、また有害な利得によっても損害をこうむるからです。

1　この呼びかけのことばは、プラトンが同じような意味をこめて、よく用いることばとは異なっている(ヴィラモヴィッツ、メーレンドルフ)。

2　直接にはいわれていないが、227Aの推論から、とうぜん出てくることとして考えられている。

3　227B～Cでいわれている。

らです。

ソクラテス　するといったい、有益で善い何らかのものが有害であると、きみには思われるのだろうか。

友人　思われません。

ソクラテス　そもそも、ついさきほど、利得は損害、つまり悪しきものの、反対であると、われわれは同意したのではなかったか。

友人　それは肯定します。

ソクラテス　で、悪しきものの反対であるものは善きものである、というのはどうだったかね。

友人　それはそのとおりです。われわれは同意したのですから。

四

ソクラテス　だからごらん、きみはぼくをあざむこうとしているんだよ。わざと、われわれがさっき同意したのとは反対のことを言い立ててね。

友人　ゼウスに誓って、そうではありません、ソクラテスさん。そうではなくて、反対にあなたがわたしをあざむいて、わたしにはどちらともわからぬままに、議論の中で上を下へとひっくり返しているのです。

B

ソクラテス　ことばをつつしみたまえ。いいかね、そうとすれば、ぼくは善き、賢きひとに従わないで、じつによからぬふるまいをしていることになるのだよ。

友人　だれに、とおっしゃるのですか。そしていったい、どうしてなのでしょうか。

ソクラテス　ぼくにとっても、きみにとっても同市民の、ピライダイ区(1)のペイシストラトスの息子(2)、ヒッパルコス(3)にだよ。

C　かれはペイシストラトスの子供のうちで、もっとも年長で、もっとも賢明であり、多くのりっぱな仕事にその知恵を示したが、なかんずくホメロスの叙事詩(うた)を此の地にはじめてもたらし、今日なお吟唱詩人(うたびと)たちがそうしているように、パンアテナイの祭り(4)に、かわるがわる後を承けて、それをうたいとおすようにさせた。また、テオスのアナクレオン(5)のもとに五〇櫂船をつかわして、この市につれて来たし、ケオスのシモニデス(6)を、多大の報酬と贈物とで納得させて、いつも身近かに従えていた。かれがこのようなことをしたのは、市民たちを、きわめてすぐれた人びとであるようにして支配せんがため、教育しようと望んでのことであって、かれは器量ある人物だから、なんぴとにも知恵を惜しみなくあたえるべきだと思ったからだ。

1　古注では、アイゲウスの一族といわれる区(デモス)。また、プルタルコスの「ソロン伝」(一〇)によると、アイアスの子、ピライオスにちなんで名づけられた区、と説明されている。

2　前五六〇年から五二七年にかけて、その多くの期間を、僭主としてアテナイを支配した人物。アリストテレスによれば、クロノスの時代の生活ということばは、かれの支配にあてられている。『アテナイ人の国制』(一六)。

3　僭主ペイシストラトスの息子で、その後継者の一人。前五一四年、パンアテナイの祭礼の当日に、ハルモディオスとアリストゲイトンによって、殺害された。↓補注(一七七ページ)。

4　パンアテナイの大祭のこと。大祭は各オリュンピア期(四年)の三年目に、小祭は毎年、女神アテネにささげて行われた。吟唱が行われたのは、大祭においてである。

5　抒情詩人として名高い。イオニア西岸の都市テオスの出身。前五三〇年前後をその活躍の時期とする。

6　高名の詩人。エーゲ海の島ケオスの出身。アリストテレスは、かれがわずかな報酬で詩を作ることを断わった、と伝えている。『弁論術』第三巻(1405b24–25)。

D ところで、市民の中で市街に住むものがかれに教育されて、その知恵に驚嘆するようになったのち、さらにかれは郊外に住むものをも教育することを企てて、市街とそれぞれの部落との中間の道端に、かれらのためにヘルメスの像[1]を立て、かれがひとから学んだり、あるいはまた自分で見出した知恵の中から、もっとも賢明と信ずるものをえらび、自身でそれをエレゲイオン調[2]になおして、自らの創作として、また知恵のしるしとして、その像に刻みつけた。かれがそうしたのは、まず一つには、かれの市民たちが、デルポイの神殿に書かれている「汝自身を知れ」とか、「過度を慎め」とか、その類の他の賢明なことばに驚嘆することなく、むしろヒッパルコスのことばを、より賢明だと信ずるようにするためであり、ついで二つには、市街への上り下りに通りかかる市民た

E ちが、それを読んで、かれの知恵の味わいをつかんで、その他のことについてもさらに教育を受けようと、郊外からたびたびかよってくるようにするためであった。

ところで、像に刻まれていることは二つある。それぞれのヘルメス像の左側には、このヘルメスが市街と部落との中間に立っていることを告げる旨が刻まれ、右側では、

これぞヒッパルコスが記念。正しき思慮もて歩め。

229 と述べている。

ところで、それぞれのヘルメス像に刻まれている彼の創作には、すぐれたものが他にも数多くあるが、ステイリアイ街道[3]沿いのそれもその一つであって、そこではこう言っている。

これぞヒッパルコスが記念。友をあざむくなかれ。

B そこでとにかく、きみがぼくにとって友人であるからには、ぼくはきみをあざむいて、かの賢明なるひとを裏

切るようなことは、敢えてしないだろう。そしてかれが死んでから三年間、その弟ヒッピアスが僭主としてアテナイ人を支配したのだが、古老たちが皆伝えていることを、きみは聞いたと思うが、アテナイで僭主支配があったのはこの年月の間だけであって、その他の時代にはアテナイ人は、あたかもクロノスの支配する時代[4]のように、くらしていたというのだ。

C

ところで、事情に通じた人びとの言うところによれば、かれ(ヒッパルコス)の死は、多くのひとが思っているようなこと、つまり〔ハルモディオスの〕姉(妹)が籠運び[5]の役になるについて侮辱をこうむったから、というようなわけで生じたのではない。——というのも、じっさいこれは単純すぎるからだ——そうではなくて、ハルモディオスはアリストゲイトンが愛していた若者であって、かれによって教育されたのだった。ところが、はてさて、このアリストゲイトンも一人のひとを教え育てたことを誇りとし、ヒッパルコスを競争相手と思っていた。

1 オリュンポスの神。ゼウスと、アトラスの娘マイアとの間に生れたとされる。使者、商業者などの神とされ、その像は、田畑などの境界を示す標として、また道標として、よくつかわれた。スダ(Suda)によれば、ヒッパルコスの立てたヘルメス像は、三方向を向いた三つの頭(顔?)をもっていたという。

2 今日では悲歌と訳されるが、内容は悲しみや嘆きをあらわすとは限らない。早くから箴言、いましめを、この形式であらわすことが行われていた。

3 古注には、パンディオン一族のステイリアイ区(デモス)に通ずる街道、と説明されている。ステイリアはアテナイの市街から東南東の方向、エーゲ海に面している。

4 神話では、クロノスはウラノス(天)とガイア(地)の子であり、ゼウスの父である。ヘシオドスは、クロノスの治世を、いわゆる黄金の時代として、えがいている。

5 パンアテナイの祭礼の行列で、供物や祭具を入れた籠を、頭にのせて運ぶ役にえらばれることは、名誉あることとされ、それにふさわしい乙女がえらばれることになっていた。ハルモディオスの姉(妹)は、それにふさわしくないとして、侮辱されたといわれる。

(229)D　さてそのころ、ハルモディオス自身はたまたま当代の美しく高貴な若者たちのだれかを愛していた。――かれらはその若者の名前を言っているが、ぼくは覚えていない――ところで、この若者は以前はハルモディオスとアリストゲイトンとを賢者として讃嘆していたが、後にヒッパルコスとまじわるにおよんで、かれらを軽蔑するにいたった。そして、このとおりの侮辱に深く傷ついたかれらが、ヒッパルコスを殺害したのだ。

五

友人　そうすると今、ソクラテスさん、あなたはわたしのことを友だちでないと思っているか、それとも友だちと思っているなら、ヒッパルコスの言に従っていないか、おそらくそのどちらかでしょう。というのも、あなたが議論の中で、わたしをあざむいていないとは――とはいえ、どのようにあざむいているかということは、わからないのですが――、わたしには信じられませんから。

E　**ソクラテス**　よろしい、それではちょうど碁でもしているときのように、議論の中でいわれたことのうちから、きみがお望みのもの(石)を取り消してあげよう。きみがあざむかれていると思わないようにね。さあ、それではこれを取り消そうかね。すべてのひとが善きものを欲するのではない、というふうにね。

友人　いいえ、けっして。

ソクラテス　では、損害をこうむること、ないしは損害は悪ではない、ということにしようか？

友人　いいえ、けっして。

ソクラテス　では、利得ないしは利得を得ることは、損害ないしは損害をこうむることの反対ではない、とい

230

うことにしようか。

友人 それもいけません。

ソクラテス では、利得を得ることは、悪の反対、つまり、善、ではない、ということにしようか。

友人 たしかに、すべての〔利得が善なの〕ではありません。その点を取り消して下さい。

ソクラテス おや、それでは利得のうちの、あるものは善であり、あるものは悪であると、きみには思われるようだね。

友人 わたしにはそう思われるのです。

ソクラテス それでは今、きみのためにこれを取り消してあげよう。すなわち、ある利得は善であり、別のある利得は悪である、としよう。ところで、それらのうちの善きものが悪しきものより、より多く利得であるということはないね。それとも、そうではないのか。

友人 いったいどんなことを尋ねておられるのでしょうか。

ソクラテス 説明してあげよう。食物には善いものと悪いものとがあるね。

B

友人 はい。

ソクラテス さていったい、それらの中の一方が他方よりも、より多く食物であるというのか、それとも、同じようにこのものである、つまり両方とも食物であるのであって、この限りにおいては、つまり食物である限りにおいては、一方は他方と何らことなるところはなくて、その中のあるものが善いものであり、あるものが悪いものであるという限りにおいて、一方が他方とことなるのかしら。

友人　はい。

ソクラテス　すると、飲物やその他の、ものごとのうちの、同じものでありながら一方は善きもので他方は悪しきものであるようなもののすべては、同じものであるという限りにおいては、一方は他方と何らことなるところがないのではなかろうか。ちょうど人についてもおそらく、あるものはよい人であり、あるものはわるい人である。

C

友人　はい。

ソクラテス　だが思うに、人であるという限りにおいては、どちらかが他方より、より多く人であるとか、より少く人であるとかいうことは決してない。よい人がわるい人よりも、とか、わるい人がよい人よりも、とかいうことはないのだ。

友人　あなたの言っておられることは、ほんとうです。

ソクラテス　それなら、利得についても、そのように考えようではないか。つまり、有害なのも有益なのも、同じように利得ではある、とね。

友人　必然的にそうなります。

D

ソクラテス　してみると、有益な利得をもっているひとが、有害な利得をもっているひとよりも、より多く利得を得ることにはならない。われわれの同意するところでは、そのどちらかが、より多く利得であるというようなことはない、ということは明かなのだ。

友人　はい。

ソクラテス　というのは、そのどちらにもより多く、とか、より少く、ということが付け加わらないからである。

友人　そうです、たしかに付け加わりません。

ソクラテス　そのものに、より多く、とか、より少く、ということのどちらもが付け加わらないような、こうしたものごとでもって、何にせよ、ひとがより多く、あるいはより少く、するとかされるとかいうことがあり得ようか。

友人　あり得ません。

六

ソクラテス　こうして今や、両方ともが同じように利得であり、利得があるものであるということになったのだから、われわれはつぎのことを考察せねばなるまい。つまり、いったい何故にきみはその両方を利得とよぶのか、それは両方にどんな同一点があると見てのことなのか、ということをだ。ちょうど、今のことについて、いったい何故ぼくは、善い食物も悪い食物も、両方とも食物とよぶのかと、もしきみがぼくに尋ねたら、それは両方とも身体にとっての乾いた(液体ではない)滋養物であるから、それだからとぼくは答えたであろうようにね。というのも、これが食物というものであるということは、きみもたぶん同意してくれるだろうからだ。それとも、そうではないのかしら。

E

友人　わたしは同意します。

(230)
231

ソクラテス　それゆえ、飲物についても答え方は同じになるだろう。すなわち、それが有益なものであれ、有害なものであれ、身体にとって湿った(水状(みず)の)滋養物であるという限りにおいて、飲物というこの名がある、というふうになるし、他のものについても同様だ。さあ、このように答えているぼくを、きみも見習おうとつとめたまえ。有益な利得と有害な利得とを、それらにその点でまさにこれが利得であるというどんな同一点があると見て、両方とも利得であると、きみはいうのか。もしまた、きみ自身答えられないのなら、さあ、ぼくの言わんとすることをよく考察したまえ。いったい、ひとが何ものをも費さずにか、あるいは、より少いものを費して、より多くを手に入れるならば、すべてそうして得るものを、きみは利得であると言うのだろうか。

B

友人　わたしはそれを利得とよぶと思います。

ソクラテス　いったい、このようなばあいのことをも、きみは言っているのだろうか。もし、ひとが御馳走にあずかって、それも何ものをも費さないで、たっぷり振舞いにあずかって、病気を得るとすればどうだろうか。

友人　ゼウスに誓って、わたしはそれを利得とは言いません。

ソクラテス　で、御馳走になって健康を得たとすれば、そのひとは利得を得たのだろうか、損害を得たのだろうか。

友人　利得をです。

ソクラテス　してみると、利得とは、得るものが何であっても得る、というようなことでないことは確かである。

友人　確かにそうではありません。

ソクラテス　いったい、悪しきものを得るならば、利得を得ることにならないのか、それとも、何らかの善きものを得ても、そうならないのか、つまり利得を得ることにならないのか。

友人　善きものを得るならば、利得を得ることになるようです。

C

ソクラテス　もし悪しきものを得るならば、損害を得ることになるのではないかね。

友人　わたしにはそう思われます。

ソクラテス　そうれごらん、またもやもう一度、[1]きみはぐるぐる廻って同じところへ戻っているではないか。つまり、利得は善であり、損害は悪であるようにみえてくるのだ。

友人　何をいえばよいのか、わたしは行き詰まっているのです。

ソクラテス　きみが行き詰まっているのはとうぜんなのだよ。さあもうひとつ、このことにも答えてくれ。もし、ひとがより少いものを費して、より多くのものを得るならば、きみはそれが利得であるというかね。

友人　それが悪しきものである場合は、わたしは決してそう言いません。そうではなくて、たとえば、ひとがより少い金や銀を費して、より多くを手に入れるような場合のことを言っているのです。

D

ソクラテス　そしてぼくもそのことを尋ねようとしているのだよ。さあ、もしあるひとが半分の重さの金を費して、その倍の重さの銀を手に入れるならば、かれは利得を手にしたことになるのか、損害を手にしたことになるのか。

1　すでに、227Aでいわれている。

友人　損害であることは確かですよ、ソクラテスさん。なぜなら、かれの金は銀の一二倍の値打ちがあるのに(1)、二倍の値打ちに下ることになりますから。

ソクラテス　それはそうだが、確かにかれはより多くのものを手に入れたのだ。それとも、二倍は半分より、より多くではないのか。

友人　その価値についていうならば、銀は金より、より多くは決してありません。

ソクラテス　してみると、思うに、利得にはこのもの、すなわち価値が付け加わっていなければならぬことになる。事実今きみは、銀は金より多いのに、価値があるとはいわないで、金はより少いのに、価値があるというのだ。

友人　大いにそうです、事情はそのとおりなのですから。

ソクラテス　してみると、価値があるということは、たとえそのものが小さかろうと大きかろうと、利得があるということであり、他方無価値であるということは、利得が無いということである。

友人　はい。

ソクラテス　ところで、価値があるものとは、所有に値いするものであると、きみは言うのではないか。

E

友人　はい、所有に値いするものである、ということです。

ソクラテス　ところでもう一度、所有に値いするものとは、益の無いもののことなのか、それとも、益があるもののことなのか、きみはどちらと言うだろうか。

友人　益があるものであることは確かです。

ソクラテス　益があるものとは、善きもののことではないか。

友人 はい。

ソクラテス だれにも増して男らしいひとだね、きみは。そうすると、またもや三度あるいは四度、[2]利得があるものは善きものであるという同意に、われわれは達するのではないか。

友人 どうもそのようです。

七

ソクラテス さて、この議論がどこから生じて来たのか、きみは覚えているかしら。

友人 覚えているとは思いますが。

ソクラテス で、もし覚えていないのなら、ぼくが思い出させてあげよう。善きひとはあらゆる利得を得ようと望むのではなく、利得の中の善いものを望んで、わるいものは望まない、といってきみはぼくに異議を申し立てた。[3]

友人 はい。[4]

1 シュタルバウム、フリッチェは、銀と金の価格比が、ヘロドトスの記述では、一三対一であり、クセノポンやリュシアスでは、一〇対一、アレクサンドロスの時代には、一一・五対一であった、ということから、この対話篇の成立年代を推定しようとしている。

2 すでに、227 A と 231 C でいわれた。228 A をも加えるならば、四度目である。

3 227 E でいわれている。

4 この肯定の答えを意味する原語 (ναίχι) は、プラトンの他の作品では用いられていない。

(232)
B

ソクラテス　ところがさて今は、議論がわれわれを、小さいものも大きいものも、すべて利得は善きものである、ということに同意するよう強制してしまっているのではないか。

友人　そうなのですよ、ソクラテスさん。というのも、わたしを納得させたというよりは、強制してしまったのですから。

ソクラテス　しかし、たぶんのちには納得させもするだろう。とにかく今は、きみが納得していようとまたどうであろうと、すべての利得は、小さいものも大きいものも、善きものであるということを、じっさいきみはわれわれとともに肯定している(1)。

友人　はい、そうです。わたしは同意しますから。

ソクラテス　で、すべてよきひとはすべて善きものを望む、ということにきみは同意するだろうか。それとも、しないだろうか。

友人　同意します。

C

ソクラテス　だがしかし、確か悪しきひとについて、かれらが利得を――それが小さくとも大きくとも――愛求するということを、きみ自身がいったのだった(2)。

友人　申しました。

ソクラテス　すると、きみの議論によれば、よきひとも悪しきひとも、すべてのひとが利得を愛求するものであることになる。

友人　そのようです。

ソクラテス　してみると、ひとが他人を利得愛求者であるといって非難するのは、不当な非難である。というのも、非難しているひと自身が、まさにそのようなひとであるのだから。

1　「われわれとともに」とあるが、そのような人物が、ソクラテスのかたわらにいることを、知らせるような記述は文中に見当らない。

2　226D〜E, 227C〜Dでいわれている。

『ヒッパルコス』補注

ヒッパルコスという人物にまつわる、この挿話は、対話の間奏曲的役割を果している。しかし、ヒッパルコスについて、とくにかれの死をめぐる事情に関しては、古くから諸説があって、事実は必ずしも定かでない。紀元前五一四年、僭主ペイシストラトスの息子、ヒッパルコスが、ハルモディオスとアリストゲイトンによって、パンアテナイの大祭の当日に殺害された。確実なのは以上のことだけである、と言ってもよいだろう。

ところで、ヘロドトス(Herodotos)の『歴史』第六巻(一〇九)における、ミルティアデス(Miltiades)のことばがそのまま事実とすれば、すでにマラトンの戦い(前四九〇年)のときには、この両名の行為を、アテナイ人に自由をもたらしたものとして、讃美する傾向があったことになる。つぎにとり上げられるべきものは、ヒッパルコス自身と関係があった、詩人シモニデスであろう。今日伝えられている碑文の一つに、前四七七年、詩人がアテナイで作品を自ら指揮して上演し、賞を得たことと、ハルモディオスとアリストゲイトンの像が建てられたこととが並記されている。さて、これとは別に、碑文によるとして伝えられる詩人の作品に、両名の行為がアテナイ人に大きな光明をもたらした、と讃えるものがある。もし、上記の像に、これが刻まれていたとすれば(Edmonds)、いわば宮廷詩人としての役割を、シモニデスがどう受けとめていたか、かれがヒッパルコスに対してどういう感情をもっていたか、『ヒッパルコス』の記述(228C)ともあわせて、いろいろなことが想像できよう。いずれにせよ、前四七七年頃には、この事件を解放の義挙とみる雰囲気があったことになる。

いま一つ、ふつう「ハルモディオスの歌」とよばれていたスコリオンが伝えられている(Athenaios, *Deipnosophistai* XV. 695)。これは酒席でさまざまな形式で歌いつがれる宴歌の一つだったようであるが、その中に両名の行為を讃えることばが繰り返してあらわれる。喜劇作家アリストパネス(Aristophanes)は、その作品の中で幾度か、この「ハルモディオスの歌」に言及し、その一部をもじって用いたりしている。また、この歌には、今日伝えられているものの他に、別のものもあったことが、かれの作品から推定できる。喜劇作品とか、スコリオンといったものの性格から考えると、おそくとも前四二〇年代には、この事件を義挙と讃える俗説のごときものが、巷間にひろく流布されている、といった状況が形成されていたとみられる。さて、今までに挙げた史料からすると、両名の行為が僭主支配の崩壊をもたらした、とする点は一致しているが、なにゆえ両名が共に事を起すに至った

かについては、明かではない。この点については、プラトンの『饗宴』(182C)が参考になる。そこでは両名の愛(エロース)が固まって、といわれている。『饗宴』の対話設定年代は、前四一六年とされるから、前記の俗説の内容として、両名の行為は愛憎のからみ合いに端を発する、という見方が含まれていたとしてよいであろう。しかしながら、僭主支配の打倒という政治的理念と、愛にからんで生じた憎悪とは、それほど簡単には結び付かないから、そこにはさまざまな説明が付け加えられざるを得ないし、その結果、いくつかの相異る説が流布されることもあったであろう。とにかく、この事件がアテナイ人にとって、よく知られた(その限りでは、また、説がゆがめられたり、つながれたり、枝葉がつけられたりすることも多かったであろう)ものであったことは、歌謡や演劇や、また彫刻などに、しばしばとり上げられた事実が、これをよく証明している。これが事件があってから、いまだ百年を経ていない頃の状況なのである。

さて、右のような巷間の説に対して、『ヒッパルコス』が伝えていることの特色を、ここに取り出してみよう。

(1) ヒッパルコスが、ペイシストラトスの長子であった(俗説はこの点について明かでない)。

(2) かれは芸術を愛好し、市民の教化につくすなど、すぐれた治績を残した、立派な人格者であった。

(3) かれの死に至るまでの政治は、アテナイ人にとって、伝説の黄金時代にも似た生活をもたらした。

(4) 殺害の動機については、巷間の俗説は真相ではない。すなわち、(a)両名は愛によって結ばれていたが、(b)両名のヒッパルコスに対する憎悪の原因は、もっと複雑であって、(c)そこには、ハルモディオスに愛された、別の青年も介在している。以上のごとくである。

さて、この事件に関して、おおむね前四三〇年頃から百年の間に、三人の学者が、それぞれ証言を残している。それを取り上げてみよう。(イ) ヘロドトスは『歴史』第五巻(五五以下)で、一転してアテナイにおける僭主支配の崩壊について語りはじめる。その記述からすると、ヒッパルコスが長子であったかどうか、また、僭主として政権の座にあったかどうか、いずれも確定し難いところがある。しかし、かれの死に至るまで、そして死後はなおいっそう、苛酷な僭主支配が行われた、とする点では、『ヒッパルコス』と明かに相違する。つぎに、殺害の動機については、両名の出身部族について、とくにアテナイにおける、その部族に与えられた待遇について、事細かに述べて、愛憎の問題については何ら言及していない。そして、僭主支配の崩壊は、アルクメオン一族に動かされた、ラケダイモン人の手によって実現したことを告げている。(ロ) つぎに、トゥキュディデス(Thoukydides)は、『歴史』第一巻(二〇)で、アテナイ人が信じている誤伝の例として、この事件をとり上げている。それによれば、ペイシストラトスの長子は、ヒッピアスであり、とうぜん僭主の地位は彼ヒッピアスによって受けつがれた、そして、ハルモディオスとアリストゲイトンが、倒そうとねらっていたのは、ヒッパルコス(だけ)ではなかった、と主張しているごと

くである。同じく第六巻(五三以下)で、叙述の順序を乱して、この事件について、さらに詳しい記述を、確証にもとづく史実として、史家は与えている。そこでは、僭主として筆頭にあげらるべき地位にあったのは、長子ヒッピアスであるとし、支配そのものは、ヒッパルコスやテッサロスなどを含む、複数によって行われた、と見ていることを示している。また、かれらの支配は、多くの人にとって苦痛ではなかった、とも言う。また、史家はこう言っている。両名の間は、愛で結ばれていたので、ヒッパルコスがハルモディオスに言い寄って失敗したことは、アリストゲイトンに憎悪の念をいだかせ、また、その報復をおそれて、僭主支配そのものをくつがえすことを企てさせた。企図には、少数ではあるが、同志が得られた。ヒッパルコスは、明らさまに力に訴えないで、ひそかに報復しようとして、祭礼の籠運びの役のことで、ハルモディオスの姉(妹)を侮辱した。それが直接のきっかけとなって、かれらは事を起すことに決意したが、当日、たまたま企図がヒッピアスに内通されたかと疑わせることが起り、両名だけが性急にヒッパルコスにおそいかかった。その後におけるヒッピアスの僭主支配は、苛酷きわまるものとなったのである。

(ハ) 第三に、アリストテレス(Aristoteles)は、『アテナイ人の国制』(一八以下)で、こう述べている。ペイシストラトスの長子は、ヒッピアスであって、かれは思慮深い、天性の政治家で、支配権をにぎっていた。ヒッパルコスも支配の地位にあったが、遊び好きで、好色で、芸術好みであった。ハルモディオスに言い寄ったのは、テッサロスであって、かれは誘惑に失敗し、ハルモディオスの姉(妹)を侮辱して、この事件をひき起した。事件には多くの同志がいたのであるが、企図が内通されたかと疑った両名が、ヒッパルコスを殺害したため、計画の全体は破られてしまった。そして、その後の僭主支配は、はるかに兇暴なものとなった。それが終末を告げたのは、アルクメオン一族に動かされた、ラケダイモン人の手によってである。

さて、史料としては、もう一つ、ディオドロス(Diodoros)の書物におさめられているものがあって、これもまた異説を伝えているが、これは時代がやや後の記述(後一世紀の中頃)であることから、今は考察の外におくとして、事件をめぐる巷間の俗説に対して、『ヒッパルコス』を含む四つの史料が、真相として、また史実として、いくつかの修正を提案しているわけである。しかし、残念ながら、それらのいずれもが、また、多くの点で相違していて、事実を確定することは不可能に近い、と認めざるを得ない。四者が共通に、明言していることは、事件が直ちに僭主支配の崩壊をもたらしたのではない、ということだけである。

以上のことを踏まえて、多分に推定をまじえながらも、この間奏部について、いくらかの補説をこころみるとすれば、つぎのごとくである。

(1) ヒッパルコスが長子であったとする説については、トゥキュディデスが、いくつかの反証をあげているところから、誤りとしてよいだろう。ヘロドトスの証言は、どちらとも解し得るようだが、ヒッピアスに筆頭的地位を認めたかの

ような記述は、トゥキュディデスにいささか近い。だが、以上のことと関連において、ここでの長子説の主張をどう理解すべきなのかは、年代決定ともからんで、難しい問題をふくんでいる。

（2）ヒッパルコスの人物については、学芸を愛好し、また市民の教化につくしたという点は、認められてよいだろうが、それは多分に独りよがりな彼の性格のあらわれに過ぎない、とも考えられる。この間奏部が前後の対話と深いつながりがない、ということを考慮にいれると、この部分は、巷間のヒッパルコス像に対しての弁明を意図したものである、という推定も成り立つかも知れない。

（3）ヒッパルコスの死までの僭主支配のあり方は、ヒッピアスを筆頭とする、一家支配的なものであったと考えるのが、もっとも困難の少い考え方であろう。そして、多分に表面的にではあったろうが、父ペイシストラトスの時代にひき続いて、支配はおだやかに行われていた、とみてよいであろう。

（4）殺害の動機については、直接のきっかけは、籠運びの役にかかわって生じたのであろう。（a）しかし、両名の愛の結び付きはあったとしても、（c）それを裂くような形で、ハルモディオスに言い寄ったのが、ヒッパルコスであったかどうかは不明である。（別の人物が登場する点では、『ヒッパルコス』と一致する史料もあるが、その役割は反対になっている。）その間の事情について推しはかるに、すでに述べたように、支配のあり方が一家的であったこと、そして、（b）企図が恋仇きに対する復讐という以外の何かにまで拡大され、志を同じうするものも出てきたというような事情が、愛憎のからみ合いの影をうすくしたのでなかったか。そうなれば、打倒さるべきはペイシストラトス一家であって、目ざすはヒッピアスでもヒッパルコスでもよく、また、それが恋仇きであってもなくてもよかったであろう。そして、このように拡大された企図の方が、実際は直ちには実現されなかったし、外力によって実現されたにもかかわらず、反僭主的な傾向の中で、大きくとり上げられていったのであろう（「解説」二三九ページ参照）。

恋がたき

——愛知について——

田之頭安彦訳

登場人物

ソクラテス
二人の若者
その一方を恋する者
その恋がたき

132

一

ぼくは、読み書きの先生をしているディオニシオス(1)のところへ行った。そしてあそこで、「顔立ちはきわめて美しいし、家柄も素晴らしい……」と世に評判の若者たちと、かれらに恋をしている男たちに会った。たまたまその時、そのうちのふたりの若者が論争していたのだが、何の問題で争っているのか、はっきりとは聞きとれなかった。もっともアナクサゴラスかオイノピデス(2)の件で、論争しているようには思えたが……、事実、かれらは円を描いているようだったし、身をかがめてきわめて熱心に、両手で何か斜線のようなものをまねてもいたしね。(3)

B　そこでぼくは――かれらのひとりに恋をしている男のそばにすわっていたから――その男を肘でつついて、「どうしてこの若者たちは、こんなに熱中しているのだい？」とたずねて、言った。

「こんなに熱中しているのだもの、さぞかし重大で、すばらしい問題なのだろうね」

「何ですって！」と、かれは答えた、「重大で、すばらしいですって！　とんでもない。とにかくこのふたりときたら、遙か天空のかなたに浮いているようなものども(諸天体)のことで無駄口をたたき、知を愛し求めてるんだというわけで、その実、わけのわからぬおしゃべりをしているんですよ」

C　ぼくはかれの返事におどろいて、言った。

「おや、きみも若いねえ。きみには、知を愛し求めることがみっともないこととでも、思えるのかね。でなければ、どうして、そんなに目くじらたてて話をするのかね」

すると、別の男が――この男は、その男の恋がたきで、たまたまかれのすぐそばにすわっていたので――ぼくとその男のやりとりを聞いて、言った。

「とにかく、ソクラテス、この男に、知を愛することはみっともないことだと考えているのかどうか、質問したって、そいつは無駄というものですよ。御存知ないのですか、この男ときたら、年がら年中、レスリングをするか、たらふく飯をたべるか、寝るかして、すごしているのです。ですから、この男は、知を愛することはみっともないことだと答えるより、ほかにないではありませんか。それともあなたは、この男から、何か別の答を得られるとでも思ったのですか」

D　ところで、この恋にとりつかれたふたりのうち、いまぼくに話しかけてきた方は、文芸のたしなみを身につけようとして毎日をすごしてきた男だったが[(4)]、かれが悪しざまに言ったもうひとりの方は、体育の練習にたずさわ

1　Diog. L. Ⅲ. 4によれば、ディオニシオスはプラトンの先生で、プラトンはかれから読み書きを習ったとされている。

2　オイノピデスは、前五世紀の後半に活躍した有名な天文学者で数学者。アナクサゴラスより少し若かったとか、ペロポンネソス戦争の終り頃の人であるとか言われているが、その伝承もさまざまで、一生もつまびらかではない。なお、天文学の分野では、黄道の研究に従事して、その傾きに関する知識をエジプトの神官に学んだとか、獣帯の発見者であるということが、伝えられている(Fr. 1. 29(DK))。

3　二人の若者は、アナクサゴラスやオイノピデスの、黄道の傾斜(角度)もしくは地軸の傾きに関する教えをめぐって、論争しているのではないかとも思われる。

4　プラトンは、『国家』Ⅱ末(375 E sqq.)からⅢにかけて、やがて国守りとなるべき青少年の、初歩的な教育の問題をとりあげ、身体のための教育としてのギムナスティケーと、魂(精神)のための教育としてのムゥシケーの重要性を説いている。ここでは、一応、後者を「文芸のたしなみ」と訳しておいたが、その詳細については、同書を参照されたい。

りながらすごしてきた男だった。そこで、ぼくが質問した男の方は自分でも、「実践面のことなら経験もあるが、言論を交えることはどうも不得手で……」というふりをしていることでもあるから、もうそのままにしておいて、かれよりも賢いふりをしている男の方に質問し、かれから少しでも有益なことを聞ければ、その方がよいのではないかと、ぼくは思った。

そこで言った。「ぼくは、きみたちふたりを相手にして質問したのだがねえ。しかしもしきみがこの男より立派に答えることができると思うのなら、いまこの男にたずねたこととまったく同じことを、きみにもたずねよう。きみには、知を愛することが立派なことだと思えるのかい、それとも……？」とね。

二

133

さて、ぼくたちがだいたいこのような話をしているのを聞いて、さきのふたりの若者は口をつぐみ、自分たちの論争を中断して、ぼくたちの話に耳をかたむけてきた。かれらのひとりに恋をしている男たちが、それをどう受けとったかは知らない。しかしとにかく、このぼくは、ひどく狼狽してしまった。だって、いつでもぼくは、美しい若者たちにはこころをうばわれてしまうのだからねえ。とはいっても、ぼくにはもうひとりの男の方だって、ぼくに劣らず興奮しているように思えたがね。しかしそれでもかれは、すごく負けん気をだして、ぼくに答えてきたものだ。「よろしいですか、ソクラテス、もしわたしが、知を愛し求めることはみっともないことだと

B

考えたことがあるとしたら、その時には、もうわたしは自分自身を人間とは認めていなかったことになったでしょうし、そのような態度をとるやつは誰だって、人間とは思わなかったでしょうよ」と、自分の恋がたきの方

ね。

を指さし、自分の愛する稚児さんが自分のことばをひとつもらさず聞いてくれるようにと、大きな声で話して

そこで、ぼくはたずねた。

「すると、きみには、知を愛し求めることは立派なことだと思えるのだね」

「ええ。まったく、そうですとも」

と、かれは答えた。

「では、どうだね」と、ぼくは言った、「どんなものだろうと、もともとそれが何であるかを知らなければ、はたしてきみには、それが立派なものかみっともないものか、知ることができると思われるかね」

「いいえ」

と、かれは答えた。

「それでは、愛知とは何か、知っているかね」

と、ぼくはたずねた。

「たしかに、知ってますとも」

と、かれは答えた。

「では、いったい、それは何かね」

と、ぼくは質問した。

「むろん、それは、ソロンの言っているとおりのことです。それ以外に、考えられないじゃないですか。ソロ

ンは、たしか、こう申しております――

余は老年に達すといえども、つねに多くを学びて止むことなし(1)

と。このソロンのことばのとおり、知を愛し求めようとする者は、若かろうと年をとっていようと、たえず何かひとつでも……と学びつづけ、一生のうちに、できるだけ多くのことを学び知っていくようにしなければならないと思うのです」

ぼくは、まず、かれの言っていることに一理ありと思った。だがそれから、どうということなしにこころに思いつくことがあったので、愛知とは多くを学び知ること(博学)だと考えているのかと、かれに質問した。

D

すると、あの男は答えた。

「ええ。まったく、そのとおりですとも」

そこで、ぼくは言った。

「よろしい。では、どうだね。愛知はただ立派なことだとしか、きみは考えていないのかね。それとも、善いことでもあると考えているのかね」

「善くもあるのです、まったく」

と、かれは答えた。

「すると、きみは、その善いということを愛知のみに固有なことと、みているのかね。それとも、ほかの場合でも、事情は同じだと思っているのかね。たとえば体育への愛も、たんに立派というだけでなく、善いことでも

あると考えているのかね、どうかね」

すると、かれは皮肉たっぷりの調子で、二通りの答えかたをしてきた。

「この男にたいしては、どうか、そのどちらでもないということで、わたしの返答は終ったものとしてくださいよ。あなたには、しかし、ソクラテス、それが立派でもあり、善くもあると認めましょう。その方が正しいと

E

思うからです」

そこで、ぼくは質問した。

「では、きみは、体育の場合でも、練習に練習を重ねて、身体を痛めつける度合を多くすること(2)が体育愛なのだと、考えているのかね」

すると、あの男は答えた。

「ええ。たしかに、そうですとも。とにかく愛知の場合だって、勉学に勉学を重ねて、学び知る度合を多くすることが知を愛することだと、考えているのですからね。それと同じですよ」

そこで、ぼくは言った。

「では、どうだね。体育を愛する者たちは、ほかでもない、自分たちのからだを善い状態にしてくれるはずの

---

1 このソロンのことばについては、『ラケス』188B, 189A、および『国家』VII. 536Dも参照されたい。

2 原語のπολυπονίαは「労苦(難行)の多きこと」の意であるが、ここでは次の「学び知る度合いを多くすること」(πολυμαθία)との関連で考えられているので、むしろ本文のように訳した。なお『法律』I. 633Bのラケダイモン人メギロスのことばを参照されたい。

(133)

ものを、ものにしたいと思うのではないか」

「ええ。それをものにしたいと思っていますね」

と、かれは答えた。

「すると、はたして」と、ぼくはたずねた、「猛練習を重ねて、身体を痛めつける度合が多ければ、それが、からだを善い状態にするのだろうか」

「そうですとも。とにかく、少しぐらいの痛めつけで、どうして、人のからだが善い状態になりましょう？」

と、かれは答えた。

134

ぼくは、もうここらで、ひとつ体育好きの男の方を刺戟して、かれの体育経験を通して助けてもらわねばなるまいと思った。そこで次に、その男に向って、質問をはじめた。

「しかしきみの方は、気高き若者よ、この男がこう話しているのに、どうして、黙りこんでいるのだい？　どうか、話してくれたまえ。きみにも、人のからだは、猛練習を重ねて痛めつける度合が多ければ、それで善い状態になると思えるのかね。それとも、ほどほどの痛めつけでよいのかね」

「わたしとしましては、ソクラテス」と、かれは答えた、「よく言われることなのですが、『豚だって、それぐらいのことは知っている(1)』と、思ってたのですよ。ほどほどの痛めつけが、人のからだを善い状態にするということぐらいはね。なのに、いったいどうして、ろくに寝食もとらず、すり傷ひとつない首をし(2)、思索思案を重ね

B

ることの心労に痩せこけていらっしゃる御仁に(3)、それぐらいのことがわからんのでしょうかねえ」

かれがこう話すと、そこにいた若者たちは面白がって笑いだしたが、かれの恋がたきの方は顔を赤らめた。

そこで、ぼくは言った。
「さて、どうだね。きみは、もうここらで、多すぎる痛めつけも少なすぎる痛めつけも、ともに人びとのからだを善い状態にすることはない、ほどほどの痛めつけこそ大切なのだと、認めるかね。それとも、この論点をめぐって、ここにいるぼくたちふたりと、あくまでも争うつもりかね」

C

するど、あの男は答えた。
「この男となら、よろこんで、あくまでも争いましょう。それにわたしは、さきに議論の出発点として立てたあの命題を、十分に防衛できると確信しておりますし、あれよりもっと劣勢の命題を立てたって、それを防衛できる自信はあります。なにせ、この男ときたら、頭のなかはからっぽなのですから。とはいっても、あなたを相手に、非常識な勝負をいどもうとは、思っておりません。同意いたしましょう。過剰のではなく、ほどほどの(適度の)体育が、人びとに善い状態をつくりだすのです」

1　豚のようなまったく無知な動物にさえ、わかっていることなのに……、という皮肉をこめたことば。なお、『ラケス』196Dも参照されたい。

2　「ろくに寝食もとらず……」は、少し前に(132C)、文芸好きの青年が、かれを愚弄するかのような調子で、「年がら年中……、たらふく飯をたべるか、寝るかして、すごしている……」と語ったことを逆手にとって、皮肉ったことばであろう。なお、「すり傷ひとつない首……」は、ここでは、「ほっそりとした(もしくは、なよなよした)首……」というほどの意味。体育好きの青年が、自分の頑健なからだつきを誇示して、ひょろひょろした文弱青年に、しっぺがえしをしているわけである。

3　哲学者をからかい半分に皮肉る時に、用いられるが(アリストパネス『雲』一〇一、一四〇六行を参照)、ここでは、なまはんかな愛知(哲学)者ぶりを発揮している文弱青年に、向けられている。

「では、食事については、どうだろうね。人びとに善い状態をつくりだすのは、適度の食事かね。それとも、多量の食事かね」

と、ぼくはたずねた。

するとかれは、食事についても同じだと認めた。

D

そこでまた、ぼくはさらに、つづけて、からだに関係のあるほかのものもすべて、それがもっともためになるのは適度のそれであって、多すぎるものも少なすぎるものもためにならぬということを、かれが認めなければならないようにした。そしてかれは、適度のものがためになるという点で、ぼくに同意した。

「では、魂に関係のある事柄については、どうだろうね」と、ぼくは言った、「魂にあてがわれると、ためになるのは、適度のものだろうか。それとも、適度でないものだろうか」

「適度のものです」

と、かれは答えた。

「では、学問も、魂にあてがわれるもののひとつではないかね」

かれは認めた。

「よろしい。したがって学問の場合でも、適度であれば魂のためになるが、多すぎるとためにならぬことになる。そうだね」

かれは同意した。

E

「さて、それでは、どのような痛めつけや食事が、からだには適度なのかは、誰にたずねるのが妥当なのだろ

うね」

そこにいたぼくたち三人は、医者か体育の教師にたずねればよいということで、意見の一致をみた。[1]

「だが、種播きについては、どうだろう。どれほどの量が適度なのかは、誰にたずねたらよいのだろうか」

この点についても、農夫にたずねたらよいということで、意見の一致をみた。

「では、魂に学問を植えつけたり播いたりすることについて、どのようなものをどれほどの量にすれば適度なのかは、誰にたずねるのが妥当なのだろうね」

ここから先になると、もうぼくたちはみな、すっかり行きづまってしまった。そこでぼくは、冗談まじりに、かれらにたずねて、言った。

「どうだね。ぼくたちは困っているのだから、ここにいる若者たちにたずねてみようではないか。そうしないで、ホメロスが〔ペネロペの〕求婚者たちのことで語っているように、『自分以外に、その弓をひける者がいるなんて、ありうべからざることだ』とでも思っているとすれば、われわれはおそらく、恥をかくことになりはしないかな?」[2]

1　プラトンの、医者と体育教師にたいする考えについては、『プロタゴラス』313D、『クリトン』47B、『ゴルギアス』504A等を参照されたい。

2　ホメロス『オデュッセイア』第二一巻二四一行以下を参照されたい。

三

さて、ぼくには、かれらが議論をこの方向にもっていくことに、あまり気のりしていないように思われたので、別の方法で探究をすすめていこうと思って、言った。

「ところで、知を愛する者が学ばねばならないのは、すべての学問でもなければたくさんの学問でもないとすると、とりわけどのようなものを、という見当になるのかな？」

B　すると、賢い方の男が、ぼくのことばを受けて、言った。

「たいへんすばらしく、またふさわしい学問は、それによって人が、愛知者の評判を、もっとも多く得るような学問です。そして人は、ありとあらゆる技術に心得があるとみなされるか、すべてとはいかなくても、できるだけ多くの、しかも特に重要な技術に心得があるとみなされる時に、もっとも多くの評判を、かちうるでありましょう。それも、その分野で、たんなる手仕事ではなくて、理解につながるような、自由人が学ぶにふさわしいことがらを学ぶことによって、それらの技術に心得があると、みなされる場合のことなのですが」

「してみると、きみが語っているのは」と、ぼくは言った、「大工の術の場合のようなことなのかな？　とい

C　うのも、事実、きみも知ってのとおり、その場合は、五ムナか六ムナも払えば、大工を傭うことはできようが、一流どころの棟梁ともなると、一万ドラクメだしたって、傭えないだろうからね[1]。いうまでもなく、ギリシア人全体を見まわしても、なかなか、そんな人物はいないのだから。ひょっとしてきみは、何かそのようなことを言おうとしているのではあるまいか」

するとその男は、ぼくの話を聞いて、「わたし自身も、そのようなことを言おうとしているのです」と、認めた。

四

そこで、ぼくはかれに、「多くの大切な技術はさておくとして、たったふたつの技術でも、同じ人間がそんなふうに学ぶことは、なかなかむつかしいのではなかろうか」と、たずねた。

するると、その男は言った。

D
「ソクラテス、あなたはわたしが、知を愛する者は、ちょうど専門の技術をもっている人と同じように、ひとつひとつの技術について厳密な知識をもっていなければならないなどと言っているようには、とらないでください。わたしは、自由で教育のある人は、それにふさわしく、職人の言うことを、その場に居あわせた誰よりも立派に理解し、そのうえで自分の意見をだすことができるので、技術に関する言論や実践の場にいつも居あわせている者たちの誰よりも見ばえがして賢いと思われるような人でなければならないと、申しあげているのです」

そこでぼくは、まだかれのことばの意図するところがわからず、思いまどっていたから、たずねた。

E
「ぼくは、きみが愛知者ということばで、どんな男のことを言おうとしているのか、はっきりとつかんでいることになるのかなあ？　というのも、ぼくにはきみが、陸上競技やレスリングの選手たちと仕合をする時の、五

1　ドラクメやムナは、当時の金銭の単位。一ドラクメは約一八セント(約五四円)、一ムナは一〇〇ドラクメ。

種競技の選手を思わせるような言い方をしているようにみえるのだよ。(1) つまり、知ってのとおり、五種競技の選手たちは、陸上競技やレスリングの仕合では、その道の専門選手たちにおくれをとり、かれらにくらべると二流なのだが、ほかの選手たちの間では第一人者で、かれらより勝っている。おそらくきみは、愛知というものも、それを己が業としている者たちに、結果として、何かそのようなことをもたらす、と言っているのではあるまいか。技術の理解という点では、その道の第一人者たちにおくれをとるが、しかし第二の地位を占めることによって、他の人びとには先んじる、そしてそのようにして、何ごとにつけても、愛知者というものは、一流にかなわぬ二流どころの人物のようなものになる、とね。何かこのような男の姿を、きみはぼくの前に示しているように思えるのだが」

136

「じつにお見事だと思います、ソクラテス」と、かれは答えた、「愛知者を五種競技の選手になぞらえて、その立場を御推察されるなんて。そうですとも。いかなる仕事の奴隷にもならず、ただ精密であることのみを求めて労するというようなこともなく、つまりは、職人どものように、ただひとつのことの世話のみに追われて他はすべてこれを無視するというようなことはせずに、すべてにほどよい接触を保っていることになる、端的に申しまして、こういうのが、愛知者なのですから」

B

五

たしか、かれがこう答えたのち、ぼくは、かれの言わんとするところを、ぜひともはっきり知りたいと思って、「きみは、すぐれた善い人は役にたつと思っているのかね。それとも、役たたずだと思っているのかね」と、た

ずねた。
「むろん、役にたちますよ、ソクラテス」と、かれは答えた。
「すると、すぐれた善い人が役にたつとすれば、劣悪な人は役たたずだということになるわけだろうね」
かれは認めた。
「では、どうだろう。愛知者は役にたつと、きみは考えるのかね。それとも、その反対かね」
その男は、愛知者は役にたつと認めた。いや、それどころか、たいへん役にたつと考えているとさえ、言った。
C「さあ、それでは、きみの言ってることが本当だとすると、この、一流にはかなわぬ二流どころの人たちが、どの点で、ぼくたちの役にたつ人でもあるのか、ひとつ識りたいものだねえ？　とにかく愛知者は、少なくとも、専門の技術をもっている者ひとりひとりとくらべると、その誰よりも劣っていることは、明白なんだからな」
かれは、同意した。
「では、よいかね」と、ぼくは言った、「もしきみ自身か、あるいはきみが多大の関心をもっている友だちの

1　五種競技のなかには、跳躍、陸上競技(競走)、円盤投げ、槍投げ(または拳闘)、レスリング等が含まれていたようであるが、さだかではない。なお、Diog. L. IX. 37 には、トラシュロスの言として、ここでソクラテスの問答の相手をしているのはデモクリトスではないかということ、そしてかれは自然学や倫理学上の諸問題のみならず、数学上の諸問題や日常的な諸問題にも通じていたし、ありとあらゆる技術に心得があったので、じつのところ、愛知におけるペンタトロスであるということが、紹介されている。このことばからして、あるいは本対話篇の話の筋を追っていけば、自然に明らかとなることであるが、五種競技の選手と訳したペンタトロスは、一応のところはすべてをこなすことのできる万能選手という、あまりよくない意味に用いられているようである。

誰かが、たまたま病気になったとすると、きみは、健康を取り戻そうとして、あの、一流にはかなわぬ二流どころの人(愛知者)を、家につれてくるだろうか。それとも、医者を呼ぶだろうか」

D

「わたしとしては、ふたりともつれてくるでしょう」

と、かれは答えた。

「どうか」と、ぼくは言った、「ふたりともなどと言わないで、どちらを選び、先に呼ぶのか、言ってくださいよ」

「誰だって、何の疑いもなく、医者の方を選び、先に呼ぶでしょう」

と、かれは答えた。

「では、どうかね。船に乗っていてしけにあった時には、きみは、きみ自身ときみの持物を、どちらにゆだねるだろうか。舵取りにかね。それとも、愛知者にかね」

「わたしは、舵取りにゆだねます」

「すると、ほかのどんな場合でも事情は同じで、それぞれ専業の人がいるかぎり、愛知者は、役にたつ人とはならないのではないかね」

「そう思われます」

と、かれは答えた。

E

「さて、したがって、いままでの話からすると、愛知者は、ぼくたちにとって、何の役にもたたない人だということになるのではないかな? どうやら、ぼくたちの前には、どのような時にでもつねに、その道の専門家が

いるようだからねえ。ところが、ぼくたちは、すぐれた善い人は役にたつが、劣悪な人は役たたずであるということに、同意したのだった」

かれは、これを承認せざるを得なくなってしまった。

六

「はてさて、すると、次には、どういうことになるかな？　きみにたずねてみることにするか。いや、そいつは、あまりにも失礼なことかな？」

「何でも好きなことをたずねれば、よいでしょう！」

「うん、ほかでもないんだ」と、ぼくは言った、「ぼくはただ、これまでの話をまとめてみたいと思っているだけなんだ。それは、だいたい次のようなことだったねえ。知を愛することは立派なことであり、われわれ自身、愛知者なのだ、そして愛知者はすぐれた善い人であるし、すぐれた善い人は役にたつが、劣悪な人は役たたずであるということに同意した。しかしさらにまた、ぼくたちは、それぞれの専門家がいるかぎり、愛知者は役たたずである、だが、専門家はいつの場合にもいるということにも、同意したのだった。そうでしょう？　以上のことが同意されたのではないかね」

「まったく、そのとおりですとも」

と、かれは答えた。

「してみると、少なくとも、きみの説にしたがって、知を愛し求めるということが、きみの言うやり方で諸技

(137)

B　術に通じていることだとすると、どうやら、ぼくたちは、愛知者は劣悪で役たたずだということに、同意していたことになるようだねえ。人間界に、もろもろの技術があるかぎりはね。しかしねえ、きみ、愛知者というのは、そんなものではないんじゃないかなあ。それに、知を愛し求めるということだって、かの技術のたぐいに関心のすべてを傾注することでもなければ、いろいろとよけいなことに手をだして、屈託の一生を送ることでも、また、あれこれとたくさんのことを学ぶ生き方でもなく、むしろ何か、それとは別のことではないだろうか。ぼくは思うのだが、そんなことは軽蔑されていることでもあるし、それに、箇々の技術にすべてをかけている者たちは、下賤の手職人と呼ばれていることでもあるしねえ(1)」

七

C　「なお、次のようにして考えていけば、はたしてぼくが真実を言っているのかどうか、もっとはっきりするだろう、もしきみが、次の問いに答えてくれればね。馬の正しい懲らしめ方を知っているのは、誰だろうか。馬をたいへんすぐれた善い馬とする人だろうか。それとも、別の人だろうか(2)」

「たいへんすぐれた善い馬とする人です」

「では、どうだろう。犬をたいへんすぐれた善い犬にする術を知っている人は、また、犬の正しい懲らしめ方も知っているのではないかね」

「ええ」

「してみると、同じ術が、犬をたいへんすぐれた善い犬にもし、また、正しい仕方で懲らしめもする、という

ことになるわけだね」
「わたしには、そう思われます」
と、その男は答えた。
「では、どうだろうね。たいへんすぐれた善い犬にしたり、正しい仕方で懲らしめたりする術と同じ術が、他方では、すぐれた善い犬と劣悪な犬の識別もするのだろうか。それとも、それは、何か別の術なのだろうか」
「同じ術です」
と、かれは答えた。
D 「するときみは、人の場合でも事情は同じで、人びとをたいへんすぐれた善い人とする術が、正しい仕方で人びとを懲らしめもし、また、すぐれた善い人と劣悪な人の識別もする、ということを認めるだろうね」
「ええ、まったく」
と、かれは言った。
「してみると、ひとりの人を善くする術は、また、多くの人をも善くし、多くの人を善くする術は、ひとりの

1 「下賤の手職人」と訳したバナウソイということばには、当時の自由人たちの、手職人にたいする侮蔑的な感情がこめられていた。手仕事は奴隷か、政治的にも軍事的にも無能な人間のすることだったからである。なお、この件については、『テアイテトス』176C、『アルキビアデスI』131B等も参照されたい。

2 罰が正しい仕方であたえられる場合、それを受けたものを、正しい方へと導いていくという、プラトンの罰にたいする考え方については、『ゴルギアス』476Dsqq. を参照されたい。

人を善くもする、ということになるのではないか」
「ええ」
「それにまた、馬の場合でも、他のどのような場合でも、そうだね」
「そうですとも」
「では、ぼくたちの国で、放埒にふるまう者たちや法を犯す者たちに正しい懲らしめをあたえる知識は、何だろうか。司法裁判の術(知識)ではないか」
「ええ」
「すると、はたしてきみは、それ以外の何かを正義とも呼ぶかね」
「いいえ。司法裁判の術を正義と呼びます」
「してみると、人びとは、正しい懲らしめをあたえる術でもって、また、すぐれた善い人と劣悪な人の識別をもするのではないか」

E

「その術で、識別するのです」
「ところで、いいひとりを識(し)るものは、また多勢(おおぜい)をも識るのだろうか」
「ええ」
「それに、多勢を識らぬものは、ひとりをも識らぬ。そうだね」
「そうです」
「すると、或る一頭の馬がいるとして、その馬がすぐれた善い馬と劣悪な馬の別を識らない時には、当の自分

がどのような馬であるかということさえも、わからぬことになるわけだろうねえ」
「そうです」
「また、或る一頭の牛がいるとして、その牛がすぐれた善い牛と劣悪な牛の別を識らなければ、当の自分がどのような牛であるかということさえもわからぬことになる。そうだね」
「ええ」
と、かれは答えた。
「では、一頭の犬がいるとしても、むろん、事情は同じだね」
かれは認めた。

138

「では、どうだろう。或るひとりの人がいるとして、その人がすぐれた善い人と劣悪な人の別を識らない時には、当人自身も人である以上、ほかならぬ自己自身がすぐれた善い人なのか劣悪な人なのか、わからないのではないか」
かれは同意した。
「ところで、自己自身を識らぬということは、思慮のあることかね、ないことかね」
「思慮のないことです」
「してみると、自己自身を識ることが、思慮のあることになる。そうだね[1]」

恋がたき

1　この点については、『アルキビアデス I』131Bsqq. も参照されたい。

(138)

「そうです」

と、かれは答えた。

「すると、どうやら、デルポイの神殿にかかげられていることばは、そのこと、つまり思慮の徳(節制)と正義をおさめよ、とのお勧めなのだということになるようだ[1]」

「そのように思われます」

「しかるに、ぼくたちはまた、それと同じ術によって、正しい懲らしめ方も知るわけだね」

「ええ」

B

「すると、ぼくたちが正しい懲らしめ方を知るのは、正義によってであり、自己自身と他の人びとを識るのは、思慮の徳(節制)によってである、ということになるのではないか」

「そう思います」

と、かれは答えた。

「してみると、正義も思慮の徳も同じだということになるわけだ。そうだね」

「明らかに、そうです」

八

「また、いうまでもなく、このように、正義と思慮の徳が一体不離の関係にある時に、国々も立派に治められるわけだ。不正をはたらく者たちが、その罰を受ける時にね」

「あなたのおっしゃっていることは、本当です」

と、かれは言った。

「したがって、それはまた、政治の術でもあることになる」

かれは同意した。

「では、ひとりの男が国を正しく治めている時には、どうだろう。その男にあたえられる名前は、僭主とか王というのではないか」

「そうです」

「してみると、その男は、王侯の術や僭主の術で、治めるのではないか」

「そのとおりです」

「すると、それらの術は、さっき話したあの術と同じだということになるね」

「ええ、明らかに、そうです」

C

「では、男がひとりで家を正しく治めている時には、どうだろう。その男には、何という名前があたえられるのかね。家長とか主人という名前ではないか」

「ええ」

---

1 デルポイの神殿に掲げられていたことば、「汝みずからを知れ」の解釈については、『カルミデス』164 A sqq.、『プロタゴラス』343 A sqq.、『アルキビアデス Ⅰ』131 B sqq.、および田中美知太郎著『「われ」の自覚とギリシア思想』四章(『田中美知太郎全集』第六巻)を参照されたい。

「すると、その男もまた、正義によって、自分の家を立派に治めるのだろうか。それとも、何か別の術によって、だろうか」

「正義によって、治めるのです」

「してみると、どうやら、王、僭主、政治家、家長、主人、それに思慮深い人と正義の人、かれらは、みな同じだということになるようだ。そして王侯の術、僭主の術、政治の術、主人の術、家長の術、それに正義と思慮の徳、これらも、ひとつの術だということになる」

「明らかに、そうなります」

と、かれは答えた。

九

D

「では、どうなんだろうねぇ。医者が病人たちのことで何か話をする時に、その話を理解できなかったり、そこで言われたり行なわれたりすることに何の手助けもできなかったりすると、それは愛知者にとって、みっともないことで、誰か他の技術の専門家が話をする時にも、そうなのだが、裁判官や王、それにたったいまぼくたちが例にあげた人びとが何か話をする時には、その話を理解できなくても、また、かれらの仕事を手助けできなくても、それはみっともないことではないのだろうか」

「もちろん、みっともないことですとも、ソクラテス、そんな大切なことがらに何の手助けもできないなんて」

E

「すると、どうなんだろうね」と、ぼくはたずねた、「愛知者は、これらの領域においても、また五種競技の

139

選手としてあるべきで、一流にかなわぬ二流どころの人物でなければならぬ、そして愛知者というものは、この技術に関するすべての領域で、二流どころの地位を占めるわけであるから、誰かその領域の専門家がいるかぎり、役たたずの人となることも、またとうぜんのなりゆきであると、言うべきなのだろうか。それとも、愛知者たる者は、何よりもまず、己れの家を他人の手にゆだねるべきではなく、そこでは、二流どころの地位を占めるべきでもない、己れの家を立派に治めんとするならば、みずからの手でこれを正しく裁き、善き方へあらためていかねばならぬと、こう言うべきなのだろうか」

かれは、はっきりと、ぼくに同意した。

「そして次に、友だちがかれに仲裁をまかせたり、国家が何らかの事件を調停もしくは裁決することを命じた時に、友よ、かかる事態に際して、みずからが二、三流の人物たることを暴露し、主導的な立場をとることができないのは、むろん、みっともないことだね」

「わたしには、そう思われます」

「してみると、きみ、よいかね、とんでもないことだよ。知を愛し求めることは多くを学び知ることであるとか、専門的な諸技術をとりまく周辺の業(わざ)であるということはね」

ぼくが以上の話をすると、〔たがいに稚児さんをめぐって反目しあっていたふたりの男のうち〕賢い方の男は、自分が前に話したことを恥じて沈黙し、無学な方の男は、あなたのおっしゃるとおりです、と言った。そしてほかの者たちは、ぼくの話を賞讃したのだった。

『アルキビアデス I』解説

田中美知太郎

登場人物

ソクラテス(Socrates)
アルキビアデス(Alcibiades) 『アルキビアデス II』の「解説」はじめの登場人物説明を見よ。

一

この作品は一面からすると、『饗宴』と共通する二つの問題を取扱っていると言うことができるだろう。一つは「エロース」についてであり、もう一つは「アルキビアデス問題」すなわちソクラテスとアルキビアデスとの関係についてである。そしてこの二つは「アルキビアデスには、恋する者が、おそらく過去においても、また現在においても、ただ一人しかいなかったし、またいまもいないのであって、そのただ一人とはソクラテスなのだ」(131E)という主張のうちに合一されている。いかなる意味において、アルキビアデスを愛しているのは、ソクラテスただ一人であるということになるのか。このことを明らかにするためには、真の恋愛(エロース)が何であるかが問われなければならない。いま美少年としてのアルキビアデスは、その最盛期を過ぎて、もう大人になろうとしている。

かれの少年としての美しさにひかれて集って来た多くの求愛者たちは、もうかれの許から離れ去ろうとしている。しかしソクラテスは、少年時代のアルキビアデスをいつも遠くから黙って見守っていたが、今もなお立ち去らず、かえってこの時点においてかれに近づき、かれを口説くことを始めるのである。これは奇妙なことであり、それが「なぜ」であるかを明らかにするのが、この対話篇の大切な筋になっていると言うことができるだろう。

「その原因は、きみという人を愛したのはぼく一人だけで、ほかの人たちはきみの付属物を愛したにすぎなかったからだということにある。そしてきみの付属物は最盛期を過ぎようとしているけれども、きみ自身の開花期はいま始まりかけているからだ。そして今となっては、きみがアテナイの民衆によって腐敗させられ、いまよりも醜くなるようなことがないかぎり、ぼくは決してきみを見捨てるようなことはしないだろう」(131E～132A)というのが、ソクラテスの一応の説明であるが、これの意味を理解するためには、「きみ自身」とか「きみという人」とか呼ばれているものが何であるかを知らなければならない。この対話篇の最後の部分は、これが究明にあてられ、われわれにおける「自身」とは、われわれの心(たましい)にほかならず、人間というものも、つまりこの心にほかならないことが示される(130C～E)。そしてデルポイのアポロン宮に掲げられた「なんじ自身を知れ」という言葉も、これと関連して次第に意味深く解釈されていく。このデルポイ箴言は、当対話篇の後半部において何度か言及されているのであるが、最初(124A)は、競争相手に対して自分の劣っている点、まさっている点を知るという意味あいのものであったのが、あと(129A)になると、そこの「自身」の意味が問題になって、その結果、「してみると、『自身を知れ』という課題を出している人は、われわれに『心を知れ』と命じているわけだ」(130E)という解釈が与えられることになる。しかしそれはどういうことなのか。かりに「眼に向かって、あたかも人間に対するがごとく『なんじ自身を見よ』と勧告したら」どうなるか。眼が眼自身を見るとはどういうことなのか。わ

れわれは鏡にうつる自分の眼、あるいは直接に他人の眼のなかをのぞきこむと、その人見(ひとみ)のところに「見る眼」自身のうつっているのを見るだろう。われわれが自身を知るのもこれと同じである。

「心もまた自分自身を知らねばならないとしたら、心で心をながめるようにしなければならないのかね。また特に心の本来の機能(徳)である知恵(智慧)が、そこに生ずるような、心のそういう局所をながめなければならぬ」(133B)

と言われているように、ただ漠然と心で心を知るというのではなくて、心の本来の機能が宿るところ、眼の人見(ひとみ)に当るところに自己自身を捉えなければならないというわけである。自知とか自覚とか、あるいは自己反省とか言われるものが、眼の例をつかっていかにも具象的に記述されているから、その記述努力がわれわれの興味をひくことになる。さらにこの心の人見に当る部分は、「神に近い性質のもの」(133C)と呼ばれて、

「してみると、神に似ているのは、心のこのところであって、ひとはこれをながめているうちに、また神的なものの全体を知ることになり、それによってまた自分自身をも最大限に知ることができるようになる」(133C)

とも言われている。これはただこれだけの言葉で言われているに止まり、それ以上の説明は与えられていないのであるが、解釈家をよろこばすような哲学的な内容をもつ命題とも取られるだろう。とはいえ、この対話篇の後半を、このようなデルポイ箴言の解釈だけで捉えるのは、全体的にはバランスを失した局部的解釈ということになるだろう。

二

それでは、かりにその後半部を127Dから135Eまでとするなら、そこに展開されているのは何の議論だと見るべきであろうか。それはアルキビアデスが前半の問答によって、

「神々に誓って、ソクラテスよ、わたしも自分で何と言っていいのかわからないのです。おそらくもうずっと前から、わたしは自分自身のこのしごく恥ずかしいありさまに、まったく気がついていなかったのかもしれません」(127D)

というような、一種の無知無力の自覚にみちびかれた後を受けて、ソクラテスがその自覚は未だ時機がおそすぎはしないと励まし、

「うっかりして時どきわれわれは、自分自身に気をつけているつもりで、実際はそうしていないことがあるんではないか」(128A)

などと言いながら、「自分自身に気をつけるとは何か」という問いを出し、これをさきにみたデルポイの箴言(129A)に関連させて、議論を展開していくことになる。そしてその過程において、「自身」とは何かを追求し、「なんじ自身を知れ」の解釈を深化するわけであるが、しかしその成果は、

「自身を知らなければ、自分自身のもの、自分に付属するものはわからず、自分のものがわからなければ、また他人のものもわからないだろう。他人のものがわからなければ、国家社会のこともわからないだろう」(133C～E)

という一連の問答のなかに消化、吸収されてしまうのである。そして最終結論としては、むしろ、

「きみがきみ自身のためにも、また国家のためにも用意しなければならないのは、何でも自分のしたいと思うことをする自由とか、支配的地位とかいうものではなくて、ただ正義と節制(思慮の健全さ)なのだ」(134C, 135B)

というような勧告に到着することになる。このような「正義と節制」のすすめは、通常「プロトレプティコス・ロゴス」(学と徳をすすめるの論)と呼ばれている文章の定式なのである。(1) つまりこの対話篇の大筋は、このようなプロトレプティコス・ロゴスとなるわけであって、それはこの後半部においてはっきり見られるわけである。そして「自己自身を知る」ということは、ここに求められている「節制」にほかならないというのが、全体の議論の大前

提におかれているのである(131B, 133C)。つまり「自己自身を知る」ということは、ただ心理的事実として観察され、論理的分析の対象として興味をもたれるだけのものではなくて、また道徳的努力の目標として、自分をうっかり忘れてしまうことなく、いつも自分に気をつけ、コントロールがきいているような、つまり思慮が健全にはたらいている精神のあり方、生の状態が、特別の道徳的な価値と意味をもつことになると言われているのである。

「したがって、きみはまず自分で徳を身につけなければならないのだ。そしてこれはきみだけに限られることではなく、いやしくも個人として、自分自身と自分のものを支配し、これの面倒をみるにとどまらず、また国家と国家のことがら(国事)とについても、支配し面倒をみることをしようとする者は、そうしなければならないのだ」(134C)

という、プロトレプティコス・ロゴスの結語とも見られるものを導出する過程においても、一身一家のこと(133E)から国家社会のことまで、これを行うのには、自知(克己節制)をもとにした道徳的努力がなければならないことが強調されているのである。

三

かくてこの対話篇は、その結論に即して見れば、学と徳に心をむけさせるためのプロトレプティコス・ロゴスの性格をもつと言うことができるだろう。しかしこれを前半について見れば、後半における如きプロトレプティコス・ロゴスの積極的展開を認めることはできない。そこには後半の議論を可能にするための地ならしとして、むしろ否定的、破壊的な議論が目立つとしなければならない。政界に活躍することを夢みているアルキビアデスに対して、その野心をうち砕き、無知の自覚へと導こうとするソクラテスの吟味が主となるわけである。それは問答における両者の攻防戦として、いくつかの波瀾をふくみ、全体として起伏のある眺めを与える。最初の部分(103A～

106A)は、全篇の序とも言うべきものであって、ソクラテスのアルキビアデスに対する愛の特異性と、かれがこの恋愛の勝者となり得る利点はどこにあるのかという疑問が、ひとつの謎として、その解明を以下に期待させることになる。

問答はアルキビアデスが政治に志し、近く国会に出て、その審議に加わり、助言あるいは提案を行うかも知れないという状況を前にして、いったい何について助言し、提案しようとするのか、むろん自分の知っていることについてであるが、しかし彼はいったい何を知っているのかという形で展開される。議会が建築や衛生について審議しているときには、よい助言や提案は、その専門知識をもっている者から得られるだろう。アルキビアデスにそれが期待されるのは、何の審議が行われているときのことなのか。それは例えば戦争と平和について、相手と時に応じて、そのどちらがよいかを審議するような場合がそれだと、アルキビアデスは答える。しかし「どちらがよいか」という選択は、結局において「どちらが正しいか」の選択であり、「どちらが有利か」の選択であろう。しかしアルキビアデスは、正不正について、利害善悪について何を知っているのか。何も知ってはいないということが、ソクラテスの吟味によって暴露される(106C～119B)。

しかしアルキビアデスは、ほかの連中だって自分と同じこと、何も知らないけれども、それでも国家のことをあれこれ論議し、実行しているのだから、何もかまうことはないと言って、ソクラテスの勧めに従うことを肯(がえ)んぜず、すぐに学に志すことを承知しようとはしない。ソクラテスはそこで、アテナイ社会のつまらない連中だけを相手にするようなことではいけない、もっと大志をいだき、スパルタやペルシアを競争相手にして、かれらに劣らないように自分を向上させなければならないと言い、一種の雄弁をふるって、スパルタ王やペルシア王の系譜、素質、教育、富や権勢などを美々しく描き出す。これは劇中における合唱や舞踊の面白さに対応するものと言うことができるだろう(119B～124B)。

アルキビアデスもソクラテスの雄弁に圧倒されて、その頼むべきは家柄や富ではなく、よく勉強し、知恵と技術とを身につけるほかは、スパルタ王やペルシア王に対抗して優位に立つことはできないことをさとる。つまりここにおいてかのデルポイ箴言が思い出され、自己の不足に気づかされることになる。後半のプロトレプティコス・ロゴスへの準備がようやくでき上るわけである(124B)。

しかしながら、自己の不足に気づいて、自分を向上させ、すぐれたよき人になろうとしても、その「よさ」とか「すぐれた」とかいうのが、いったい何であるかはすぐにはわからない。それは「かしこさ」であり、「能力」であると一応は答えられるが、しかし何についてのかしこさ、何についての能力なのか。政治家志願のアルキビアデスは、それは支配の能力と答えるが、それもまた簡単ではない。それは国家の一員として、国政に参与している人たちの支配、かれらのために妙案を出す能力あるいは知識とまでは考えられるが、しかしその助言、その提案は何についてなのか。国の政治をよくし、その安全を保つためのものでなければならぬ。しかしそれはどういうことなのか。アルキビアデスは国民の親和ということを言うが、ソクラテスはそれが国民の「考えあるいは思わくの一致」にもとづくものではないかと問いながら、その間の矛盾を指摘して、アルキビアデスを追いつめる。そしてそこから後半のプロトレプティコス・ロゴスが始まるのである(124B～127D)。

四

しかしこれらの内容は、ソクラテスとアルキビアデスとの恋愛関係という全体の枠組のなかで、どう考えられたらいいのか。その間にどういう結びつきがあるのか。ソクラテスの愛の告白、自分ひとりだけがアルキビアデスの真の恋愛者なのだという言葉は、

「きみがアテナイの民衆によって腐敗させられ、いまよりも醜くなるようなことがないかぎり、ぼくは決してき

みを見捨てるようなことはしないだろう。というわけは、ぼくがいちばん恐れているのは、そのことだからだ。きみが残念にも、民衆の恋人となって、腐敗させられはしないかということだ」(132A)
というようにつづけられているが、同じこの懸念は、この対話篇の最後においても、
「きみの生れつきについては、何の不信ももたないのだけれども、この国家社会の影響力を目にすると、ぼくもきみも負けはしないかと、ぼくは心配なのだ」(135E)
と、くりかえしのべられている。ソクラテスは恋愛のライバルとして、アテナイという国家、あるいはアテナイの民衆というものをもっていたわけである。そしてアルキビアデスは、この恋仇(アンテラスタイ)の間で、必死に争われていたのである。ソクラテスのプロトレプティコス・ロゴスによる説得は、そういう緊張した状況における必死の説得だったとも言える。しかし社会の圧倒的な影響力に抗して、一私人ソクラテスが何をなし得たか。歴史的人物としてのアルキビアデスの実際の言動については、トゥキュディデスの記録があり、その他にもプルタルコスなどによって、いろいろのことが伝えられている。ソクラテスは敗者となり、アルキビアデスはペロポンネソス戦争の拡大について、また祖国アテナイの敗戦に対して、重大な責任をもつ者として、戦後に非難攻撃の的にならねばならなかった。そしてソクラテスの死さえも、アルキビアデスに対する教育責任の追及が一因をなすとも考えられたのである。

しかしながら、アルキビアデス問題のこの重大さから考えると、本篇はなお軽く浅い取扱いとして、われわれに不足を感じさせるだろう。『饗宴』におけるアルキビアデス演説は、アルキビアデスに対するソクラテスの関係を、その内面に立入ってもっと深く掘り下げることをしている。つまりアルキビアデスは、ソクラテスとアテナイ民衆との間で、あっちへ引っ張られたり、こっちへ引き寄せられたりするだけの、言わばでくの棒のような、自己を欠いたまったくの外部的な存在としてではなく、むしろ政治的権力への道か、ソクラテスの教える徳と知恵を求める

生き方かの、迷いと疑いを自己自身で内心にもつ人物として、その内部の葛藤が語られている(216A)。またしたがって、一種のソクラテスのための弁明としても、多大の説得力をもつと言わなければならないだろう。これに対してこの『アルキビアデス I』は、アルキビアデス問題への答としては、なおも弱く不満足なものであると言わなければならないだろう。ここからして現代の学者が、この作品を疑わしきもの、偽作ではないかと考えるわけも首肯されないではない。[2] 本篇(114B〜117B)における「正」と「美」と「善」(利益)との相互同一性についての論証は、古代注釈家の興味をひいたようであるが、[3] これらの論理は、『ゴルギアス』(474Csqq., 495Csqq.)や『プロタゴラス』(351Esqq., 358Bsqq.)などの関連のことがらについての問答にくらべるなら、あまりに簡単すぎるとも評されるだろう。しかしながら、『饗宴』とか『ゴルギアス』とか、あるいは『プロタゴラス』とかいう、プラトンの傑作に属する作品だけを取って、これの水準に達しないものは、すべて偽作であるという風に断定してよいかどうかは疑問である。初期作品とか、[4] 習作とか考えられるものにおいては、不足があっても仕方がないとも考えられるからである。われわれはこれを間違いなくプラトンの作品であると断定することもできないが、またしかしこれをすぐ偽作ときめつけることもできないように思う。むかしの新プラトン派の学者たち、プロクロスやオリュンピオドロスは、これをプラトン著作のうちでも、プラトン哲学への入門書として特に重要性をもつと考え、これが注釈書をあらわしていて、それは今日に伝えられている。[5] 思想内容からいうと、本篇には非プラトン的な内容のものは含まれていない。この点は、この対話篇に対して批判的な学者も、一応は認めていることなのであるが、その当り前すぎる内容がかえって疑惑を招くとも言えるだろう。しかしわれわれ自身、あるいは人間を「心」であるとする議論や、眼が眼を見るという例を用いての自知の究明などを、やはりこの篇だけの新しい内容と見なければならないだろう。もっともこの新しさは、学者の論争では、プラスにもマイナスにもなるのであって、この新しい論点がプラトンの他の作品で、なおくわしく取扱われていない点が、一方の学者たちから疑問視されるだろう。しかしまた他方から

すれば、このような新しい冒険は偽作者によってはかえって回避されたであろうから、とにかく故意の偽作という疑いは消えるとも考えられるだろう。

本篇の副題としては、「人間の本性について」というのが知られている。これがロマ時代に既にある程度まで定着していたらしいことは、トラシュロスの四部作形式によるプラトン全集にも、この副題が併用されていたらしいことからも知られる通りである。(6) 恐らくこの対話篇のなかの「人間はすなわち心」という人間規定にもとづくものであろう。キケロの『トスクラ談話』第五巻(一四の七〇)を見ると、ちょうどそのデルポイ箴言解釈が利用されている。(7) 恐らくこの対話篇は、その箴言解釈をめぐる人間規定によって、特別の興味をもたれ、その関連で一般に読まれたのかも知れない。後のネメシオスは、ちょうどこの副題と同じ名前の書物(*De hominis natura*, I)のなかで、「人間は身体を使用する心そのものである」(8) とするのを、プラトンの主張であると記しているのである。だから、この副題はその後の歴史的影響を考えると、(9) 特別の意味をもつものとして、容易に動かすことができないと考えられるだろう。しかしこの対話篇そのものに即して考えるなら、もっと別の副題をつけた方がよいのかも知れない。またこの対話篇は、分類上ソクラテスの産婆術を見せるもの(マイエウティコス)とされているが、これも適切かどうか疑問がないではない。アルキビアデスが自分の考えを生み出し、まとめるのに手だすけするというより、むしろアルキビアデスの考えを吟味にかけ、これをアポリアーに追いこみ、それから一転してプロトレプティコス・ロゴスを展開するものと見るのが本当とも考えられるからである。

(1) プロトレプティコス・ロゴスについては、拙著『哲学初歩』一九八ページ以下、『学問論』一—二章など参照。くわしくは拙稿「プロトレプティコス」—『哲学研究』(昭和一三年一一月、昭和一四年一〇月)もしくは『田中美知太郎全集』第五巻にあり。

(2) これを偽作ではないかと疑ったのは、かのE・ツェラー以来ヴィラモヴィッツ・メーレンドルフ、A・E・テイラー、

W・イェーガー、P・ショリイなどがあり、これを真作とする者は、G・シュタルバウム以来、G・グロート、R・A・アダム、M・クロワゼ、R・S・ブラックなどがあり、特にまたP・フリードレンダーが、これの弁護に精力的な努力をしている。このほか中立的な意見もあり、プラトンが全体に目を通しているとか、一部分はプラトン自身の手になるとか考えられている。一例、Panela M. Clark の文献参照。

(3) 古注、オリュンピオドロスの当該箇所を見よ。

(4) C. Ritter, *Untersuchungen über Plato*, 1888, S. 89 によると、もしこれが真作なら、その文体的特色は、『饗宴』と『テアイテトス』との間ということになるという。もしそうなら、初期作品という想定は消去されなければならないだろう。事実、「神に似る」(133C)や「不正な行為をする場合は、神なき闇黒に眼を向けているのであるから、それに似た行為をすることになる」(134E)などという言い方は、『テアイテトス』(176D～177A)の考えを思い出させるものがあると言わなければならないだろう。ただし、この篇の他の部分の議論はむしろ初期的と言うべきものかも知れない。しかしそれは文体と内容の不一致ということになって、偽作の疑いを濃くすることになるだろう。

(5) プロクロスもオリュンピオドロスも、この対話篇におけるデルポイ箴言の解釈を重視し、そこに全哲学、特にプラトン哲学の「アルケー」(はじめ)があるとして、そのことを注釈書の序のところでのべている。いずれもL. G. Westerink のテクストの「プロクロス」二ページ、「オリュンピオドロス」六ページをみよ。なおプロクロスの注釈は116Bまでしか現在は残っていないが、オリュンピオドロスのものは、ほぼ全篇が残っている。これは各章句についての注釈で、現在のそれに近いと言えるかも知れない。

(6) Diogenes Laertios, IV, 59.

(7) Cicero, *Disputationes tusculanae*, V, 24, 70 に haec tractanti animo . . . exsistit illa a deo Delphic praecepta cognitio, ut ipsa se mens agnoscat coniunctamque cum divina mente se sentiat . . . . とある。

(8) Migne, P. G., 40, 505 A～B.

(9) これについては J. Pépin, *Ideés grecques sur l'homme et sur dieu*, 1971, 1^{er} partie, "que l'homme n'est rien d'autre que son âme"—la tradition du 1^{er} Alcibiade. 参照。

文献

A　テクスト

古くは、

I. Bekker, *Platonis opera*, VI, London, 1826.

F. Ast, *Platonis opera*, VIII, Leipzig, 1825. 〔羅文対訳つき〕

Platons Alkibiades I. II, (Engelmannsche Sammlung), Leipzig, 1851. 〔独文対訳つき、訳者名なし〕

C. F. Hermann, *Platonis Dialogi*, II, Leipzig, 1914.

があるが、比較的新しいものとしては、本訳の底本となっているバーネット版のほか、

W. R. M. Lamb, *Plato, Alcibiades I*, (The Loeb Classical Library), London, 1927. 〔英文対訳つき〕

M. Croiset, *Platon, Œuvres complètes*, I, (Budé), Paris, 1920. 〔仏文対訳つき〕

がある。

B　訳書は右の Croiset, Lamb のほか、

F. Schleiermacher, *Platons Werke*, II, 3, Berlin, 1861.

H. Müller und K. Steinhart, *Platons Sämtliche Werke*, I, Leipzig, 1850.

O. Apelt, *Platon, Sämtliche Dialoge*, III, Leipzig, 1922.

L. Robin, *Platon, Œuvres complètes*, II, Paris, 1950.

C　注釈書

Proclus, *Diadochus, Commentary on the First Alcibiades of Plato*, critical text and indices by L. G. Westerink, Amsterdam, 1954.

Olympiodorus, *Commentary on the First Alcibiades of Plato*, critical text and indices by L. G. Westerink, Amsterdam, 1956.

右はいずれも、ギリシア文テクストの校訂本である。近代のものとしては、

G. Stallbaum, *Platonis opera omnia*, V, 1, Gotha, 1857.

D　研究書

R. Adam, "Über Alkibiades I", *Arch. f. Gesch. der Philos.*, N. F. VII, 1901.

H. Arbs, *De Alcibiade I qui fertur Platonis*, Diss. Kiel, 1906.

R. S. Bluck, "The Origin of the Greater Alcibiades", *Classical Quarterly*, 47 (1953).

P. M. Clark, "The Greater Alcibiades", *Classical Quarterly*, 49 (1955).

M. Croiset, *op. cit.*, pp. 49 sqq.

P. Friedländer, *Platon*, II, Berlin und Leipzig, 1930.

——, *Der Grosse Alkibiades*, Bonn, 1921–23.

——, "Socrates enters Rome", *American Journal of Philology*, 66 (1945).

J. Pavlu, "Nachträge zum pseudoplatonischen Alkibiades", *Mitteilungen des Vereins klassischer Philologen in Wien*, 6 (1929).

E. d. Strycker, "Platonica I, L'Authenticité du premier Alcibiade", *Les Études classiques*, 11 (1942).

A. E. Taylor, *Plato, The Man and His Work*, London, 1926.

『アルキビアデス II』解説

川田　殖

登場人物

ソクラテス(Socrates)

アルキビアデス(Alcibiades)　『アルキビアデス I』および(おそらく)本篇に登場してくるアルキビアデスはおよそ二〇歳ごろ(『アルキビアデス I』105B)。いうまでもなく、ペロポンネソス戦争期において、祖国アテナイを敗戦に導いた立役者の一人である。その生涯についてはプルタルコス「アルキビアデス伝」(以下 Plu.)、その歴史的役割についてはトゥキュディデス『歴史』(以下 Th.)第五—八巻、クセノポン『ギリシア史』(以下 Xe.)第一—二巻にくわしい。

父母ともに名門で、父クレイニアスの祖先はトロイア戦争の勇将アイアスの子エウリュサケスを経てゼウスにつながり(『アルキビアデス I』121A)、母デイノマケは、前七—五世紀、クレイステネスなどアテナイの代表的政治家を輩出したアルクマイオン家に属し、ペリクレスの母もこの一統であった(Plu. I. 1)。父はペルシア戦争時、アルテミシオンの海戦(前四八〇年)の最大の功労者であったが、のち、『アルキビアデス I』(112C)にもあるように、コロネイアにおけるボイオティア亡命民との戦で戦死(前四四七年、Plu. I. 1)、以後幼児アルキビアデスは、ペリクレスとその親戚アリプロンとの後見のもとに育てられた(『アルキビアデス I』122B)。幼年期以降、読み書き、弾奏、角力などの教育をうけたが、笛は自由人にふさわしくないとしてこれを避けたという(Plu. II. 4;『アルキビアデス I』106E)。さいころ遊び(『アルキビアデス I』110B;逸話 Plu. II. 2-3)、うずらたたき(Plu. X. 1;『アルキビアデス I』120B)などの遊戯にも凝ったらしい。

その美貌については『アルキビアデスⅠ』(104A)その他(Plu. Ⅰ. 3)でひとしく強調され、のちにソクラテス告発の中心人物となったアニュトスなど(Plu. Ⅳ. 5)、求愛者が群がっていたという。その富についても有名で、富豪カリアスの娘ヒッパレテを莫大な持参金つきでめとり(Plu. Ⅷ. 2)、七台もの馬車をオリュンピア競技に出場させ(前四一六年、Plu. Ⅺ. 1; Th. Ⅵ. 16. 2)、公けのための金ばなれもよく(Plu. Ⅷ. 2, Ⅹ. 1)、人びとの人気をさらった。また武勇についても、前四三二—四三一年ポテイダイアの戦、のち前四二四年デリオンの戦に出陣したことが、プラトン『饗宴』(220D～221A)に記されている。そして同書にはこれらの戦におけるソクラテスとの共同およびそれ以後におけるソクラテスとの関係が、アルキビアデスの回想のかたちで書かれていること、周知の通りである(215A～219D)。彼にはまた、人なみすぐれてその場の必要事を見つけ出し、それを会得する才が具わっており、話の内容だけでなく、それにふさわしい語句をどう使うかをも工夫する弁舌の才があった(Plu. Ⅹ. 3)。家柄、富、武勇、弁舌にこのような条件を具えた彼は、野心家におだてられて(Plu. Ⅵ. 1)、「近々のうちにアテナイの国会議員として打って出たい」(『アルキビアデスⅠ』106C)と考えるに至っていたのである。本篇は、おそらくは『プロタゴラス』篇同様、この当時のアルキビアデスを登場させている。

彼はその後まだ若くして政界に入り、多くの政治家を凌いだが、最大のライバルは富裕で穏健民主派の将軍政治家ニキアス(前四七〇—四一三年ごろ)であった。ペロポンネソス戦争開始後一〇年にして和議が結ばれ(前四二一年)、人びとがこれを「ニキアスの平和」と呼んで喜んでいるのを知ると、アルキビアデスは、自負心にもとづく対抗意識から、講和条約の破棄をもくろんだ(Th. Ⅴ. 43. 2)。すなわち翌四二〇年、彼はスパルタの使節を欺いてアルゴス人と同盟を結び(Th. Ⅴ. 43. 3-47. 12)、平和後のスパルタに脅威を与え、こののち直ちに将軍に任ぜられ、マンティネイアをもこれに加え、マンティネイアの会戦を引き起させ(Th. Ⅴ. 64. 4-74. 3)、ペロポンネソス半島全体を激動の坩堝に陥れた。

しかし彼がアテナイの運命に決定的な関わりをもつことになったのは、いわゆるシケリア遠征決定を契機としてである。すでに開戦第五年以降アテナイはシケリアの地方的紛争に介入し、これを勢力下に入れようとしていたが、前四一五年春、またも同地方の内紛に介入する機会が訪れた(Th. Ⅵ. 6. 1-8. 1)。アルキビアデスはアテナイ人の宿願をあふり、民衆を煽動して、平和派のニキアスをもこれにまきこみ、ラマコスをも加えて、三将軍の指揮のもとに出陣を決定させた(Th. Ⅵ. 8. 4

–25. 2)。しかしその直前、いわゆるヘルメス柱像破壊事件およびエレウシス秘儀冒瀆事件が起り、アルキビアデス達に嫌疑がかけられたが、彼は反対者の策謀によって民会を説きふせえぬまま出征した(Th. Ⅵ. 27. 1–28. 2)。しかしシケリアでの開戦後まもなく、アルキビアデスは祖国の法廷に召喚されたが(Th. Ⅵ. 53. 1–3)、途上トゥリオイで下船、亡命した(Th. Ⅵ. 61. 6)。故国では彼に死刑の宣告が下されたが(Th. Ⅵ. 61. 7)、本人はスパルタに現われ、シケリアに援軍を送りアテナイ軍を打つとともに、また本土においてもアテナイ北方のデケレイアにとりでを築きアテナイを攻撃するよう、スパルタ人に進言した(Th. Ⅵ. 88. 9–92. 4)。アルキビアデスなきあと、シケリアのアテナイ軍は、ラマコスの戦死、ニキアスの消極策に加うるに、スパルタ軍の来援を得て次第に作戦上の主導権を握ったシュラクサイ軍のため(Th. Ⅵ. 104. 1–Ⅶ. 6. 4)、苦戦に陥り、デモステネスを将として来援した第二次アテナイ遠征軍(Th. Ⅶ. 16. 2–17. 1, 20. 2–3, 31. 1–5, 35. 1–2, 42. 3–5)も頽勢を挽回し得ず(Th. Ⅶ. 43. 1–49. 4)、惨怛たる敗北に終った(Th. Ⅶ. 59. 1–87. 6)。

　こののち各地でアテナイに対する離叛が起ったが、アルキビアデスもこれに加担し、同時にスパルタの将軍に加勢してアテナイ軍に大損害を与えた(Th. Ⅷ. 12. 1–14. 3)。しかしその合間にスパルタ王アイギスの妃と通じ(Plu. XXIII. 7)、王の憎しみと高官のねたみを買って、命をつけ狙われるようになった(Plu. XXIV. 2)。このことに気づいたアルキビアデスは、ペルシアの小アジア沿岸の地方軍指揮官ティッサペルネスのもとに走り(Plu. XXV. 1)、スパルタの勢力をアテナイの勢力とともに消耗させて、事をペルシアの有利に展開させよと献策し(Th. Ⅷ. 45. 1–46. 5)、その歓心を買った(Plu. XXV. 2)。たまたま苦境に落ちこんでいたアテナイは、このティッサペルネスを最も怖れていたが、アルキビアデスは、前四一二年、アテナイのほぼ全海軍の集まるサモス島に使を送り、ティッサペルネスを味方につけられそうだという期待を抱かせる(Th. Ⅷ. 47. 1–2)。サモス島の一派は、アルキビアデスを受け入れるための条件づくりという口実で民主制変革のため、アテナイにペイサンドロスらを遣わし(Th. Ⅷ. 49)、彼らは大衆を説得して四〇〇人支配(前四一一年六—九月)をうち立てる(Th. Ⅷ. 53. 1–54. 4, 65. 1–70. 1)。しかし当のサモスでは形勢が逆転し、革命は失敗して民主勢力が大勢を占め(Th. Ⅷ. 73. 1–77. 1)、アテナイとサモスの兵士たちとは正面衝突しそうになる。アルキビアデスはこれをなだめてアテナイ滅亡の危機を回避させたばかりでなく(Th. Ⅷ. 86. 1–8)、ヘレスポントスのアビュドス沖にミンダロスの率いるスパルタ艦隊を破り(前四一一年、

Xe. I. 1. 6–7)、さらにキュジコス沖にスパルタのほとんど全艦隊を制圧してアテナイの制海権を回復した(前四一〇年、Th. VIII. 99. 1–107. 2; Xe. I. 1. 11–23)。その上彼はペルシア王の代官パルナバゾスのために苦戦していたトラシュロスをアビュドスに助け(Xe. I. 2. 15–17)、カルケドンを攻撃し(Xe. I. 3. 1–3)、対抗するパルナバゾスを破り(前四〇九年夏、Xe. I. 3. 4–10)、ビュザンティオンを攻囲するなど(前四〇八年、Xe. I. 3. 14–21)、数々の戦功をあげ、前四〇七年、アテナイに帰還し、大歓迎をうけ、陸海両軍の全権将軍にえらばれた(Xe. I. 4. 10–19)。そして敵軍の中を通って堂々とエレウシスへの祭列を往復させ名声を高めたのち(Xe. I. 4. 20)、百隻の船をもってアンドロス島を襲ったが(Xe. I. 4. 21–23)、のち募金のためカリアまで出張中、部下の失策により多数の軍艦と兵士を失った(Plu. XXXV. 4–6)。そのため政敵に民会で中傷され(Xe. I. 5. 16–17)、民衆の怒りをかって逃がれ、傭兵を集めてトラキアに移った(Plu. XXXVI. 3)。

その二年後(前四〇五年九月)、アテナイの残存全艦隊は、アルキビアデスの忠言を無視して(Xe. II. 1. 25; Plu. XXXVII. 1)、ヘレスポントスのアイゴスポタモイで、リュサンドロスの手にかかって全滅、まもなくアテナイは陥落、艦船は炎上、町の長壁はうちこわされて(Xe. II. 3. 11)、無条件降伏をした(前四〇四年春、Plu. XXXVII. 3)。アルキビアデスはスパルタ人を怖れてビテュニアに移り、ペルシア王アルタクセルクセスのもとに赴こうとし、途中プリュギアにいたパルナバゾスを訪ね機嫌をとり結んだ(Plu. XXXVII. 3–4)。そのころアテナイに成立した「三〇人政権」の首領クリティアスはリュサンドロスにアルキビアデスの危険性を通告したが、たまたまスパルタからアルキビアデスを殺せとの密書がリュサンドロスのところにとどいたため、リュサンドロスはパルナバゾスにこのことを指示する(Plu. XXXVIII. 3– XXXIX. 1)。プリュギアの一村で芸妓ティマンドラと寝ていたアルキビアデスは、刺客の一団に遠巻きにされ、家に火を放たれ、矢の雨を注がれて斃れた(Plu. XXXIX. 2–5)。まことに波瀾万丈の生涯であった。

トゥキュディデスはペリクレスをして政治家たる者の具えねばならぬ要件を、「なすべきことを見抜き、これを言葉に出して説明し、ポリスを愛して、金銭の誘惑にまけないこと」(II. 60. 5)と説かせている。この四つの条件で考えると、アルキビアデスは、それぞれの状況の中で有効の手段を見つけ出し、これを他の人に説いて聞かせることは上手であったが、おのれの功名心が国家への忠誠心より強く、金銭の誘惑を斥けることができなかったために、彼は情勢判断と先見の明において

すぐれていたにもかかわらず、「正しきこと、なすべきこと」の選択、価値判断において誤まったということもできよう。(これについては田中美知太郎『ツキュディデスの場合』一九七〇年、筑摩書房、第八章、三三七―三七三ページ参照)。以上のようなアルキビアデスを知っていた当時の読者にとって、アルキビアデス的人間の問題性をつく本篇は、『アルキビアデス I』と並んで、強い迫真性をもつ対話篇であったに違いない。

一

ディオゲネス・ラエルティオスの報ずるところによると(Diog. L. II. 108)、ソクラテスの弟子、メガラ派の祖エウクレイデスは『アルキビアデス』という書物を書いたという。また同じくソクラテスの弟子でアテナイのスペットス出身のアイスキネスにも同名の書があり、若干の断片が残されている。[1] これらの書の詳細な内容は不明であるが、その中心にソクラテスとアルキビアデスの出合いがあったことはまず疑いのないところであろう。一世の驕児アルキビアデスは、自分の資質や外面的なものにたよってみずからを幸福だと思っていたが、知るべき最大の事柄について無知であったために、かえって不幸になったというテーマは、これだけでも――ソクラテスの弟子たちの目からするならば――実例による一種の哲学へのすすめ(プロトレプティコス)ともなるからである。のみならずソクラテスの弟子たちが、この人物を選んだことの背後には、師がアルキビアデスのごとき人物と交わっていたというかどで、青年に悪影響を及ぼす者として訴えられたということに[2]対する一種の弁明(アポロギア)的動機もまた働いていたかも知れない。[3]

プラトンの名に結びつけられているこの『アルキビアデス II』も、『アルキビアデス I』同様、これらの興味ある人物間の対話を主題とするものであるが、古代からその価値が認められて、前三世紀以降のアレクサンドリアの文献学の検討にも耐え、ローマ帝政初期のプラトン学者トラシュロスによってプラトンの全集がまとめられた時、

『アルキビアデスⅠ』とともに、その四部作集(テトラロギア)に入れられ[4]、こんにちわれわれの手に伝えられているのである。もっとも紀元後三世紀初頭の人アテナイオスは、ある人びとが本篇をクセノポンのものとしていることを紹介しているが[5]、これには語学的にも内容的にも異論があり、その後積極的な支持者を得ぬままに近世に至った。

二

近世に入って文献学的研究が盛んになった一九世紀前半には、この書がプラトンの真作であるかどうかについて議論が起った(真偽論)。その筆頭は、『アルキビアデスⅠ』とともに本篇をも偽作であるとした、シュライエルマッハーである[6]。これについてはアストもまた同意見であった。しかし文献研究がさらに進むにつれて、その後のドイツの――たとえばゾーヘル[7]、ヘルマン[8]、シュタインハルト[9]、シュタルバウムといった[10]――学者たちによる用語・字句・文体の調査研究の結果、次第に『アルキビアデスⅠ』はプラトンの真作、本篇は他人の作とされるようになった。これに対して英国のグロート[11]は、単なる字句文体の研究からこの二つの対話篇を区別する根拠はかならずしも決定的ではないことを指摘し、プラトンの自由さをもっと大胆に認めるべきであるとして、伝統的立場をとった。つまり後代傑作といわれるもののほかに、それより見劣りのするものであるという理由でそれを偽作とするのはおかしいというのである。

これは一種の良識論的立場ともいうべきものであろうが、上述ドイツの学者たちの本篇に対する否定的評価は、同じくドイツの学者の文体統計法――その先鞭は英国のキャンベル[12]であるが――の適用によって実証的基礎を揺がされた。すなわちリッター[13]はシュタルバウムなどの偽作説はいくつかの字句にあとづけられるけれども、文体統計法から本書を偽作であると断ずるのは難しい、というのである。こうして問題は本篇の内容とそれの扱い方の点検に重点がしぼられることになる。

三

それではその内容は何か。これについては古くから本篇に「祈願について」というサブタイトルがついていることが手がかりになるかも知れない。祈願がギリシアの宗教においても重要な役割を占めてきたことはいうまでもないが、それはホメロス(例、『イリアス』第一巻三七—四一行)にも見られるように、供犠をささげて自らの思うところ願うところを神に語り、その実現を要求することをその骨子としており、その思い・願いの妥当性・真実性いかんについては、長いあいだ特に反省されずに来たというのが実情であった。このホメロスなどに現われる擬人神観を仮借なく批判したクセノパネス、これより進んで哲学的批判をへた神観の示唆を与えたヘラクレイトス、さらには伝統的国民宗教とは別に、個人的・教団的宗教を学問的精神と結びつけようとしたピュタゴラス——といった先蹤ののちに、祈る者が無造作におのれの欲望を絶対化してその実現を神に願い、その結果、みずからに破滅をまねくおそれのあることを指摘し、その根元が、最大事についての自己の無知と、神性についての軽薄な理解にあることを警告したのは、ソクラテスであった。

ソクラテスの祈願の態度についてはクセノポンの『思い出』第一巻(三の二—三)に、またその実例については『パイドロス』の末尾(279B〜C)などに見ることができるが、これを通してわれわれは、神が、捧げ物をではなくて、真実なたましいのあり方をこそ見給うことを信じるとともに、人間としての自己の限界と無知に目ざめて、この人間がこの神に祈願すべき、つつましき祈願をささげる人ソクラテスの姿を垣間見ることができる。

しかしあまりサブタイトルにこだわるのは正しくないかも知れない。それは作者自身がつけたものではなく、後代の編集者の手になるものであり、しばしば不適切な場合があるからである。むしろ全体をよく読めば、問題はけっしていわゆる宗教的儀式の正当性いかんというようなことにとどまるものではなくて、やはり『アルキビアデス

I』同様、人生の中で最も大切なものについての無知がいかに危険なことであり、これを知ることなしには、他のいかなるものも善かつ有益にはならないことを、一歩一歩問答を通して、さし示したひとつの哲学のすすめととる方が適切であるように思われる。

そこには精神異常の検討から始まって、思慮と無思慮の定義の試みを含む点、プラトンのいわゆる「ソクラテス的対話篇」の特長を伝え、ホメロス解釈のくだりは、『プロタゴラス』におけるソクラテスの即興的シモニデス解釈を思わせるとともに、また神が正しきに目をとめ、贈り物などによって籠絡されるものではないと力説するくだりは、『国家』(II. 365E sqq.)および『法律』Xの神学論(ことに908A〜909A)を想起させ、『アルキビアデスI』同様、これをプラトン自身の作としても、初期のものに属するのか、後期のものに属するのか、判断に迷わせる一面を含んでいる。しかしかりにこれをプラトン以外の人の手になるものと疑うなら、構成に若干のゆるみと、表現に若干の異質的要素を含んでいるとも見られるが、しかしソクラテスの精神・プラトンの思想を知悉した人の作ではないかと考えざるを得なくなる点が最も顕著であることは否定できない。

四

以上のような内容の検討は、本篇の作者を考える際の手がかりを与えるであろう。初めのところで本篇の作者を(一)クセノポンとする説が古代にあったことにふれたが、このほかに本篇に(二)キュニコス派・ストア派的傾向を認めようとする学者がある(K・ヨエル[14]、H・レーダー[15])。文中の「無思慮な者はすべて精神異常である」という主張、および祈願の態度が、これらの派のものだというのである。またこれとは逆に、懐疑派の色彩を帯びた(三)アルケシラオスの系統のものだとする学者もある(ビッケル[16])。文中の「知っている」と「知っていると思っている」との区別などをその根拠にするのである。しかしこのような部分的なことだけで本篇をこれらの人のものと断定す

るのは早計なように思う。祈願の態度の簡潔さは前述のごとくソクラテスその人のものであったと考えられるし、また「知」と「思いなし」との区別に至ってはプラトンの「ソクラテス的対話篇」から中期の対話篇を貫いて随所にこれを見出す、ソクラテス・プラトンの重要な主張だったからである。こう見てくるとむしろこれを素直にプラトンのものとするか、一歩ゆずってもこれを上述諸派の思想的環境の中にありながらも、アカデメイアことにソクラテス・プラトンの正統をふむ人の手になるとする方が自然ではないだろうか。またその時代についてもあまりはっきりしたことはわからない。ある学者(17)はマケドニアへの言及もあり、アレクサンドロス王も祈ったという神アンモンを引合いに出し、多識への批判はアリストテレスの創設したペリパトス派への批判であると見て、本篇をヘレニズム時代の作と推定しているが、そこまでいえるかどうか。マケドニアは古典時代にも言及される名前であり、ギリシアにおけるアンモン崇拝はアレクサンドロス大王より古く、また博学への批判はすでにヘラクレイトスにもあったからである。

しかしとにかく著者は当時――そしてこんにちも依然として――彌漫（びまん）しているところの宗教的実用主義の問題性、さらには人生における真に善なるものについて盲目であることの危険性を指摘し、正しき神礼拝の、さらにひいては正しき人生態度への着目をすすめている点において、ソクラテスのこの面を体得している人――その代表者はいうまでもなくプラトン――であるといえよう。無反省に善きもの・正しきものを自ら知っていると誇っている人間のいつわりの安心をつき崩して、信仰において、人生において、真実のものに目をむけさせるプロトレプティコスの精神はここにも顕著であり、さらに具体的には、ソクラテスこそ、才を頼み力に溺れて知らず識らずのうちに破滅に進みゆくおそれのあるアルキビアデスを、問答法によって吟味し、真理の前に謙遜にさせうる唯一の人物であるという構想は、『アルキビアデスI』とも相通ずるプラトン本来のものであると思われる。

またかりに一歩ゆずって、これをプラトン以後――たとえばヘレニズム期――の人の手になるものと考えるなら

ば、思想史的に見て、当時のストア派、懐疑派、ピュタゴラス派、さらには密儀宗教の風潮の中で、『エウテュプロン』に示されているソクラテスの敬虔を出発点とし、『プロタゴラス』に見られる「思慮（フロネーシス）」の分析を通し、さらにプラトン後期の宗教思想をもふまえて、ソクラテス・プラトンの精神が、祈願という、宗教にひろく見られる具体的行為にいかなる光を投ずるかを示し、プラトニズムの宗教思想の一面を示したものとして興味深い。

（1） H. Dittmar (ed.): *Aischines von Sphettos*, Berlin, 1912. Weidmann および P. Oxy. xiii. 88–94.
（2） Isokrates: *Busiris*, 115 参照。
（3） Xenophon: *Memorabilia*, I, 2 参照。
（4） Diogenes Laertios, III, 59 参照。
（5） *Deipnosophistai*, 506 C.
（6） Platons Ausgewählte Werke, deutsch von Schleiermacher, in fünf Bänden (Klassiker des Altertums), München, 1918. II. 151–153.
（7） J. Socher: *Über Platons Schriften*, München, 1820. 112.
（8） K. F. Hermann: *Geschichte und System der platonischen Philosophie*, Heidelberg, 1830. 420–439.
（9） K. Steinhart: *Platons Werke*, I, Leipzig, 1850. 135 ff.
（10） G. Stallbaum: *Platonis opera omnia*, V, 1, Gotha, 1857. 337–345.
（11） G. Grote: *Plato and the other Companions of Sokrates*, 2, London, 1885. 18–19.
（12） L. Campbell: *The Sophistes and Politicus of Plato*, Oxford, 1867. Introduction.
（13） C. Ritter: *Untersuchungen über Plato*, Die Echtheit und Chronologie der platonischen Schriften, Stuttgart, 1888. 88–89.
（14） K. Joël: *Der echte und der xenophontische Sokrates*, I, Berlin, 1893. 554.
（15） H. Raeder: *Platons philosophische Entwickelung*, Leipzig, 1920. 23.
（16） L. Bickel: '*Ein Dialog aus der Akademie des Arkesilaos*', Archiv für Geschichte der Philosophie, XVII (1904), 471–472.

(17) H. Brünnecke: *De "Alcibiade II" qui fertur Platonis Diss.*, Göttingen, 1912. 97.

五 内容梗概

おそらくペロポンネソス戦争もまだ始まらぬある日のことであろう。花冠を手にして神殿に急いでいたアルキビアデスは、ソクラテスに呼びとめられる。アルキビアデスの用向きを知ったソクラテスは、激情にかられて息子たちの災厄を祈願したオイディプスを例にひき、思慮を欠いた祈願がいかなる不幸をもたらすかをさとそうとする。しかし精神異常者オイディプスを自分にひきあてるのは適切ではないとするアルキビアデスに対して、ソクラテスは一緒になって、精神異常と無思慮、また無思慮と思慮、の概念規定とその相互関係を探求して行く(以上第一―三章)。

対話を通して次第に明らかになって行くことは、オイディプスは精神異常というよりは無思慮であり、この無思慮こそ、人を誤まらせて、しばしばおのれに不幸を招くことを神々に祈願させる根元である――ということである。それゆえひとの祈願すべきことはただ、善きものを与え禍いをさけさせ給え、ということでなくてはならない(以上第四―五章)。

アルキビアデスはこれに答えて、一般に無知が諸悪の根元であり、このゆえに祈願の際にもひとはしばしば不幸を招くのだ、と言う。ソクラテスはこれを吟味し、あらゆる無知が諸悪の根元なのではなくて、人間にとっていったい何が最善のことなのかという点についての無知こそがそれである、これに対して箇々の事柄についての無知は時として幸いになることさえある、というパラドックスを展開する(以上第六―一〇章)。

こうした議論を通してアルキビアデスは、現在の自分のように、無反省に自らの祈願をたずさえて神の前に出ることは、祈る事柄自体の是非を吟味せずに、多くの供え物をさえ捧げるならば神が幸せを与えるであろうと誤認し

て身に災いを招いたというアテナイ人の話と同じことであることを認めざるをえなくさせられる。神の喜び給うものは、価高き供物ではなくて、正しい知見に導かれた敬虔なたましいである(以上第一一―一三章)。

ここに至ってソクラテスは、アルキビアデスが人間にとって何が最善かを学ぶまでは神への祈願をさしひかえるようにすすめる。それがこのことの無知に由来する不幸を避ける道であるからである。しかしその学びのためにソクラテスは喜んで協力しようと約束する。喜びに満たされたアルキビアデスは、手にしていた花冠をソクラテスの頭にかぶせる(以上第一四章)。

文献

A　テクスト

J. Burnet, *Platonis opera*, III, (Oxford Classical Text), Oxford, 1905.

F. Ast, *Platonis opera*, VIII, Leipzig, 1825.〔羅文対訳つき〕

G. Stallbaum, *Platonis opera omnia*, V, 1, Gotha, 1857.

Platons Alkibiades I. II, (Engelmannsche Sammlung), Leipzig, 1850.〔独文対訳つき、訳者名なし〕

J. Souilhé, *Platon, Œuvres complètes*, XIII, 2^{e} partie, Le Second Alcibiade, (Budé), Paris, 1962.〔仏文対訳つき〕

W. R. M. Lamb, *Plato, Alcibiades II*, (The Loeb Classical Library), London, 1955.〔英文対訳つき〕

B　訳書は右の Souilhé, Lamb のほか、

H. Müller und K. Steinhart, *Platons Sämtliche Werke*, I, Leipzig, 1850.

F. Schleiermacher, *Platons Ausgewählte Werke*, II, (Klassiker des Altertums), München, 1918.

O. Apelt, *Alkibiades I und II*, (Philosophisches Bibliothek), Leipzig, 1918.

L. Robin, *Platon, Œuvres complètes*, II, Le Second Alcibiade, (Bibliothèque de la Pléiade), Paris, 1950.

C　参考書

上掲テクスト、訳書に附してある序説、および上述の訳者解説の注に示したもののほか、

A. E. Taylor, *Plato, The Man and His Work*, London, 1948^{5}.
P. Shorey, *What Plato Said*, Chicago, 1933.

『ヒッパルコス』解説

河井真

登場人物

ソクラテス（Socrates）
友人　（解説一を参照）

一

この対話篇に登場する人物は、ソクラテスと、その相手となる「友人」との両人だけであって、他に若干の同席者がいたことを思わせる箇所（232B）もあるが、それらは対話の進行にはかかわらない。ところで、いわゆるソクラテス的対話篇の中で、この場合の「友人」のように、登場人物が結局無名のままに終始する例は少ない（たとえば『プロタゴラス』、『饗宴』）。しかも、そういった対話篇では、いわゆる劇中劇が行われ、そこに登場する人物の方がむしろ重要な役割を演ずるのであって、「無名の友人」はいわばその劇中劇をひき出すために登場するに過ぎない。ところがこの対話篇では、この「友人」が終始ソクラテスの相手をつとめる重要な役割をになっている。しかも、彼については、ただ一箇所（225D～226A）で、ソクラテスとの年齢の隔りを示唆する記述が与えられてい

るのみで、他のいかなることも伝えられていない。このようなことは、きわめて異例のことであると言わなければなるまい。その点で、この対話篇に類似するのは、諸家も指摘しているとおり、『ミノス』があるのみである。

また、この対話篇には、古来「利得愛求者」というもう一つの題が付せられている。これはトラシュロス(Thrasylos)によって与えられたと伝えられる副題なのであるが、今日、それらの副題は、対話篇の伝統的な題名とは並置されないのがふつうである。しかるに、『ヒッパルコス』と『ミノス』についてだけは、その副題を主題と並列にかかげるしきたりになっている。詮索するならば、このことも異例として算えられるべきだろう。その間の事情について推し測れば、次ぎのようである。対話篇を題名によって区別するにあたっては、内容によるか、たとえ形式的にもせよソクラテスとの対話の相手として登場する人物名によるか、そのいずれかによっているのだが、後者の方式によるとすれば、この対話篇はヒッパルコスについて語られた部分を含んではいるが、ヒッパルコスその人は登場人物ではないので、『ヒッパルコス』という題名は奇妙なものになる。右のような事情が、「利得愛求者」という副題(実質的には主題)が、この場合に限って並置されて来たことの背景にあったのではなかろうか。そして、いくつかの版本が(たとえばステファヌス版のように)、相手の友人名をヒッパルコス(もちろん、殺害事件のヒッパルコスとは別人)とすることを試みているのも、右の事情を考慮して、題名のつけ方に統一性をもたせようとした苦心のあらわれであろう。

二

それでは、「利得愛求者」をめぐる議論のあらましをみておこう。

利得の愛求者とは、無価値なものごとにまで利得を追求する者である、とされるが、それは彼らが無知なるが故にそうするのであり、何びとといえども、そのものが追求に価いしないと知っていながら、なおそのものに価値を

期待するようなことはしない。したがって、いうところの利得愛求者たるような者は誰もいない(226Dまで)。

また、利得は損害の反対であり、損害は悪であるとすれば、(善は悪の反対であるから)利得は善なのであって、利得愛求者は善を追求する者なのである。ところで、何ぴとといえども、善きものを追求せぬ者はいないからして、すべてのひとは利得愛求者であることになる(227Bまで)。

利得愛求者は、よきひとが追求せぬような利得を追求する、とか、よきひとは損害をもたらすような利得は追求しない、といった主張は意味がない。なぜなら、さきの推論にあったごとく、利得は善なのであって、それが損害(悪)につながるというようなことはあり得ない。こういう主張は、利得の中に、善いものと悪いものとを区別しようとするものであるが、両者が利得である点では区別がないのだから、一方が他方より、より利得である(つまり、より善である)とはいえない(230Dまで)。

利得とは、何によらずより少ないものによって、より大なるものを得ることである、とばかりも言えないのであって、その場合、得られたものはより大なる価値をもつものでなくてはならない。しかし、価値があるということは、追求に値いするということであり、益があるということなのだから、結局それは善であるということに他ならない(232Aまで)。

かくして、すべての利得はひとしく善であるとされ、また、よきひとも、あしきひとも、すべてのひとが利得(すなわち善)を愛求する者であるという結論になる。

三

ところで、右の議論のなかほどで(228Bから229Dまで)、ヒッパルコスの人柄、治績、およびその殺害事件の真相が、ソクラテスの口から語られる。この事件が、前五世紀から四世紀にかけて、アテナイ人にとってよく知ら

れたものであったことは、いくつかの証拠に照らして明かなのだが、それらを綜合し、またこの箇所での記述を踏まえて、ヒッパルコスに関する諸事実を確かめようとすると、いろいろな困難にぶつかる。それについては、補注の形でやや詳しく触れておいたので、ここでは若干の付説をするにとどめたい。

（1）ヒッパルコス長子（筆頭僭主）説は、トゥキュディデスによって誤れる俗説とされる。恐らく伝承の中には、ヒッパルコス長子（筆頭僭主）説と、ヒッピアス長子（筆頭僭主）説とがあり、前者は、事件を解放の義挙とみる見方から生じたものだったであろう。しかし、ヘロドトスは、事件を義挙とみる立場に立ちながら、後者の説をとるかにみえ、『ヒッパルコス』作者は、事件を義挙とは認めないのに、前者の説をとっていることは、われわれを当惑させる。

（2）この箇所で彼の治績として算えられているものの中には、はたして彼自身に帰し得るかどうか疑問があるものもあるが、いくつかの具体的事実を含む主張をみると、まったく根も葉もない事柄ばかりとはいえないだろう。しかし、彼のこのような啓蒙的教化政策は、多分に独善的な彼の性格のあらわれに過ぎなかったようである。そのことからして、彼の人柄を讃えているここでのソクラテスの主張をみると、それをどう理解したらよいのか疑問が湧いてくる。

（3）彼を含む一族の支配が、人々に黄金の時代の生活をもたらした、という説はにわかには採り難い。一族の政権を維持するために、市民の多数の意を得ようとする努力はなされたであろうが、それは多分に表面的なものにとどまったであろう。それを称える作者のことばからうかがえるものは、作者が、支配の形態はどうであれ、実質における日々の安穏な暮しを望む立場にあったということである。ここでは、暴虐な僭主の支配が排斥され、賢明な僭主の支配が賛美されている。それは確かに賢者による支配を称える声には違いないが、哲人政治の理論の一端をここにうかがうことはできない。

（4） 事件の動機について他の史料が伝えるところは、僭主制の打倒という政治的理念によるとするのと、愛のもつれをめぐる僭主個人への復讐の念によるとするのと、二通りの理解が可能であったことを示している。そうすると、籠運びの役をめぐる侮辱の事実も、単に僭主の横暴という僭主制の悪の一端と理解されるか、僭主個人の愛憎のからむ意趣返しとのみ理解されるか、どちらかであることになる。しかし、事件そのものは、これら二つの理解が複合して、二重性をもった動機からして企図されたのではなかったか。いくつかの史料は、そのような形で包括的に理解することを許容するとみられる。ところが、ここで作者が伝えている内容は、まったく独自といってよいほどに特色のあるもので、他の諸史料と併せて包括的に理解することを拒否するかにみえる。これを真相とするためには、よほど強力な他の証拠が必要だろう。作者は、事件が身のほど知らずの者たちの、見当違いの恨みから生じた、と主張するかのようである。

さて、この插話を除く対話全体の展開は、利得愛求者とは何か、という問いに沿って終始している。ところが、この插話は、「友を欺くなかれ」というただ一句に関連してくりひろげられているのであり、前後とのつながりがうすい。ソクラテスの議論が一時主題からそれることは他にも例があるが、このような短い対話篇の中で、主題と関連がうすい部分がこれだけの量を占めるということは、あまり例がないことであって、全体の構成からみて、できばえ上々とは言い難い。そうとすれば、とくに敢えてこういう構成が採られたについて、この插話は単なる余談ではなく、それを語ることに何らかの作者の意図がこめられていたのではないか、というふうに考えられる。すでに述べたように、ここでの作者の意図は、ヒッパルコスの賛美・弁護にあったかと思われる。右のごとく考えるとき、この部分の全体の構成における位置付けと、それに託された意図からして、この書がプラトン的といえるかどうか疑問とする者があっても、ゆえなきこととはいえないだろう。

四

これまで述べてきたところからすると、この対話篇が真正のプラトン作品であることを疑うのが当然である、ということになるだろう。しかし、今日までのこの点に関する議論の流れを振り返ってみると、事情はそれほど簡単ではない。

ディオゲネス・ラエルティオス(Diogenes Laertios)の書によると、古代の文献学者アリストパネス(Aristophanes)のプラトン作品分類には、『ヒッパルコス』の名を直ちに見ることはできない。しかし、そこでいわれている「その他」には、この書も含まれていたかと思われる(スイエ)。さらにDiog. L. は、トラシュロスの分類においては、これが真作とされていたことを示し、また、自らもこれを真作としつつ、別の分類を提示している。そうすると、アリストパネスの時代(前三世紀末)から、あるいは、トラシュロスの時代(後一世紀)から、Diog. L. の時代(後三世紀前半)まで、この書は一般的にプラトンの真作にかぞえられていたことになる。しかし、この間に作品の一つ一つについて真偽をめぐる議論がなかったわけではない。そのことは、Diog. L. も伝えている。そうとすれば、この書についても、それを疑う者もあり得たであろう。その一人として、Diog. L. よりやや早く後二世紀後半から三世紀にかけての人、アエリアヌス(Aelianus)がある。けれども、彼のいうところは、僭主ヒッパルコスに関して記すに当って、「もし、この書がプラトンの作であるとすれば、プラトンはこう言っている」というにとどまるのであって、偽書とまで断定しているのではない。

ところが、時代が下るにつれて、事情は一変する。一九世紀に入って、早くシュライエルマッハー(Schleiermacher)などが、いろいろな観点から偽作説を唱え、また、ベック(Boeckh)は、『ミノス』などと共に、この書を他の作者に帰そうと試みた。以後、今日に至るまで、文体論的検討において、この書が前四世紀のアッティカ方言の、

またプラトンの作品の言葉づかいの特色をよく保持していることが、ひろく承認されているにもかかわらず、諸家の説は、これを偽作ないしは模作として、プラトンの作品と区別する点で一致している。文献学上の極端な懐疑主義に対して批判的な態度を示す学者たちさえ、こぞってこの書を偽作とする説に傾いていることは注目すべきことである。

右のような、古代と現代における議論の相違は、いかなる根拠によるのか、それを理解するためにも、訳者なりの論拠をかかげて、真偽について考察しておきたい。

まず、プラトンの作品によく似ている点としては、次ぎのことが挙げられる。導入部において、「とは何か」が問われ、以後の議論はめぐりめぐって、末尾においてその問いに戻る、という形をとっていること。ソクラテスによる問いは、いわゆる二分割法で進められ、極めて卑近な例をとり、また、語呂合せを試みたりして、相手が答えにとまどうような、皮肉なものになっている箇所があること。また、語義の幅のズレをたくみに利用して、相手を窮地に追い込む手法が見られること。プラトンの用いた句にそっくりと思われる箇所、あるいは、その筆法を非常によくとらえていると思われる箇所が散見されること。以上数多の点で、細部において、この書がたくみにプラトン的なソクラテス像をえがき、プラトン的な言葉づかいを含んでいることは、承認されねばならない。したがって、たとえこれが真作でないとするにしても、作者がプラトンの作品、ことに初期・中期のそれによく通じ得たこと、或は、プラトン自身の手によりこの書の校閲を受け得たかと思われるほどに、プラトンに近い人物であったことは疑いない。

とはいえ、他方では非プラトン的な点も、若干指摘し得ることは事実である。すなわち、導入部が唐突のそしりを免れ難いこと。「とは何か」という問いかけは、negative な試みで終るのが通例なのに、ここでは positive な教訓めいたものが引き出されていること。若干の用語において、プラトンに例がないものが見られ(訳注参照)、また、

結論において、τὸ φιλοκερδές という語にこめられた意味合いが、他の作品におけるそれと食い違うこと。さらに、一、二の事実(たとえば、金と銀の比価)の記述に関して、年代的に疑問の余地があること等々が指摘できる。だがしかし、それらの一つ一つを検討してみると、この書を偽作と断ずる決定的な証拠としては、やや薄弱と言わざるを得ない。それよりはむしろ、細部はともかく、全体を通してみて、構成にややぎごちないところがあること、論の運びがやや単調で、論理的にも冗長という印象を受けること、内容的には、いわれている以上のことを考えさせるような含蓄に乏しいことなど、他のプラトン作品とくらべて、表現力において見劣りがするという点が、偽作説に有利な条件となるだろう。さらに、この書が他のプラトン作品には見られないこと、すなわち、議論の流れとかけはなれた形で、史伝の新解釈をも同時に試みている点も、見落してはならないだろう。

このようにみてくれば、古代と現代における立場の相違にもかかわらず、議論はそれなりの根拠から生じていたことが理解できるだろう。ところで、以上のような議論が、結局はプラトンないしはその作品について、あるべき姿を前提して行われているものであることは、充分意識しておかなくてはなるまい。その点を明確にした上で、訳者としては、やはり偽作説に一票を投ずることにしたい。

文献

A テクスト

J. Burnet, *Platonis opera*, II, (Oxford Classical Text), Oxford, 1901 (repr. 1967).

F. Ast, *Platonis opera*, VIII, Leipzig, 1825.〔羅文対訳つき〕

G. Stallbaum und R. Fritzsche, *Platonis opera omnia*, VI, 2, Leipzig, 1885.

W. R. M. Lamb, *Plato, Hipparchus*, (The Loeb Classical Library), London, 1927 (repr. 1964).〔英文対訳つき〕

J. Souilhé, *Platon, Œuvres complètes*, XIII, 2^{e} partie, Dialogues Suspects, (Budé), Paris, 1930 (1960). 〔仏文対訳つき〕

B　訳書

F. Schleiermacher, *Platons Werke*, II, München, 1918.

C　参考書

J. D. Denniston, *The Greek Particles*, Oxford, 1934 (repr. 1966).
U. v. Wilamowitz-Moellendorff, *Platon*, II (Textkritik), Dublin/Zürich, 1920 (repr. 1969).
J. M. Edmonds, *Elegy and Iambus*, I, (The Loeb Classical Library), London, 1931 (repr. 1961).
——, *Lyra Graeca*, II, III, (The Loeb Classical Library), London, 1924 (repr. 1964), 1927 (repr. 1967).
A. E. Taylor, *Plato, The Man and His Work*, London, 1926.

『恋がたき』解説

田之頭　安彦

登場人物

ソクラテス(Socrates)　(対話設定当時の年齢、その他くわしいことは、一切不明)

無名の二青年　(ひとりの美少年をめぐって、恋がたきの関係にある。くわしいことは一切不明であるが、本稿二五二ページを参照されたい)

いわゆる有名校を舞台にえらび、名門の美少年を背景に配しながら、愛知(ピロソピアー)と博学(ポリュマティアー)をはきちがえて自己の知者ぶりをひけらかそうとする高慢な文芸愛好者と、体育や武術の練習のみに熱中して考えることをしない武骨者という、まったく対照的なふたりの青年を脇役として登場させ、さらにかれらを〈恋がたき〉という特殊な関係におくことによって、その対立葛藤を高めていく。そして、そこにソクラテスを登場させ、かれらの対抗意識をたくみにあやつらせながら、その持味をじゅうぶんに発揮させていく……。このような配慮と計算にもとづいて作られたこの対話篇は、構成の面からこれを見れば、小品ながら、一応の成功をおさめているといえよう。しかし、内容や文体の面から検討すれば、そこに、多くのソクラテス・プラトン的な特徴をそなえながらも、なお若干の無視できない疑問点が残されるのである。

この対話篇は、トラシュロス（ローマ皇帝ティベリウス――在位、後一四―三七年――の廷臣）によってプラトン全集のなかにいれられ、[1]『アルキビアデスI』『アルキビアデスII』『ヒッパルコス』とともに第四の四部作集を構成するものとされているし、前二世紀初頭にアレクサンドレイアの図書館長として活躍したアリストパネスらのプラトン作品分類においても、その真作性が疑われているような形跡はないので、[2]かれからトラシュロスをへてディオゲネス・ラエルティオスにいたる時代（三世紀前半）には、この作品は一般にプラトンの真作とみなされていたと考えてよいだろう。[3]ところが、今日では、この作品を偽作とする考えも有力である。いやむしろ、これを偽作とする方が、今日の一般的な評価であると言ってよい。先にあげたトラシュロス自身も、個人的な見解としては、これをプラトンの真作と認めるのにいささか躊躇したのではないかと思われるふしもあるし、[4]プラトンの教説というよりも、むしろそれが変形されているのではないかと疑われるところがあることや用語法に二、三の疑問点が残されること、ソクラテスがあまりにも自己を主張しすぎることなどから、これを偽作とする考えがでてくるわけである。[5]

そこで筆者は、まず、この対話篇に見られるソクラテス・プラトン的な特徴を取りあげ（一）、次に、この対話篇をプラトンの真作とみなすうえで障害となる疑問点を検討したうえで（二）、筆者の見解を示し（三）、最後に、この対話篇の思想内容とその今日的意義について、簡単にふれてみることにしたい。

（1） cf. Diog. L. III. 59. トラシュロスはプラトンの作品を九つの四部作集に分類したが、筆者が翻訳にあたって底本として使用したバーネット版プラトン全集も、この分類に従っている。

（2） Diog. L. III. 61-62 には、文献学者アリストパネスらがプラトンの諸対話篇を五つの三部作集に分類し、第一の三部作集には『国家』『ティマイオス』『クリティアス』を、第二のそれには『ソピステス』『ポリティコス』『クラテュロス』を、第三のそれには『法律』『ミノス』『エピノミス』を、第四のそれには『テアイテトス』『エウテュプロン』『ソクラテスの弁明』を、そして第五のそれには『クリトン』『パイドン』『書簡集』を、それぞれおさめたが、その他の作品はひとつひとつになっていて秩序がない、というようなことが伝えられている。ここには『恋がたき』の名前はあげられていないが、ディ

オゲネス・ラエルティオスが当時偽作とされていた書名をあげているところに『恋がたき』が含まれていないところを見ると、アリストパネスらの分類の「その他」の中に、この対話篇が含まれていたと考えることもできる。

(3) ディオゲネス・ラエルティオスが『恋がたき』を偽作とみなした形跡はない。

(4) Diog. L. IX. 37は、トラシュロスの言として、「もし『恋がたき』がプラトンの作ならば……」ということばを伝えている。もちろん、ここには彼が『恋がたき』を偽作とみなしたとは述べていないけれども、彼のことばの言いまわしに注目する必要がある。

(5) cf. J. Souilhé, *Platon, Œuvres complètes*, XIII, 2e partie, pp. 107–112; W. R. M. Lamb, *Plato, The Lovers*, (The Loeb Class. Text), pp. 308–311.

一

いわゆるプラトンの初期対話篇群は、一般的に言って、明快で活気にみちた、それでいて自然な会話体で書かれており、技巧をこらした美しい表現で文学的な効果を求めるというよりも、むしろ人びとの自然で素朴なこころに訴える面が多いが、後期の作品群に移っていくにつれて、この傾向は失われ、登場人物の性格を活かした葛藤劇的な色合もなくなって、むしろいわゆる学術上の著作といったような面が強くでてくる。[6] このような点を参考にしながら本対話篇を見れば、導入部での簡潔でいきいきとした舞台描写、恋がたきの関係にあるふたりの青年の対照的な性格と対抗意識から生じる活気にみちた会話の進行、そして、それらを背景にしてもりあがりをみせる劇的な迫力等々、明らかに本対話篇は、初期作品群の特徴と思われるものをそなえている。

それに、本対話篇では、「どんなものだろうと、もともとそれが何であるかを知らなければ、それが立派なものかみっともないものかを知ることはできない」という考えのもとに、「愛知とは何か」という問題が追究されるのであるが(133C sqq.)、このような問題のとらえ方を、われわれはプラトンの初期作品群の特徴のひとつとみなす

こともできるであろう。すなわち、たとえば『ヒッピアス(大)』は〈美〉を、『エウテュプロン』は〈敬虔〉を、『ラケス』は〈勇気〉を、それぞれ「……とは何か」という形で追究しているのであるが、これはいわゆる〈ソクラテス的対話篇〉に見られる問題のとらえ方の特色なのである。[7]

なお、134Eでは、「魂に学問を植えつけたり播いたりすることについて、どのようなものをどれほどの量にすれば適度なのか」という重要な問題が提出されるが、これは答えられないままに終っている。このような対話の進め方も初期対話篇の特色のひとつとみることができるだろうし、137C～138Bでは、知識から技術へという形で対話が発展し、そこから思慮の徳(節制)や正義の問題が論じられるが、このような対話の発展形式は『アルキビアデスI』(128B～C)や『エウテュプロン』(14D～C)にも見られるもので、これをソクラテスの論述様式のひとつの特徴と考えることもできる。[8]

このように、本対話篇はプラトンの初期対話篇に見られる多くの特徴をそなえており、もしほかに問題となるようなところがなければ、本対話篇をプラトンの初期の作とみなすことも可能であろう。[9] しかし、すでに述べたとおり、これをプラトンの作とみなすには、まだ若干の疑問点が残されているのである。次に、それらの点を列挙し、検討を加えることにしたい。

（6） cf. I. M. Crombie, *An Examination of Plato's Doctrines*, pp. 10–11.

（7） cf. G. Frayzer, *The Growth of Plato's Ideal Theory*, pp. 10–16; R. Robinson, *Plato's Earlier Dialectic*, pp. 49–53.

（8） cf. G. Frayzer, *op. cit.*, p. 12.

（9） クロンビーは本対話篇をプラトンの真作とみなし、かなり初期の作品と考えている(I. M. Crombie, *op. cit.*, p. 12)。

二

すでに紹介したことであるが、本対話篇を〈偽作〉とみなす理由のひとつに、「この対話篇に見出されるプラトンの教説は、変形されたそれにすぎない」ということがあげられている。この点について偽作説を支持する者たちは、本対話篇の138 A sqq. に述べられている有名なデルポイの神殿にかかげられた「なんじみずからを知れ」ということばの意味の解釈に注目し、思慮節制の徳と正義を同視したり、家の支配と国家の支配を同視するのはプラトン的でないと主張するのである。しかし筆者は、これを〈偽作〉の理由とするのは誤りであると考える。なぜなら、これは本対話篇のみに見られる特異な見解ではないからである。ちなみに『アルキビアデスⅠ』(133C～134D)をひもといてみると、自知をもって克己節制もしくは思慮の健全さを示すものと解し、これと正義を、家をととのえ国を治めるうえで、欠くことのできないものとみなす考えが、はっきりと述べられているのである。この『アルキビアデスⅠ』は、一九世紀以降の一部の学者によって、本対話篇と同じように偽作の疑いをかけられたこともあるが、今日では、むしろこれを真作とする見解の方が有力であるから、ここにひとつの証拠として取りあげても、支障はないと思われる。しかし、たとえこれを無視するとしても、たとえば『ゴルギアス』(504D～507E)にも、正義と思慮節制の徳の不離の関係を説き、これを公私にわたってわれわれの行動を律すべきものとみなす考えが示されているし、これを参考としながら本対話篇の問題の箇所を読むならば、そこに非プラトン的なものを読みとることの方が、かえって困難であろう。つまり、本対話篇は教説内容の面では、やや論述に深みを欠き、表面をなでただけにすぎないような感じを受けるとしても[10]、それがただちに本対話篇を偽作と決めつける理由とはなりえないであろう。

次に用語法に二、三の疑問点が残るということについて見てみよう。問答形式のことばづかいは大体において前期の作品の特徴を示しているが、後期の作品で多く見られるものも混入しており、後期の作品にしか用いられていないものも、きわめてわずかではあるが用いられている[11]。しかし、用語法(文体統計法'stylometric method')によ

る執筆年代や真作・偽作の問題の究明は、作品の思想内容や論述様式などの綿密な比較検討と併用されることによってのみ、その効果を期待できるのだから、ただこれのみによって本対話篇の真偽を断定することはできない。だが、ひとつの疑問点として残されることは否定できないだろう。

次に、「ソクラテスが自己を主張しすぎる」という点について。本対話篇は『カルミデス』や『リュシス』と同じように、ソクラテスがかつておこなった対話を物語るという形式をとっている。このような形をとると、対話人物の性格や動作あるいは周囲の状況などをくわしく説明することができて、一種独特の劇的雰囲気をもりあげるのに効果がある。すでに述べたとおり、本対話篇もこの点では一応の成功をおさめているといえよう。しかし、本対話篇では、無名の二青年が最後までソクラテスの対話の相手をつとめるという重要な役割を演じているが、このようなことは、いわゆる〈ソクラテス的対話篇〉では、きわめて異例のことと言ってよい[12]。しかも、ソクラテスの相手をつとめる二青年が文字通り〈無名〉で未熟な若者であるということによるのかもしれないが、ソクラテスのことばに positive で何か教訓めいた感じを受けるところがある(たとえば 137B, 139A)。おそらく偽作論者たちの「ソクラテスが自己を主張しすぎる」という見解は、この点を指しているのだろうが、これも「……とは何か」という本質定義を求めるソクラテス的対話篇においては、きわめて異例であるといえよう[13]。

最後に、本対話篇は、「ぼくが以上の話をすると、賢い方の男は、自分が前に話したことを恥じて沈黙し、無学な方の男は、あなたのおっしゃるとおりです、と言った。そしてほかの者たちは、ぼくの話を賞讃したのだった」という、ソクラテスのことばで終っている。もし、本対話篇の内容の報告者がソクラテスではなく、ソクラテスとふたりの若者の問答を聞いていた第三者であれば(したがって、右のことばが、「ソクラテスが以上の話をすると……、……そしてほかの者たちは、ソクラテスの話を賞讃したのだった」となっておれば)、それなりに納得もできよう。しかし、これがソクラテス自身の口から語られるということは、プラトンの他の作品にえがかれているソ

クラテス像からして、ちょっと考えられないことである。[14] われわれはここに、誰かソクラテスを尊敬していたプラトン以外の者の手を感じざるをえない。

(10) cf. W. R. M. Lamb, *op. cit.*, p. 311.

(11) たとえば、135E6 には τάχ' ἂν ἴσως というふうに τάχα と ἴσως が組になって用いられているけれども、これはリッターの調べによると、『ソピステス』『ポリティコス』『ピレボス』『ティマイオス』『法律』など、後期の作品にしか見られない語法である(C. Ritter, *Untersuchungen über Plato*, S. 90)。

(12) フレイザーはソクラテス的対話篇に属するものとして、『ソクラテスの弁明』『クリトン』『ヒッピアス(大)』『ヒッピアス(小)』『イオン』『エウテュプロン』『ラケス』『アルキビアデス I』――ただし彼は、この作品の真作性には疑問をもっている――『リュシス』『カルミデス』『エウテュデモス』『プロタゴラス』の一二の対話篇をあげているが(cf. G. Frayzer, *op. cit.*, p. 10)、この中には、無名氏が重要な役割を演じているものはない。

(13) たとえば『エウテュプロン』と本対話篇を比較してみるならば、この点の相違はきわめて明らかである。

(14) 悪くとれば、このことばは自分の知者ぶりをひけらかしているようではなもちならないものであり、〈無知の知〉を説くソクラテスの口から、このようなことが言われるとは、とても考えられない。

三

以上、細部にわたって、本対話篇に見られる〈ソクラテス・プラトン的な要素〉とそうでないものを取りあげてきたが、それらを比較検討することによって真作・偽作の問題に決着をつけなければならないとすれば、やはり筆者も今日の一般的な見解の方にくみし、本対話篇を偽書と考えざるをえない。

とはいえ、本対話篇は悪意をもって(あるいは意識的に)作られた偽書ではないであろう。おそらく、本書をてがけたのは、プラトンの直弟子のひとりではないだろうか。ソクラテスやプラトンに心酔し、その考え方や教えをよく理解していた者であれば、師プラトンの文体をまねて対話篇を書くことはできるだろう。しかし、やはりそこに

は、何か不自然な面があらわれてくるものである。すでに見てきたとおり、教説内容に非プラトン的な要素はない。それどころか、あまりにもプラトン的であると言えないこともない。しかし、〈愛知(ピロソピアー、哲学)とは何か〉という、きわめて重大な問題を取りあげながら、その論述には深みを欠き、わずかなスペースでこじんまりとまとめあげている。はたしてプラトンが、このような芸当をやってのけるだろうか。何かしら、優等生の手法を感じさせる作品である。また、用語法の点についても、同様の感じを受ける。親しくプラトンの教えを受けた者であれば、師の語法には通じていたであろう。しかし、それが前期の作品から後期の作品に移っていくにつれて、徐々にではあるが変わっていることまでは注意しなかったのではなかろうか。もし、そうだとすれば、本対話篇に見られる用語法の疑問点も解決されるであろう。

右のような点を考慮にいれたうえで、筆者は次のように考える。すなわち、「プラトンがアカデメイアで弟子たちの教育に専念していた頃か、あるいは彼の没後まもなく、その弟子たちの誰かが、師の口を通して伝えられたソクラテスの教えをよりよく理解するために、師の初期の作品の文体をまねて本対話篇を書き、それが後になって――おそらく、アレクサンドレイア図書館建設当時、すなわちポレモンがアカデメイアの学頭をしていた時代(前三一四―二七六年頃)に――誤ってプラトン自身の著作の中にいれられてしまった」と。このように考えれば、(1)本対話篇のソクラテスのことばに、positiveで教訓めいたものが見られるということも、(2)ソクラテスが自分を讃美しているような感じのすることばで本対話篇が終っているということも、ともに理解できるのではなかろうか。なぜなら、(1)は本対話篇の著者が自分自身に言い聞かせるつもりで書いたと考えられるし、(2)は著者のソクラテスにたいする強い尊敬心のあらわれと解することができるからである。ただし、残念ながら、以上の解釈は、あくまでも推測の域をでない。

四

しかしいずれにせよ、内容や文体からして、本対話篇を広義の Corpus Platonicum のなかにいれ、プラトンの教えを理解するうえでのひとつの指針とすることに異議をとなえる者はいないと思われるので、そのような観点から、最後に、本対話篇にみられるプラトンの教説と、その今日的な意義とでもいうべきものを概観していくことにしたい。

この対話篇は、〈愛知(哲学)について〉という副題がつけられていることからもわかるように、プラトンの哲学観の一面を知るうえで、好適の学習書であるといえよう。対話はまず、愛知(ピロソピアー)をもって博学(多くを学ぶこと＝ポリュマティアー)とする文芸好きの青年の主張をめぐって展開していく。しかしソクラテスは、「知を愛し求めようとする者は……一生のうちに、できるだけ多くのことを学び知っていくようにしなければならない」(133C)とするかれの主張にたいして、「ぼくは、まず、かれの言っていることに一理ありと思った」と、心情を吐露していることからもわかるとおり、必ずしも全面的に反対しているわけではない。ピロソピアーはなによりもまず〈知への愛〉として、「どんな学問でもえり好みせずに、味わい知ろうとする」(『国家』V. 475C)旺盛な知識欲をその基礎としていなければならないからである。

しかしながら、ソクラテスは、哲学すなわち愛知を博学と同視する文芸好きの青年の見解に、決して同意しているわけではない。真の哲学者に要請されることは、「正しい言わり(こと)をもって魂の面倒をみること」(『定義集』414B)であり、そのためにもかれは、その飽くことを知らぬ旺盛な知識欲を、多くを知るということから何を知るべきかということの方へ向けかえていかねばならない(135A)からである。では、哲学者の知らねばならぬものは何だろうか。「哲学者は、愛知者の名声にふさわしく、多くの重要な技術に心得のあるものでなければならぬ」、つまり愛

知の対象は専門の諸技術であるというのが、文芸好きの青年の答えである(135B)。しかし〈多くの技術〉どころか、わずか〈二つの技術〉でも同一人がその道の専門家と同じ程度に精通するということは〈人間の能力からして〉不可能なことである。ただし、専門家と同程度の厳密な知識を必要とするのではなく、専門家の言うことを理解して意見を述べることができればよいというほどのことなら、可能かもしれない。しかしその場合には、各技術分野にはそれぞれの専門家がいるのだから、哲学者はいつもかれらに第一の座をゆずり、二流どころの立場にあまんじなければならないようになるし、ひいては、いずれの技術分野でも役にたたない〈劣悪な人間〉だということにもなりかねないであろう(135D〜136E)。

このような観点から、ソクラテスは哲学を専門諸技術に関する学問とする文芸好きの青年の考えに疑問を示し(137D)、具体的な例をあげながら、〈ものを善くする術〉と〈善さ・悪さを識別する術〉、それに〈正しい懲らしめをあたえる術〉へと話題を向け、「なんじみずからを知れ」というデルポイの箴言を引き合いにだして、愛知(哲学)者たるものに要請される徳(卓越性)として、思慮の健全さを示すものとしての節制と、それに基礎をおく正義をあげ、問題を発展させながら、国家を正しく統治していく術としての哲学を説くのである。

さて、本対話篇は、このように哲学と政治の結びつきを説き、哲学をもって〈専門的な諸技術をとりまく周辺の業(わざ)〉とする見解を否定して終るのであるが、このような考えは、たとえ対話の運びにやや性急な面がみられるとしても、やがて哲人政治の理想を説く教えとして、『国家』のなかでくわしく論じられるようになるのをみれば、決して奇異な感じをあたえるものではないであろう。むしろわれわれは、この小品に、プラトンの哲学観が、たとえその一面に限られるとしても、要領よくまとめられているのを見るとき、かえってその方に驚きを感じるのである。すでに述べたように、本対話篇は、そのような意味で、プラトンの教えのいわば手引書の役割をはたしていると言えよう。

そしてこのような観点から、もう一度本対話篇を読みなおすならば、われわれはあらためて、本対話篇の教説の現代的意義というものにも、注目せざるをえなくなるであろう。たとえば哲学を専門技術もしくは科学に関するものとする見解にたいする批判を通して、われわれは近代実証科学の発展とともに、みずからを科学の婢たらしめんとする傾向をますます強めている今日の一部の哲学にたいする警鐘を聞くことができるであろうし、社会生活が複雑化し、それにともなって学問や仕事がますます専門化されている今日において、いったい哲学は何を考え、何をなすべきであろうかという、哲学の課題というべきものにたいする答えを、自知の哲学と政治との結びつきを説く教えのなかに見出すことも可能であろう。いいふるされたことばであるが、古くて新しい思想家、それがプラトンである。このことは、本書がプラトンの作か否かに影響されるものではない。すでに述べたように、本書の教説はプラトンのものだからである。

文献

A テクスト

J. Burnet, *Platonis opera*, II, (Oxford Classical Text), Oxford, 1901 (repr. 1946).

F. Ast, *Platonis quae exstant opera*, VIII, Leipzig, 1825. 〔羅文対訳つき〕

W. R. M. Lamb, *Plato*, *The Lovers*, (The Loeb Classical Text), London, 1927 (repr. 1955). 〔英文対訳つき〕

J. Souilhé, *Platon*, *Œuvres complètes*, XIII, 2ᵉ partie, Dialogues Suspects, (Budé), Paris, 1930 (repr. 1960). 〔仏文対訳つき〕

B 訳書

F. Schleiermacher, *Platons Werke*, II, 3, Berlin, 1861.

C　参考書

Diogenes Laertios, *Lives of Eminent Philosophers*, ed. R. D. Hicks, (The Loeb Classical Library), 1925 (repr. 1957).

C. Ritter, *Untersuchungen über Plato*, Stuttgart, 1888.

——, *The Essence of Plato's Philosophy*, tr. by Adam Alles, New York, 1968.

A. E. Taylor, *Plato, The Man and His Work*, London, 1926 (repr. 1963).

G. C. Field, *Plato and his Contemporaries*, London, 1930 (repr. 1967).

H. Diels & W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 6th ed., Berlin, 1951–2.

R. Robinson, *Plato's Earlier Dialectic*, Oxford, 1953.

J. D. Denniston, *The Greek Particles*, 2nd ed., Oxford, 1954.

I. M. Crombie, *An Examination of Plato's Doctrines*, London, 1962.

G. Frayzer, *The Growth of Plato's Ideal Theory*, New York, 1967.

E. Zeller, *Plato and the older Academy*, tr. by S. F. Alleyne & A. Goodwin, New York, 1962.

F. Ueberweg, *Grundriss der Geschichte der Philosophie*, I, Berlin, 1926.

W. Lutoslawski, *The Origin and Growth of Plato's Logic*, London, 1897.

W. D. Ross, *Plato's Theory of Ideas*, Oxford, 1953.

田中美知太郎『「われ」の自覚とギリシア思想』四章(『田中美知太郎全集』第六巻)。

——『古代哲学』(『田中美知太郎全集』第三巻)。

『恋がたき』索引

数字と ABCDE は，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字と BCDE(A は数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

サ 行

タ 行

『ヒッパルコス』索引

数字と ABCDE は，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字と BCDE(A は数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

カ 行

サ 行

ナ 行

ハ 行

ヤ 行

ラ 行

ワ 行

『アルキビアデス II』索引

数字と ABCDE は，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字と BCDE(A は数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

『アルキビアデスⅠ』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア行

カ行

プラトン全集 6　　第4回配本(全15巻　別巻1)

1975年1月6日　発行

¥2200

訳者　田中美知太郎（たなかみちたろう）
　　　川田殖（かわだしげる）
　　　河井真（かわいしん）
　　　田之頭安彦（たのがしらやすひこ）

発行者　岩波雄二郎

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　精興社印刷・牧製本